

心要鈔序

唯識中道^ハ了義^ノ言教^ト。蓋解深密^ニ云^{ヘリ}矣。其華嚴楞伽楞嚴等。識分之說。咸蘊^ニ在於其中^一焉。推^ニ之於我曼荼羅教^一。則摩訶梅多羅菩薩之三摩地門也。昔護法清辨^ニ二大士^一於^ニ有空^一二教^一互建^ニ法幢^一。空師請^ニ與^ニ論決^一。有師謝^レ不^レ違。於是空師入^ニ修羅窟內^一。將^レ待^ニ慈尊出^一世^一以質^上焉。後資終莫^レ辨^ニ乎其落處^一也。及^下慈恩^三藏弘^ニ宣支那^一。道昭大德傳^中播日域^上。風化各開^ニ其土^一。學者日盛。雖然多拘^ニ攀名相^一立破是務。徒競^ニ口吻^一不^レ揆^ニ進修^一。誰復求^ニ夫一真之門^一。二轉之果種^ニ熟之於有漏識田^一之中矣哉。解脫上人命世碩德。學優^ニ行高^一。難^レ測^ニ其位^一乎何等域。斯書也特指^ニ示唯識觀心之要^一。以資^ニ後資^一。其語明^ニ諷諄^一無^レ倦。新學其由^レ此而進。則弊惑可^レ治。觀境易^レ契。隣寶之譏。庶幾亦由^レ此而免矣。學^ニ夫秘密一乘甚深之教^一者亦唯由^レ是階。則何高不^レ可^レ登。何遠不^レ可^レ致焉。蓋其片言隻語性本^ト是如。而一眞法界之體。曼荼羅海之所流^{ナレハ}。則阿字不生之觀。性具性起之談。亦何得^レ外^レ之乎。論者其蕩^ニ滌情執^一。修習爲^レ先。徑以^レ了^レ得如幻三昧^一爲^ニ之標的^一焉。則是上人之本志也邪。曩者余

p.50b

p.50c

書き下しは講録による

講録『法相心要鈔講録』・昭和

三年度安居講録・嗣講小島惠見述

日大『増補改訂日本大藏經』

『西域記』十に清弁菩薩、南天竺の案達羅國の修羅窟に入りて彌勒の出世を待つことを説く。

心要鈔序

唯識中道は了義の言教と、蓋し解深密に云へり。其れ華嚴楞伽楞嚴等は、識分の説なり。咸く其の中に蘊在せり。之を我が曼荼羅教に推するに、則ち摩訶梅多羅菩薩の三摩地門なり。昔し護法清辨の二大士、有空の二教に於て、互に法幢を建つ。空師は與に論決せんと請ひ、有師は違なきを謝す。是に於て空師は修羅窟内に入る。將に慈尊の出世を待て以て質さんや。後の資も終に其の落處を辨ずること莫きなり。慈恩三藏支那に弘宣し、道昭大徳日域に傳播するに及び、風化各の其の土を開く。學ぶ者、日に盛なり。然りと雖も多く名相を拘攀し立破に是れ務む。徒らに口吻を競ひて進修揆ず。誰も復た夫れ一眞の門、二轉の果、之を有漏識田の中に種熟するを求めんや。解脫上人は命世の碩徳なり。學優に行高し。何等の域に其れ位するをか測り難し。斯の書なり、特に唯識觀心の要を指示し、以て後の資を資ふ。其の語、明^ニ諷諄^一にして諄諄に倦むこと無し。新學は其れ此に由て進む。則ち弊惑は治すべし。觀境は契り易し。隣寶の譏り、庶幾亦此に由て免ず。夫れ秘密一乘甚深の教を學ぶは亦唯だ是に由て階^ニく^一。則ち何ぞ高くして登るべからず、何ぞ遠くして致るべからず。蓋し其の片言隻語の性は本^ト是の如し。而して一眞法界の體は、曼荼羅海の所流なれば、則ち阿字不生の觀なり。性具性起の談は、亦何ぞ之を外にするを得んや。論する者は其の情執を蕩滌し、修習を先と爲す。徑は如幻三昧を了得するを以て、之を標的と爲す。則ち是れ上人の本志ならんや。曩者余、

有_下副_二墨斯書_一授_二新學_一之志_上。而鞅掌不_レ違。因謀_二之典壽律師_一。律師禪誦之余。口自授_レ之。使_三子弟甲_二乙之_一。既而成。書舖輩請_レ上_二諸梓_一。且更求_レ冒_二一語_一。亦不_二敢深拒_一。聊書以與_レ之云

文化十二乙亥年孟冬日

洛東智積院權僧正慧嶽識

心要鈔

笠置沙門貞慶草

夫_レ聖教之要、不_レ過_二菩提_一。菩提之要、不_レ過_二一利_一。二利之要、不_レ過_二三學_一。三學之要、不_レ過_二一心_一。一心之要、不_レ過_二觀心_一。觀心之要、不_レ過_二念佛_一。念佛之要、不_レ過_二發心_一。發心之要、不_レ過_二覺母_一。今依_レ八門_一聊述_二心要_一。

第一菩提心門^{*}

今明_二八門_一各有_二三義_一。一_一示相。二_二引教。三_三解疑。就_二第一_一菩提門_一。先_ツ示_レ相者。言_二菩提_一者。謂_レ佛智慧_{ナリ}。梵_{ニハ}云_二菩提_一。此_{ニハ}翻_レ爲_レ覺_ト。自覺覺他覺行圓滿_{ナリ}。自覺簡_二凡夫_一。謂_ク凡夫ノ類_ハ不_レ知_二自身_一有_二一_一佛性。不能_レ修證_{スル}。迷_レ理_ニ受_ク苦_ヲ。佛由_二大智_一開_レ如來藏_ヲ。智斷圓明_{ニシテ}如_レ從_レ夢覺_カ。故_ニ名_ク自覺_ト。覺他_ハ簡_二二乘_一。聲聞緣覺_ハ厭_レ苦欣_レ寂。自悟_二生空_一住_二般涅槃_一。然_{ルニ}無_{クシテ}大_レ悲_一不_レ廣_ク利_レ生_ヲ。不_レ

p.51a

*心||講録

墨を斯の書に副へて新學に授くるの志有り。而して鞅掌にして違あらず。因に之を典壽律師に謀るに、律師之を禪誦し、余、口自り之を授け、子弟に之を甲乙せしめ、既に成ぜり。書舖の輩ら諸梓を上ぐるを請ふて、且く更に一語を冒り求む。亦敢て深く拒まず。聊か書を以て之に與ふと云ふ

文化十二乙亥年孟冬日

洛東智積院權僧正慧嶽識

心要鈔

笠置沙門貞慶草

夫_レ聖教の要は菩提に過ぎず、菩提の要は二利に過ぎず、二利の要は三學に過ぎず、三學の要は一心に過ぎず、一心の要は觀心に過ぎず、觀心の要は念佛に過ぎず、念佛の要は發心に過ぎず、發心の要は覺母に過ぎず、今八門に依りて聊か心要を述べん。

第一菩提心門^{*}

今、八門を明すに各の三義有り。一に相を示す。二に教を引く。三に疑を解く。第一の菩提門に就て、先づ相を示すと、菩提と云ふは、謂く佛智慧なり。梵には菩提と云ふ。此には翻して覺と爲す。自覺覺他覺行圓滿なり。自覺は凡夫に簡ぶ。謂く凡夫の類は自身に二の佛性有ることを知らず。修證すること能はず、理に迷ひて苦を受く。佛、大智に由て如來藏を開きて、智斷圓明にして夢より覺むるが如し。故に自覺と名く。覺他は二乘に簡ぶ。聲聞緣覺は苦を厭ひて寂を欣ぶ。自ら生の空なるを悟り般涅槃に住す。然るに大悲無くして廣く生を利せざれば、

令^三他^ヲ覺^シ生死涅槃^ヲ。佛^ハ自^ラ證^シ入^リ後得門^ノ中^ニ。悲^シ、
 他^ノ未^ダ了^レ顛倒^ヲ受^テ苦^ヲ。現身說法^{シテ}善^ク導^ク群生^ヲ。故^ニ
 名^ク覺他^ト。覺行圓滿^ハ簡^ク菩薩^ヲ。謂^ク菩薩^ハ由^テ大智^ト、
 大悲^ト具^フ行^ニ二利^ヲ。然^レ猶^モ居^{シテ}因^ニ行願未^ダ滿^ズ。諸佛^ハ
 世尊^ハ因^テ圓果滿^{シテ}。超^{スレ}出^ス凡^聖。獨^リ稱^ス大覺^ト。
 二引^ト教者^ヲ。法花^ニ云^フ。諸佛世尊^ハ唯^ニ以^テ一^ノ大事^ノ因^ニ
 緣^故出^テ現^ス於^テ世^ニ。欲^シ令^テ衆生^ヲ開^キ佛^ノ知見^ヲ使^レ得^ル
 得^中清淨^ヲ故^ニ出^テ現^ス於^テ世^ニ。欲^シ示^シ衆生^ニ佛^ノ之^知
 見^ヲ故^ニ出^テ現^ス於^テ世^ニ。欲^シ令^テ衆生^ヲ悟^ク佛^ノ知見^ヲ故^ニ
 出^テ現^ス於^テ世^ニ。欲^シ令^テ衆生^ヲ入^リ佛^ノ知見^ノ道^ニ故^ニ出^テ現^ス
 於^テ世^ニ。乃至如來^但以^テ一^ノ佛乘^ヲ故^ニ爲^ス衆生^ノ說^ク
 法^ヲ。無^レ有^テ餘乘^ノ若^ハ二^ノ若^ハ三^ノ。舍利弗^一一切十方^ノ
 諸佛^ノ法^モ亦^レ如^シ是^ニ。經^旨在^之。必^具誦^持。偈^云。十方佛土^ノ中^ニハ。
 唯^有一^ノ乘^ノ法^ノ。無^レ二^モ亦^無三^モ。除^ク佛^ノ方便^ノ說^ヲ。開^ト
 者^無上^ノ義^ヲ。謂^ク佛^ノ菩提^ヲ涅槃^ト二^ノ果^{ナリ}。示^ト則^チ涅槃^ヲ。悟^ト
 則^チ菩提^ヲ。入^ハ謂^ク二^ガ因^ノ初地^ニ已^上ナリ。智^ト及^ビ智處^ト共^ニ名^テ
 爲^ス智^ト。菩提^ト菩提斷^ト總^テ名^ク菩提^ト。故^ニ知^ル佛慧^ハ通^ス
 二^ノ轉依^ニ。即^レ是^レ如來^ノ大事^ノ因緣^{ナリ}。唯識^ニハ云^フ。此^レ即^チ無^レ
 漏界^{ナリ}。不^思議^{ナリ}。善^{ナリ}。常^{ナリ}。安樂^{ナリ}。解脫身^{ナリ}。大^牟尼^ノ名^ク
 法^ト。謂^ク法身^ト般若^ト解脫^ト三^ノ事^ノ圓滿^ス。此^レ牟^尼尊^ノ所^レ
 得^ノ二^ノ果^{ナリ}。所以^ニ法界^一心^ノ日昇^リ高山^ニ。寂^默三^ノ點^ノ
 風^暗雙^林。如來^ノ一^ノ化^ノ初後^無二^ニ。滅^後弘^經亦^レ
 復^レ可^レ知^ス。
 三^ニ解^レ疑^ト者^ヲ。問^フ言^フ佛性^ト者^ハ何^{ナル}法^ゾ耶^ト。答^フ一^ニは
 理^佛性^ト。謂^ク眞如^也。性^トは是^レ體^ノ義^ヲ。大^功德^ノ法^ノ眞

*知||智(日大)

*性||性者(日大)

他をして生死涅槃を覺らしめず。佛は自ら後得門の中に證入して、
 彼の未だ了せず顛倒して苦を受くるを悲しみ、現身說法して善く群生を導く。故に
 覺他と名く。覺行圓滿は菩薩に簡ぶ。謂く菩薩は大智と
 大悲とに由て具に二利を行ず。然れども猶、因に居して行願未だ滿てず。諸佛
 世尊は因圓果滿して、凡聖に超出すれば、獨り大覺と稱す。
 二に教を引くとは、法花に云く、諸佛世尊は唯、一大事因縁を
 以ての故に世に出現す。衆生をして佛の知見を開かしめ、
 清淨を得しめんと欲するが故に世に出現す。衆生に佛の知見を示さんと
 欲するが故に世に出現す。衆生をして佛の知見を悟らしめんと欲するが故に
 世に出現す。衆生をして佛の知見の道に入らしめんと欲するが故に世に
 出現す。乃至如來但だ一佛乘を以ての故に衆生の爲に法を説きたまふ。
 餘乘の若しは二、若しは三有ること無し。舍利弗、一切十方の諸佛の法も
 亦是の如し。「經の旨之に在り。必ず具に誦持すべし」偈に云く、十方佛土の中には
 唯だ一乗の法のみ有り。二も無く亦三も無し。佛の方便の説を除くと。開とは
 無上の義、謂く佛の菩提と涅槃との二果なり。示とは則ち涅槃、悟とは
 則ち菩提、入は謂く二が因、初地已上なり。智と及び智處とを共に名けて
 智と爲す。菩提と菩提斷とを總て菩提と名く。故に知る、佛慧は
 二轉依に通ず。即ち是れ如來大事の因縁なり。唯識^{【唯識二十論】}には云く、此れ即ち無
 漏界なり、不思議なり、善なり、常なり、安樂なり、解脫身なり、大牟尼なるを法と
 名くと。謂く法身と般若と解脫との三事圓滿す。此れ牟尼尊の所
 得の二果なり、所以に法界一心の日、高山に昇り、寂默三點の
 風、雙林に暗し。如來の一化初後二無し。滅後の弘經亦
 復た知るべし。
 三に疑を解すとは、問、佛性と言ふは是れ何なる法ぞや。答、一には
 理佛性。謂く眞如なり。性とは是れ體の義。大功德の法の眞

義ナリ。四智心品親生ノ因縁ナリ。證スルヲ理名ニ法身ト名ク。智を生ずるを

報身ト名ク。或は自性の義ナリ。竝ニ通ニ理智ニ。此ノ二ノ佛性名ニ

如來藏ト名ク。藏トは謂ク覆藏ナリ。或は是れ含藏ナリ。在纏出纏因位

果位理智ニ性思惟シテ可レ知。問。五性の機異ニシテ

定性ノ二乗ト畢竟無性トハ不能成佛スル。如來爲レ彼豈ニ

授ニ菩提。答。佛ハ於諸子ニ愛シテ無ニ偏黨。欲レ令三

一切ニ普ク得レ佛智。機根不レ堪或ハ趣ニ異乘ニ。非ニ是

佛意ニ。若論ニ佛意唯爲ニ菩薩ノ欲レ令一切ノ衆ヲシテ如

我等ニ無レ異。亦復此意。設依ニ悉有佛性ノ之宗ニ

教ノ違ニ亦同シ。衆生無レ盡。佛化不レ窮故。若對シテ未

熟ニ強授ニ一乘。法可レ乖ク機若唯逗ニ有縁ニ。五性*

亦不レ違。問。自未レ了性豈ニ輒趣求センヤ。若無ニ佛

性設求無レ益。答。除佛以外不能ニ詳知。滅

後諸衆依レ誰印可セン。若不ヲ以知不レ修。遺教有ニ何

益ニ。方ニ知五乗ノ根機隨テ性ニ自趣ク。設ヒトモ成就ニ皆

有ニ巨益。成ニ不愚法ト有ニ堪能故ナリ。況ヤ復六十ノ苦

薩仕ニ五百佛所ニ。不能ニ修學スルノ無相ノ般若。遂墮ス

二乘ノ地ニ。當レ知遺法ノ之中ニ設ヒ遇ニ大乘ニ。究竟ノ妙果

得者甚少シ。非レハ機不能。設ヒ亦聞コトヲ。多ク不ニ信受ニ

法華ニ云。若有比丘實得ニ阿羅漢。若不レ信此ノ

法。無有ニ此處。除佛滅後現前ニ無レ佛。我レ等福

智微劣ニシテ。人中ニ下賤ナリ。若無ニ宿習。於ニ無上ノ法一萬

一難信。今於ニ佛語ニ既無ニ疑謗。以愚ニ還知有コトヲ

大乘性。猶不ニ趣寂ニ。況爲ニ無姓ニ耶。亦設レ得レ

聞コトヲ。佛姓ノ闕具。甚深ノ境界法爾ト疎遠ナリ。不レ可ニ思

*性||姓(講録)

*姓||性(日大)

趣寂||入寂

實の體なり。二に行佛性。謂く法爾無漏の種子なり。性は是れ因

義なり。四智心品が親生の因縁なり。理を證するを法身と名く。智を生ずるを

報身と名く。或は自性の義なり。竝に理智に通ず。此の二の佛性を

如來藏と名く。藏とは謂く覆藏なり。或は是れ含藏なり。在纏出纏、因位

果位、理智二性、思惟して知るべし。問、五性の機、異にして

定性の二乗と畢竟無性とは成佛すること能はず。如來、彼の爲に豈に

菩提を授んや。答、佛は諸子に於て愛して偏黨無し。一切をして

普く佛智を得しめんと欲す。機根堪えずして或は異乘に趣く、是れ

佛意に非ず。若し佛意を論ぜば唯だ菩薩の爲なり。一切の衆をして我の如く

等くして異無からしめんと欲すと、亦復た此の意なり。設ひ悉有佛性の宗に依るも、

教の違すること亦同じ。衆生盡ること無し。佛の化、窮まざるが故に。若し未

熟に對して強く一乘を授けば、法、機に乖くべし。若し唯だ有縁に逗せば、五性*

亦違はず。問、自ら性を了らざれば豈に輒く趣求せんや。若し佛性

無くば設ひ求むとも益無し。答、佛を除きて以外は詳かに知ること能はず。滅

後の諸衆、誰に依て印可せん。若し知らざるを以て修せずば、遺教何の

益か有らん。方に知んぬ、五乗の根機は性に隨て自ら趣く、設ひ成就せずとも皆

巨益有り。不愚法と成るに堪能有るが故なり。況や復た六十の苦

薩は五百佛所に仕へて、無相の般若を修學すること能はず、遂に

二乗の地に墮す。當に知るべし。遺法の中に設ひ大乘に遇へども、究竟の妙果

得る者甚だ少し。機に非んば能はず。設ひ亦聞くことを得るも多く信受せず。

法華に云く、若し比丘有りて實に阿羅漢を得て、若し此の法を信ぜずは、

此の處り有ること無し。佛滅後に現前に佛無きをば除くと。我れ等、

福智微劣にして、人中に下賤なり。若し宿習無くは、無上の法に於て萬が

一も信じ難し。今、佛語に於て既に疑謗無し。愚なるを以て還て知ぬ

大乘の性有ることを。猶を趣寂にあらず。況や無姓たらんや。亦設し

聞くことを得るとも、佛性の闕具は、甚深の境界法爾として疎遠なり。思惟す

惟^一。我等恒時ノ論談決擇引^レ教推^スニ理^ヲ。種姓地中^ニ。既有^リ堪能^一。龍子^ハ雖^レ幼^{ナリト}。何得^ニ怯弱^{ナルヲ}。故法華^ニ云^フ。若^シ有^レ聞^{コトヲ}法者^ハ。無^ニ一^ト不^ト云^フ。成佛^一。般若^ニ亦説^ク。一^ヒ經^レ其^レ耳^ヲ定^テ得^テ菩提^ヲ。信根^具足^セ。不^レ久^必成^ス。中^ニ道^ノ之^レ教^ハ。普^ク爲^ス五^乗ノ者^ノ無^レ我^ノ道理^一。人天^ノ戒善^等。一分^ノ義^也。未^ニ必^具開^カ。或^ハ生^ニ異^解。若^シ阿^陀那^一。教^甚深^ノ義^趣。不^レ疑^爲機^ト。生死^ノ源^底。聞^ニ名^ヲ已^ニ足^ス。況^ヤ此^土是^レ如^來所^ノ記^ト。東^北方^ノ國^諸。菩薩^乘人^歸信^{シテ}。般^若受^持讀^誦。書^寫供^養。機^感相^應。現^ニ得^ニ悉^地。具^足佛^性。何^ノ疑^惑。耶^一。大^綱恐^レ滯^ニ一^途。爲^メ導^ニ初^行開^ニ甘^露門^一。

第二利門

一^示相^者。二^者謂^ク自^他。利^者謂^ク義^利。益^物所^レ宜^キ説^レ之^爲義^ト。自^他同^益。名^爲二^利。前^覺之^中。皆^ナ廣^ク顯^示。然^ニ先^ツ須^ク了^レ知^ス生^死苦^患。次^ニ應^レ欣^ニ求^ス自^他利^樂。夫^レ生^死者^{。體}是^レ第^八眞^異熟^識。受^生命^終此^ノ識^ヲ爲^レ體^ト。苦^果始^テ起^ル名^ヲ之^爲生^ト。形^命終^沒説^レ之^爲死^ト。論^ニ云^フ。生^死相^續。由^ル惑^ト業^ト苦^ト。發^シ業^ヲ潤^シ生^ヲ煩^惱名^爲惑^ト。能^感後^有諸^業名^爲業^ト。業^ニ引^生衆^苦名^爲苦^ト。由^テ此^ニ生^死輪^轉無^窮。恒^ニ轉^{スル}如^シ暴^流。漂^溺有^情令^レ不^出離^一。生^苦者^衆生^ノ心^識始^テ託^ス母^胎。父^母不^淨執^{シテ}爲^ニ己^有。根^形圓^滿始^テ赴^ク産^門。業^風漂^激生^ニ大^苦惱^ヲ。如^下三^百六^十銚^ノ刺^壞其^ノ身^ヲ。出^テ胎^ヲ初^テ落^ル如^シ生^剥牛^觸肉^牆壁^ニ。若^不受^生亦^無餘^ノ苦^一。生^是苦^ノ本^{。甚}可^ク厭^患。生^猶大^苦。況^ヤ於^ニ

悉地 || 成就

べからず。我等恒時の論談決擇は教を引き理を推すに、種姓地の中に既に堪能有り。龍子は幼なりと雖も何ぞ怯弱なることを得ん。故に法華に云く、若し法を聞くこと有れば、一として成佛せずと云ふこと無し。般若に亦説く、一たび其の耳を経れば定んで菩提を得んと。信根具足せば、久しからずして必ず成ぜん。中道の教は普く五乗の者の無我の道理の爲なり。人天の戒善等は一分の義なり。未だ必ずしも具に開かず、或は異解を生ず。若し阿陀那教甚深の義趣をば疑はざるを機と爲す。生死の源底に名を聞くに已に足ぬ。況や此土の是れ如來の記したまふ所、東北方の國、諸の菩薩乘の人、般若に歸信して受持し讀誦し、書寫し供養すと。機感相應して、現に悉地を得。佛性を具足すること、何ぞ疑惑せんや。大綱は一途に滯^とことを恐る。初行を導んが爲に、甘露の門を開く。

第二利門

牆壁 || 土塀

一に相を示すと、二とは謂く自他なり。利とは謂く義利なり。益物宜き所を之を説て義と爲す。自他同じく益するを名けて二利と爲す。前の覺の中に皆な廣く顯示す。然に先づ須く生死の苦患を了知すべし。次に應に自他の利樂を欣求すべし。夫れ生死とは、體は是れ第八の眞異熟識なり。受生命終は此の識を體と爲す。苦果始めて起る之を名て生と爲す。形命終に沒す之を説きて死と爲す。論に云く、生死の相續することは惑と業と苦とに由る。業を發し生を潤する煩惱を惑と名く。能く後有を感ずる諸業を業と名く。業に引生せらるる衆苦を苦と名く。此に由て生死輪轉して窮無し。恒に轉ずること暴流の如し。有情を漂溺して出離せざらしむ。生苦とは衆生の心識始めて母胎に託するとき、父母の不淨を執して己が有と爲す。根形圓滿して始めて産門に赴く。業風漂激して大苦惱を生ず。三百六十の銚を以て其の身を刺し壞るが如し。胎を出て初めて落つるは生ながら牛を剥ぎて肉を牆壁に觸るゝが如し。若し受生せずは亦餘の苦無かるべし。生は是れ苦の本、甚だ厭患すべし。生猶を大苦す、況や

老病^ニ耶。人天猶爾^リ。況^ヤ於^ニ三途^ニ耶。天上^{ヨリ}欲^ス退^セレ。時^ハ。心^ニ生^ス大苦惱^一。地獄^ノ衆^ノ苦毒^{十六}不^レ及^一。三界無^レ安^{コト}猶如^ニ火宅^一。衆苦充滿^甚可^ニ怖畏^ス。常^ニ有^ニ生老病死^ノ憂患^一。如是等^ノ火熾燃^{トシテ}不^レ息。嗚呼^一。三界六道^ハ皆是牢獄^一。一切^ノ方所無^レ不^ニ苦^一域^一。有頂無間皆是分段^{ナリ}。一切^ノ受報無^レ不^ニ苦^一果^一。若^ハ善若^ハ惡皆是顛倒^{ナリ}。一切^ノ妄心無^レ不^ニ苦^一因^一。衣食田宅皆是鐵丸^{ナリ}。一切^ノ資生無^レ不^ニ苦具^一。無^レ始^モ無^レ終^モ皆是長夜^{ナリ}。一切^ノ三世無^レ不^ニ苦時^一。順緣逆緣皆是枷鎖^{ナリ}。一切^ノ怨親無^レ不^ニ苦縛^一。見聞覺知皆是法^{ナリ}。一切^ノ境界無^レ不^ニ苦^一。衆生^ノ蠢蠢^{タル}皆是幻居^{ナリ}。一切^ノ人物無^レ不^ニ苦形^一。悠悠^{タル}三有皆是漂溺^ス。一切^ノ流轉無^レ不^ニ苦海^一。一一^ノ相狀不^レ可^ニ具論^ス。問。世間^ノ苦果滿^チ目滿^レ耳^ニ。生死^ノ無^レ常^ハ。朝^ニ聞^キ暮^ニ聞^ク。三途^ノ苦報^ハ見^レ教^レ已^ニ久^シ。若^ク厭^フ者昔^ハ早^ク可^ク厭^フ。知^レ而不^レ驚^ク。拙^{シテ}自^ラ不^レ知^ク。雖^モ無^レ常見^レ未^レ了^セ無^レ常^ヲ。雖^モ知^ト苦^ノ相^ノ亦^モ還^テ求^テ樂^ヲ。朦朦^{タル}迷心^自生^至死^ニ。以^カ何^{ナル}方便^ヲ可^ク深^ク生^ス覺悟^ヲ。答。厭^ニ離^{スル}生死^ヲ甚^ク易^ク甚^ク難^シ。愚人^ハ遇^テ苦^ニ更^ニ求^ニ餘^ノ樂^ヲ。譬^ハ如^シ役牛^ノ懸^テ軛^ヲ欲^レ破^ル此^ノ車^一。聖^ハ厭^ニ有^レ頂^一過^ニ無^レ間^ノ苦^一。如^シ眼^中塵^雖微^{トモ}生^レ苦^ヲ。欣^ハ厭^ハ心^ニ不^レ依^ニ事^ニ相^ニ。須^ク於^ニ一^ニ事^ニ恒^時思^惟上^ニ。不^レ得^ニ歷^觀。數^數熏^習遂^ニ必^ス可^ク了^知。今^以一^ニ事^ヲ且^ク試^ム我^心。我^若暫^時往^テ冥^途。就^テ閻^魔王^ニ乞^フ心^ノ所^願。依^テ王^ノ加^被到^ニ一^ノ地^獄。冥^官更^ニ開^テ門^具見^ニ苦^相。或^ハ燒^或煮^或斫^或截^{。若}刺^若懸^{。若}磨^若擣^{。最}

p.52a

*鎖||鑊(講録)

*漂溺||溺漂(講録)

老病に於いてをや。人天猶爾り、況や三途に於いてをや。天上より退せんと欲する時は、心に大苦惱を生ず。地獄の衆の苦毒十六にして一にも及ばず。三界は安きこと無く猶を火宅の如し。衆苦充滿せり甚だ怖畏すべし。常に生老病死の憂患有り。是の如き等の火熾燃として息せずと。嗚呼、三界六道は皆是れ牢獄なり。一切の方所苦域にあらざること無し。有頂・無間皆是れ分段なり。一切の受報は苦果にあらざること無し。若しは善若しは惡皆是れ顛倒なり。一切の妄心は苦の因にあらざること無し。衣食田宅皆是れ鐵丸なり。一切の資生苦具にあらざること無し。始も無く終も無く皆是れ長夜なり。一切の三世は苦の時にあらざること無し。順緣逆緣皆是れ枷鎖なり。一切の怨親苦縛にあらざること無し。見聞覺知皆是れ我法なり。一切の境界は苦の緣にあらざること無し。衆生の蠢蠢たる皆是れ幻居なり。一切の人物は苦形にあらざること無し。悠悠たる三有皆是れ漂溺す。一切の流轉は苦海にあらざること無し。一一の相狀具に論ずべからず。問、世間の苦果は目に滿ち耳に滿てり。生死の無常は朝にも聞き暮にも聞く。三途の苦報は教に見られて已に久し。若し厭ふべくば昔に早や厭ふべし。知りて驚かず。拙して自ら知らず。常見無しと雖も未だ無常を了せず。苦の相を知ると雖も亦還て樂を求む。朦朦たる迷心生自り死に至る。何なる方便を以てか深く覺悟を生ずべきや。答、生死を厭離することは甚だ易く甚だ難し。愚人は苦に遇て更に餘の樂を求む。譬へば役牛の軛を懸て此の車を破らんと欲するが如し。聖は有頂を厭こと無間の苦に過ぎたり。眼の中の塵は微しと雖も苦を生むが如し。欣厭は心に在り事相には依らず。須く一事に於て恒時に思惟すべし。歴く觀ることを得ず。數數熏習し遂に必ず了知すべし。今、一事を以て且く我が心を試むべし。我若し暫時に冥途に往て、閻魔王に就て心の所願を乞はん、依て王の加被に依て一の地獄に到る。冥官、更に門を開て具に苦相を見しむ。或は燒き或は煮る。或は斫り或は截つ。若し刺し若し懸く。若し磨き若し擣く。最

極猛利ノ衆多ノ重苦無量無邊ニシテ。暫時無息時。我レ見ニ此ノ事ニ忽ニ生スヘシ悲心ヲ。先亡ノ恩愛設墮シテ其中ニ。具ニ受ニ其ノ苦ヲ。三熱ノ地ノ上。洞燃ノ焰ノ中ニ。宛轉トシテ呼叫シテ聲滿ニ鐵城ニ。忽ニ我ヲ見畢テ。悲喜ヲ語ク我ニ。吾昔シ愚盲ニシテ不辨ヘ善惡ニ。習行シテ世事ヲ造ニ無量ノ惡ニ。因果堅猛ニシテ大劇苦ヲ。阿防羅刹常ニ來テ責レ我ヲ。諸佛ノ大悲モ皆既ニ捨レ我ヲ。八萬億千ノ種種ノ苦惱。楚毒ノ至切ナル。不可ニ具言ヲ。受ニ此ノ苦ヲ後。時分甚近トモ。厭コト苦深故ニ如經カ千劫ヲ。況亦未來無量ノ時分ヲ。何ノ日方ニ脱シテ此ノ身心ノ苦ヲ。令ニ我ニ自在ニ受人天ノ樂ニ。我昔造レ罪多ク爲レ汝等ニ。我今受レ苦汝何ソ不救。世人猶可レ恨。況ヤ於沙門ニ耶。皮骨焦盡テ不見ニ其形ヲ。言語髻鬚トシテ昔ノ聲ニ。告畢須臾入ニ火聚ノ中ニ。于時目昏魂消。叩頭割レ腦ヲ。悲感熾然ナレトモ無力ニ于助ニ。我設遇ニ此ノ事ニ。可堪忍ス耶否ヤ。深重ノ大悲此ノ時ニ益生セ震且我國事。常ニ推シテ我身ニ可レ生ニ悲哀ニ。莊嚴論ニ云。菩薩念シテ衆生ニ愛スルニ之微ニ骨髓ニ。恒時ニ欲ス利樂ニ猶如一子ノ。故心地觀經ニ云。世人爲レ子ノ造テ諸ノ罪ヲ。墮ニ在シテ三途ニ長受レ苦。男女ハ非聖無レハ神通ニ。不見ニ輪迴難レ可レ報。二ニ引トテ教ヲ論ニ云。願ニ有ニ二種ニ。謂ク求ニ菩提ニ願。利ニ樂。他ニ願。又有四弘願。衆生無邊ナリ誓願シテ度セン。煩惱無邊ナリ誓願シテ斷セン。法門無盡ナリ誓願シテ知。無上菩提誓願シテ證セン。初句ハ利他。第四ノ句ハ自利。第二ニ盡ニ二利ノ障。第三ノ句求ニ二利ノ道。常ニ行ニ此ノ二名爲ニ菩提

p.226

先亡ニ亡父
楚毒ニ苦痛
極猛利ノ衆多ノ重苦無量無邊にして、暫時も息む時無し。我レ此ノ事を見て忽に悲心を生ずべし。先亡ノ恩愛、設し其の中に墮して、具に其の苦を受けむ。三熱ノ地ノ上、洞燃ノ焰ノ中に、宛轉として呼叫して聲、鐵城に滿つ。忽ちに我ヲ見畢りて、悲喜して我に語ぐ。吾昔シ愚盲にして善惡を辨へず。世事を習行して無量ノ惡を造る。因果堅猛にして大劇苦を受く。阿防羅刹常に來りて我を責む。諸佛ノ大悲も皆既に我を捨つ。八萬億千ノ種種ノ苦惱、楚毒ノ至切なる、具に言ふべからず。此ノ苦を受けて後、時分甚だ近くとも、苦を厭ふこと深きが故に千劫を経るが如し。況や亦未來無量ノ時分をや。何れの日か方に此ノ身心ノ苦を脱して、我をして自在に人天ノ樂を受けしめん。我昔シ罪多く造りしことは汝等が爲なり。我今、苦を受く汝何ぞ救はざる。世人猶を恨むべし。況や沙門に於てをや。皮骨焦げ盡きて其ノ形を見ず。言語髻鬚として昔ノ聲に似たること有り。告げ畢りて須臾に火聚の中に入る。時に目昏く魂消え、頭を叩き腦を割き、悲感熾然なれども助けるに力無し。我設し此ノ事に遇んに、堪忍すべきや否や。深重ノ大悲此ノ時に益生ぜざるぞ。〔震且我が國粗ぼ此ノ事有り。常に我が身を推して悲哀を生ずべし。〕莊嚴論に云く、菩薩、衆生を念じて之を愛すること骨髓に徹す。恒時に利樂せんと欲す。猶を一子ノ如なるが故に。心地觀經に云く、世人子ノ爲に諸ノ罪を造りて、三途に墮在して長く苦を受く。男女は聖に非ず、神通無ければ輪迴を見ず、報すべきこと難し。二に教を引とは、論に云く、願に二種有り。謂く菩提を求む願と、他を利樂する願となり。又四弘願有り。衆生無邊なり誓願して度せん。煩惱無邊なり誓願して斷ぜん。法門無盡なり誓願して知らん。無上菩提誓願して證せん。初句は利他。第四ノ句は自利。第二は二利ノ障を盡す。第三ノ句は二利ノ道を求む。常に此ノ二を行ずるを名けて菩提

薩埵^ト。幽贊^ニ云ク。菩提^ハ覺義。智^ガ所求^ノ果^{ナリ}。薩埵^ハ有情^ノ義。悲^カ所度^ノ生^{ナリ}。依^テ弘誓^一語^ス故^ニ名^ク菩提^ト。方^ニ知^ヌ菩薩^ハ只是^レ二利^{ナリ}。

第三^ニ解^レ疑^者。問。智增^ト悲增^トの二類^ノ菩薩^ハ智悲^各の増^{セリ}。若^シ悲智^ノの二德^不レ及^増類^耶。若^ル智增^ノ者^ハ慈悲^既劣^{ナリ}。豈^ニ以^テ劣德^一能^成大果^ヲ。悲增^ノ者^ハ智劣^{ナリ}。豈^ニ以^テ劣智^一能^救衆生^ヲ。若^シ無^ク差別^何立^増名^ヲ。答。地前^ノ淺位^隨願^ニ増減^ス。勝位^已去^{乃至}地上^ハ實^ニ可^ニ平等^{ナル}。最勝^ノ疏^ニ云ク。於^テ地上^ノ超劫^以二^ノ釋^一解^地力^齊。一^ニ云。若^シ據^テ作意^{スル}ニ^即功力^齊。不^同地前^ニ設^シ作意^{スル}時^ニ力用^不等^ニ。二^ニ云。悲増^ト智増^ト怖^不怖^ノ類^地各^齊。然^モ說^{コト}超^者。以^テ智望^悲増^者說^レ超^云。初^ノ解^如前^若依^後義^一。智悲^ノ二類^似有^勝劣^一。然^ル此^義意^行實^不同^{ナリ}。智増^ハ精進^シ。悲増^ハ久留^ル。超劫^ノ事^依此^得有^{コト}ヲ。爲^衆生^ノ故^進位^雖遲^{トモ}。若^シ登^其地^實德^是同^シ。今^分二^類是^意樂^ノ異^{ナリ}。智増^終行^大悲^一。由^此因^故還^進菩提^一。釋迦^如來^捨身^慈悲^ヲ超^劫早^成。即此^ノ義^也。若^シ悲増^ノ類^雖成^大智^迴智^利生^ヲ。文殊^師利^は常^に以^テ智慧^ヲ勸^發衆生^ヲ。依^悲行^智。闡提^ノ大志^{ナリ}。所以^に彌勒^ト觀音^ト慈悲^互齊^シ。普賢^ト文殊^理智^共滿^ス。本願^不同^{ナレ}利事^有別^レ。等覺^ノ極位^豈有^勝劣^一耶。問。何^故示^二利^一耶。答。末世^ノ修行^ハ多闕^大悲^一。見^他異^自猶^不及^二乘^一。淨土^ノ菩薩^偏求^自樂^一。適^思恩^親專^不平等^一。或^ハ言^ク。自^先至^不退^後能^救他^一。此^亦不^遮。然^レ依^テ

幽贊 〓 『般若心経幽贊』

*提 〓 薩(講録)

薩埵と爲す。幽贊に云く、菩提は覺の義。智が所求の果なり。薩埵は有情の義。悲が所度の生なり。弘誓に依て語す故に菩提と名く。方に知ぬ菩薩は只是れ二利なり。

第三に疑を解すとは、問、智増と悲増との二類の菩薩は智悲各の増せり。若し悲智の二の德、増せる類に及ばざるや。若し爾らば智増の者は慈悲既に劣なり。豈に劣德を以て能く大果を成ぜん。悲増の者は智劣なり。豈に劣智を以て能く衆生を救んや。若し差別無くは何ぞ増の名を立ん。答、地前の淺位は願に隨て増減す。勝位已去乃至地上は實には平等なるべし。最勝の疏に云く、地上の超劫に於て二の釋を以て地地の力齊しきことを解す。一には云く、若し作意するに據らば即ち功力齊し。地前に同からず設し作意する時には力用等しからず。二には云く、悲増と智増と怖と不怖との類、地に各の齊し。然も超と説くことは、智を以て悲増の者に望みて超を説くと云々。初の解は前の如し。若し後の義に依らば、智悲の二類、勝劣有るに似たり。然るに此の義の意は行實に不同なり。智増は精進し、悲増は久しく留る。超劫の事此に依て有ることを得。衆生の爲の故に位に進むこと遅しと雖も、若し其の地に登れば實德は是れ同じ。今二類を分つは是れ意樂の異なり。智増も終に大悲を行す。此の因に由が故に還て菩提に進む。釋迦如來は捨身の慈悲をもつて劫を超して早く成ず。即ち此の義なり。若し悲増の類は大智を成ずと雖も、智を迴して生を利す。文殊師利は常に智慧を以て衆生を勸發して、悲に依て智を行す。闡提の大志なり。所以に彌勒と觀音とは慈悲互に齊し。普賢と文殊とは理智共に滿す。本願不同なれば利事に別有れど、等覺の極位に豈に勝劣有んや。問、何が故に二利を示すや。答、末世の修行は多く大悲を闕けたり。他を見ること自に異なり猶を二乘に及ばざるがごとし。淨土の菩薩は偏に自の樂みを求む。適思恩親を思ふとも専ら平等にあらず。或は言く、自ら先づ不退に至て後に能く他を救はんと。此も亦遮せず。然るに意樂に

云々への補足 〓 若爾智増望非増者自得成超講録)

意樂^ニ哀^レ。他^ヲ實^ニ深^シ。爲^ニ他^ノ進^レ。自^ハ實^ニ可^ク大^ニ悲^シ。依^テ此^ノ願^ニ故^ニ。得^シ生^ニ。淨^ク土^ニ。若^シ未^ダ住^ミ悲^ニ者^ハ先^ツ勵^ム。自^ハ行^フ。二利共^ニ失^ハ。自^モ亦^モ不^レ進^ム。恒^ニ時^ニ練^シ磨^シ。常^ニ好^ム慈^ニ悲^ヲ。平^ニ等^ノ弘^ク誓^ハ。必^ズ依^テ直^ニ理^ニ。無^ク緣^ノ大^ニ悲^ヲ。出^ツ於^テ法^ニ性^ニ。無^ク智^ク生^レ。悲^ヲ無^ク有^ル是^レ處^ニ。須^ク學^ビ佛^ノ教^ヲ能^ク勵^ス自^ノ心^ヲ。

第三三學門

一^ニ示^ス相^ヲ者^ヲ。學^ト者^ヲ習^フ學^ヲ做^ル學^{ナリ}。三^ト者^ハ戒^ト定^ト慧^トナリ。正^ニ道^ノ之^レ通^シ衢^ノ苦^ノ海^ノ之^レ要^{ナリ}津^{ナリ}也。三^ニ世^ノ諸^ノ佛^ノ常^ノ恒^ノ軌^{ナリ}。則^レ無^ク數^ノ大^ノ劫^ニ不^レ習^セ不^レ成^セ。是^ヲ名^ク三^ニ學^ト。戒^ハ以^テ受^ル學^ス。菩^ツ薩^ヲ戒^ヲ一^ノ時^ニ三^ノ業^ヲ爲^ス性^ト。業^ト者^ハ造^ル作^{ナリ}。體^ハ是^レ思^ノ數^{ナリ}。動^シ身^ヲ發^シ語^ヲ作^ル動^シ意^ヲ故^ニ。說^テ思^ヲ爲^ス業^ト。此^ニ亦^ハ有^ル一^ノ一^ノ者^ハ表^ス業^{ナリ}。現^行ノ思^業ナリ。表^ス示^スル^カ故^ニ。一^ニ者^ハ無^ク表^ス。然^レ依^テ思^ト願^ト善^ノ惡^ノ分^限ニ^依。或^ハ依^テ發^ス勝^{タル}身^語善^ノ惡^ノ思^種增^ス長^ス之^レ位^ニ假^ニ立^ツ無^ク表^ス。此^レ中^ニ有^ル別^ノ解^ノ脫^ト及^ビ道^ノ共^ト定^ノ共^ト三^ノ種^ノ戒^ト。別^ノ脫^ニ亦^ハ有^ル七^ノ衆^等受^ト。通^ス三^ノ乘^ノ人^ニ亦^ハ有^ル共^ト不^レ共^ト三^ノ聚^淨戒^ト。一^ニ者^ハ攝^ル律^儀。二^ニ攝^ル善^法。三^ニ饒^益有^情。攝^ル律^儀是^レ別^ノ解^ノ脫^也。此^ニ有^ル十^ノ重^ノ禁^四十八^ノ輕^等。一^ニ重^禁數^諸教^不同^也。或^ハ前^ニ注^シ不^レ散^爲性^ト。智^カ依^{タル}爲^ス業^ト。等^持雖^モ通^ス定^散二^位及^ビ三^界中^ニ。修^而所^成。定^而非^モ散^ニ。二^ニ界^ニ非^レ欲^ニ。遠^ニ離^シ昏^沈掉^擧ト^ノ二^障寂^靜爲^ス相^ト。近^分根^本四^禪四^定及^ビ有^ル無^量三^摩地^門對^治堪^能引^ク

*直||眞講録)

衢||大道・津||湊

意||事物を思量する

第三三學門

一に相を示すとは、學とは習學做學なり。三とは戒と定と慧となり。正道の通衢苦海の要津なり。三世の諸佛常恒の軌則なり。無數大劫に習せずは成ぜず。是を三學と名く。戒は菩薩戒を受學する時の三業を以て性と爲す。業とは造作なり。體は是れ思數なり。身を動し語を發し意を作動するが故に、思を説きて業と爲す。此に亦二有り。一には表業。現行の思業なり。他に表示するが故に。二には無表。然れば思と願との善惡の分限に依る。或は勝たる身語を發する善惡の思種が増長するの位に依て、假に無表を立つ。此れが中に別解脫と及び道共と定共との三種の戒有り。別脫に亦七衆等の受有り。三乘の人に通ず亦共と不共との三聚淨戒有り。一には攝律儀。二に攝善法。三に饒益有情なり。攝律儀は是れ別解脫なり。此に十重禁四十八輕等有り。「重禁の數を説くに諸教不同なり。或は前四。或は後四。或は人を説き。或は六を説く」定は別境の中三摩地を以て體と爲す。所觀の境に於て心を專注して散せざらしむるを性と爲し、智が依たるを業と爲す。等持は定散二位及び三界の中に通ずと雖も、修して成ずる所は、定にして散に非ず。二界にして欲には非ず。昏沈と掉擧との二の障を遠離して、寂靜なるを相と爲す。近分と根本と四禪と四定と及び無量の三摩地門對治と堪能と引

p.53a

三摩地||三昧
等持||三昧

發^ト作業^ト。具^ニ如^ク諸論^ノ。慧^ハ謂^ク於^テ所觀^ノ境^ニ簡擇^{スル}爲^レ性^ト。斷^レ疑^ヲ爲^ト業^ト。謂^ク觀^{スル}得^ト失^ト俱非^ト境^中。由^レ慧^ニ推求^ノ。得^ニ決定^ヲ故^ニ。加行^ト根本^ト後得^ト三種^ノ無分別^ト。及^ヒ生空^ト法空^ト俱空^ト三種^{アリ}。又說^ニ三種^ト。一^ニ聞所^成之^ノ慧^ト。謂^ク法界等流^ノ法^ヲ已^テ。依^テ名句文^ニ觀^{スル}教^義故^ニ。二^ニ思所成^ノ慧^ト。能^ク深^ク審度^{シテ}先^ニ理^後文^ヲ。三^ニ修所成^ノ慧^ト。於^テ文義^中能^ク證^シ能^ク顯^ス。前^ノ二^ハ散位^ト。後^ハ必^ズ定位^{ナリ}。此^ノ三^カ自性^ト所依^ト因緣^ト所緣^ト行業^ト如^シ諸教^ニ說^ク。慧學^ノ所緣^ハ通^ニ一切法^ニ。一切法^者。一^ニ有^{。二}無^{。或}有^二種^{。一}有^{爲。二}無^{爲。或}爲^三性^ト。一^ニ遍計所執^{。二}依他起性^{。三}圓成實性^{ナリ}。論^ニ云^ク。周遍計度^ス故^ニ名^ニ遍計^ト。乃至^謂所^ノ妄執^一蘊^ト處^ト界^ト等^若法^若我^ハ自性^ト差別^ト。依他^ノ衆緣^ノ所生^セ心^心所體^ト及^ヒ相^ト見^ト分^ノ有漏無漏^モ皆依他起^{ナリ}。依^レ他^ノ衆緣^ニ而得^レ起^{コト}。故^ニ。圓成^ト二空^ニ所顯^サ圓滿^シ成^就諸法^ノ實性^ヲ。名^ニ圓成實^ト。可^レ知^レ。圓成^ハ如^ハ鏡^{。體}是^レ眞實^{ナリ}。凝然常住^{ナリ}。依他^ハ如^ハ影^ノ。圓成^ハ爲^ニ所依^ト。依^レ他^ノ衆緣^ニ暫時顯現^ス。不^レ即^ニ衆緣^ニ不離^ニ衆緣^ト。非^{シテ}有^ニ似^有。虛假^ノ相^{ナル}故^ニ。所執^ハ如^シ影^ノ上^ノ愚人^ノ所知^ノ。於^ニ虛假^ノ境^ニ迷^テ執^實有^ト。轉^{シテ}似^{タリ}實^ノ解^ニ。體^實都^無衆相宛然^ト。似^有體用^一。嬰兒^ノ鷄^ノ猿^ノ等^ノ愚癡^ノ類^ハ。向^レ鏡^ニ之時^{。見}自^ノ影像^ヲ謂^テ實^ノ有情^ト。或^ハ戲^レ或^ハ鬪^レ不^レ知^ニ其^ノ空^ト。世間^ノ智人^ハ知^影是^鏡不^レ離^テ鏡^ノ性^ト。別^有實^ノ相^ト。既^ニ知^影假^ニ已^{。影}上^ノ實^ノ人^等相^皆亦^都無^{ナリ}。一^鏡上^ノ義^不即^不離^{ナリ}。迷^時迷^ニ。悟^時時^モ亦^都無^{ナリ}。一^鏡上^ノ義^不即^不離^{ナリ}。迷^時迷^ニ。悟^時時^モ亦^都無^{ナリ}。

*迷=逐(講録)
?下中上? ?

發と作業と有り。具には諸論の如し。慧は謂く所觀の境に於て簡擇するを性と爲す。疑を斷ずるを業と爲す。謂く得と失と俱非との境を觀する中に、慧に由て推求して、決定を得る故に。加行と根本と後得との三種の無分別慧と、及び生空と法空と俱空との三種あり。又三種と説く。一には聞所成の慧、謂く法界等流の法を聞き已て、名句文に依て教義を觀するが故に。二には思所成の慧、能く深く審度して理を先にし文を後にす。三には修所成の慧、文と義との中に於て能く證し能く顯すなり。前の二は散位、後は必ず定位なり。此の三が自性と所依と因緣と所緣と行業とは諸教に説くが如し。慧學の所緣は一切の法に通ず。一切法とは、一には有、二には無。或は二種有り。一には有爲、二には無爲。或は三性と爲す。一には遍計所執、二には依他起性、三には圓成實性なり。論に云く。周遍計度す故に遍計と名く。乃至 謂く妄執する所の蘊と處と界との等きの、若は法若は我、自性と差別となり。依他の衆緣に生ぜらる心所の體と及び相と見との分の有漏無漏も皆依他起なり。他の衆緣に依りて起ことを得るが故に。圓成とは二空に顯されて圓滿し成就せる諸法の實性を圓成實と名く。「喩を以て知るべし」 圓成は鏡の如し。體は是れ眞實なり。凝然常住なり。依他は影の如し。圓成を所依と爲す。他の衆緣に依て暫時に顯現す。衆緣に即かず衆緣を離れず。有に非ずして有に似る。虛假の相なるが故に。所執は影の上愚人の所知の如し。虛假の境に於て迷て實有と執す。轉じて實の解に似たり。體は實には都て無なり。衆相宛然として體用有るに似たり。嬰兒鷄猿等の愚癡の類は、鏡に向ふの時、自らの影像を見て實の有情と謂ひて、或は戲れ或は鬪ひ其の空なることを知らず。世間の智人は影は是鏡なり、鏡の性に離れて別に實の相有るにあらずと知る。既に影は假なりと知りぬれば、影上の實の人等の相は皆な亦都て無なり。一鏡の上の義不即不離なり。迷する時も三に迷ひ、悟る時も

悟^レ二^レ非^ス一向空^ニ。非^ス一向有^ニ。中邊論^ニ云ク。虛妄
分別^ハ有^{ナリ}。於^レ此^ニ二^ハ都^テ無^シ。此^レ中^ニハ唯^テ有^ル空^ニ。於^レ彼^亦
有^リ此^レ。故^ニ說^ク一切^ノ法^ハ非^ズ空^ニ非^ズ不^ト空^ニ。有^ト無^ト及^ビ有^ト
故^ニ。是^レ即^チ契^ヒ中^道。又論^ニ云ク。此^ノ三^ハ爲^シ異^ト。爲^シ不^ト異^ト
耶[。]應^シ說^ク俱^ニ非^ニ。無^カ別^レ體[。]故^ニ。妄^ニ執^テ緣^起眞^義別^{ナル}
故^ニ。若^ク於^テ人^馬舍^宅等^ノ類^種種^ノ衆^縁縁^ニ於^テ執^取爲^シ實^ト
時[。]別^ニ說^ク人^馬舍^宅等^ノ名^義。彼^レ此^レ別^レ體[。]不^レ能^ニ
和^融。若^ク有^テ智^人一[。]或^ハ總^{シテ}說^キ影^ノ萬^法一^心義[。]或^ハ
總^{シテ}說^ク鏡^ハ是^レ諸^法眞^相。自^リ鏡^見之^ヲ能^ク了^ス餘^ノ二[。]
非^ズ不^レ見[。]眞^如而^能了^ス中[。]諸^行皆^如幻^事等[。]雖^レ
有^ト非^ズ眞^者此^義也[。]或^ハ以^テ鏡^體爲^シ眞^如。
以^テ鏡^ノ中^ノ光^ヲ喻^フ依^他起[。]以^テ光^ノ上^ノ影^ヲ喻^フ遍^計所[。]
執^ニ光^ノ之^映外^質說^ク名^ク影^像。影^像實^ハ是^レ都^無
故^ニ。或^ハ以^テ鏡^體爲^シ依^他心^ノ自^體。以^テ光^ヲ爲^シ見^分。
以^テ影^ヲ爲^シ相^分。以^テ實^有之^相爲^シ計^所執[。]鏡^ノ上^ニ
亦^レ說^ク影^像不^レ生^ズ不^レ滅^ス等^ノ空^義。是^レ二^ノ空^ノ詮^門ナリ。
能^ク顯^ス鏡^ノ實^性。此^ノ諸^義如^シ下^ノ觀^心門[。]
第二^ニ引^ク教^者。三^學ノ功^能教^說無^邊。且^ク菩^薩戒^ハ
者[。]梵^網經^ニ云ク。我^レ今^レ盧^舍那^方坐^ニ蓮^華臺[。]周^匝
千^華上^ニ復^現千^釋迦[。]一^華百^億國[。]一^國一^ノ釋^迦
。各^ノ坐^ニ菩^提樹[。]一^時成^ニ正^覺。如^シ是^ノ千^百億[。]
盧^舍那^本身[。]千^と百^億釋^迦各^ノ接^ニ微^塵衆[。]俱^ニ來^ニ
至^シ我^所聽^ク我^誦佛^戒。甘^露門^則開^ス。是^ノ時^ニ千^と
百^億還^テ至^ニ本^道場[。]各^ノ坐^ニ菩^提樹[。]誦^ク我^本師^ノ
戒^ノ十^重四^十八[。]戒^ハ如^シ明^ノ日^月。亦^如瓔^珞珠[。]

*影||彰(講録)

*場||場(講録)

三を悟る。一向空にも非ず、一向有にも非ず。中邊論に云く、虚妄
分別は有なり。此に於て二は都て無し。此れが中には唯だ空のみ有り。彼に於ても亦
此れ有り。故に一切の法は空に非ず不空に非ずと説く。有と無と及び有との
故に。是れ即ち中道に契へり。又論に云く、此の三は異とや爲ん異にあらざとや
爲んや。俱に非なりと説く應し。別體無きが故に、妄執と縁起と眞義と別なるが
故に。若し人馬舍宅等の類、種種の衆縁に於て執取して實と爲る
時、別に人馬舍宅等の名義を説く、彼れ此れ別體にして和融すること
能はず。若し智人有りて或は總じて影の萬法一心の義を説き、或は
總じて鏡は是れ諸法の眞相と説き、鏡自り之を見て能く餘の二を了す。
眞如を見ずして能く諸行は皆幻事等の如く有りと雖ども而も眞に非ずと
了するものにはあらずとは此の義なり。或は鏡の體を以て眞如と爲し、
鏡の中の光を以て依他起に喻ひ、光の上の影を以て遍計所
執に喻ふ。光の外の質に映ずるを説て影像と名く。影像は實には是れ都て無なるが
故に、或は鏡の體を以て依他心の自體と爲し、光を以て見分と爲し、
影を以て相分と爲し、實有の相を以て計所執と爲す。鏡の上に
亦影像の不生不滅等の空義を説く。是れ二空の詮門なり。
能く鏡の實性を顯す。「此の諸義、下の觀心門の如し」
第二に教を引くとは、三學の功能教說無邊なり。且く菩薩戒は、
梵網經に云く、我れ今、盧舍那方に蓮華臺に坐す。周匝せる
千華の上に復た千の釋迦を現ず。一華に百億國あり。一國に一の釋
迦あり。各の菩提樹に坐して一時に正覺を成ず。是の如く千百億は
盧舍那本身なり。千と百億との釋迦は各の微塵の衆を接して、俱に
我所に來至して我が佛戒を誦するを聽くに、甘露の門則ち開けぬ。是の時に千と
百億と還て本の道場に至て、各の菩提樹に坐して、我が本師の
戒の十重と四十八とを誦す。戒は明なる日月の如し。亦瓔珞の珠の如し。

微塵ノ菩薩衆由レ是ニ成ス正覺。是レ盧舎那誦シ玉ヒ。我モ亦如ク是誦ス。汝新學ノ菩薩モ頂戴受持ス戒ヲ乃至衆生受レハ佛戒一即入レ諸佛ノ位ニ。位同シ大覺ニ已ヌ。眞ニ是レ諸佛ノ子ナリ。已上報化ニ身ハ實雖ニ同體ナリト。顯シテ戒德ノ重ト三佛傳誦シ玉フ。非ニ隨時ノ説ニ三際ノ常軌ナリ。故云我誦スト。世尊猶誦ス。況ヤ弟子。樹下成シテ覺初結ス菩薩ノ波羅

p.53c

提木叉ヲ解脫ト云別。孝ニ順シ父母ト師僧ト三寶ト。孝ニ順スヘシ道ノ之法ニ。孝名ヲ爲戒ト。亦名ニ制止ト。若受テ菩薩戒一不誦此ノ戒一者。非ニ是菩薩一。非ニ佛ノ種子一。華嚴經ニ云ク。戒ハ是無上菩提ノ本ナリ。應ニ當具足持シ淨戒ヲ。又云。若不持戒尚シ不能受野干ノ身。況ヤ人天ノ報ニ耶。次ニ定學ト者有レ四。一ニハ大乘光明定。謂ク此能發照了スル大乘ノ理教行果ノ智ノ光明ヲ故ニ。二ニハ集福王定。謂ク此自在ニシテ集ニ無邊ノ福一如ニ王ノ勢力ノ無等シク雙故。三ニハ賢守定。謂ク此能守ニ世出世間ノ賢善法一故。四ニハ健行定。謂ク佛菩薩大健ノ有情ノ之所ナルカ行スル故。一切ノ無漏皆定ヲ依ト。散心智慧ハ如ニ風中ノ燈ノ。依テ定起シテ慧。斷惑證理。普門塵數ノ諸三昧ノ名義功德不レ可具記。無量劫ノ中ニ聞コト名既ニ難シ。況ヤ能修シ證スルヲ。所謂於一切法一無所取著三摩地ト。寶印三摩地ト。師子遊戲三摩地ト。金剛喻三摩地ト。無忘失ト。三輪清淨ト。無量光ト。降伏四魔ト。妙樂ト。棄捨塵愛ト。集一切功德ト。無邊辯ト。決判諸法ト。達諸有底ト。遠離趣向不退轉神通ト。無盡行相ト。斷憎愛ト。離違順ト。滿月淨光ト。能救一切世

三際ニ三世

微塵ノ菩薩衆、是に由て正覺を成ず。是れ盧舎那誦したまひ、我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩も頂戴して戒を受持すべし。乃至衆生佛戒を受けば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同じ已ぬ。眞に是れ諸佛の子なり。已上報化ニ身ハ實に同體なりと雖ども、戒德の重きことを顯して三佛傳誦したまふ。隨時の説に非ずして三際の常軌なり。故に我れ誦すと云ふ。世尊猶を誦す、況や弟子に於てをや。樹下に覺を成じて初に菩薩の波羅提木叉を結す。「此には別解脱と云ふ」父母と師僧と三寶とに孝順し、至道の法に孝順すべし。孝を名けて戒と爲す。亦は制止と名く。若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は、是れ菩薩に非ず、佛の種子に非ずと。華嚴經に云く、戒は是れ無上菩提の本なり。當に具足して淨戒を持すべし。又云く、若し持戒せざれば尚し野干の身をも受くること能はず。況や人天の報に於てをや。次に定學とは四有り。一には大乘光明定、謂く此れ能く大乘の理教行果を照了する智の光明を發すが故に。二には集福王定、謂く此れ自在にして無邊の福を集ること王の勢力の如して等しく雙もの無きが故に。三には賢守定、謂く此れ能く世出世間の賢善法を守るが故に。四には健行定、謂く佛菩薩大健の有情の行ずる所なるが故に。一切の無漏は皆定を依と爲す。散心智慧は風中の燈の如し。定に依て慧を起して、惑を斷じ理を證す。普門塵數の諸三昧の名義功德に記すべからず。無量劫の中に名を聞くこと既に難し、況や能く修し證するをや。所謂る一切法に於て無所取著三摩地と、寶印三摩地と、師子遊戲三摩地と、金剛喻三摩地と、無忘失と、三輪清淨と、無量光と、降伏四魔と、妙樂と、棄捨塵愛と、集一切功德と、無邊辯と、決判諸法と、達諸有底と、遠離趣向不退轉神通と、無盡行相と、斷憎愛と、離違順と、滿月淨光と、能救一切世

*棄ニ弃講録

間ト。大智慧炬ト。無染著如虛空トノ三摩地等ナリ。如レ是
 三昧ノ名字微妙ノ利益可知。慧學トハ。謂般若波
 羅蜜也。經ニ云ク。諸ノ菩薩摩訶薩應シテ無住ヲ而
 爲シテ方便ト安住ス般若波羅蜜多。所住ト能住ト不
 可得ナルカ故。若菩薩欲善安立盡虛空界法界世
 界ノ一切ノ有情皆令安住布施淨戒乃至般若
 應學般若。欲得發起一念善心所獲功德
 乃至安坐妙菩提座證得無上正等菩提亦
 不窮盡。應學般若。欲得世世常見諸佛
 恒聞正法得佛覺悟蒙佛憶念教誡教授
 欲以種種勝善根力。隨意能引上妙ノ供
 具供養恭敬一切ノ如來。應學般若。理趣分
 云。假使殺害三界所攝一切ノ有情。而不由
 此墮於地獄傍生鬼界。以能調伏一切煩
 惱及隨煩惱惡業等故。又云。諸ノ惡業障皆得
 消除。諸ノ勝喜樂常現在前。大樂金剛不空神
 呪現身必得究竟成滿。要多佛所殖衆ノ善
 根。久發大願。乃能於此甚深理趣最勝法
 門。下至聽聞一句一字。況能具足讀誦受
 持。若諸ノ有情供養恭敬尊重讚歎八十
 伽沙等俱胝那庾多佛。乃能具足聞此般
 若。有置此經在身或手上。諸ノ天人等皆禮
 敬。若有情類受持此經。多俱胝劫得宿住
 智。常勤精進修諸善法。惡魔外道不能稽
 留。四大天王及餘ノ天衆常隨擁衛。諸佛菩薩
 常共護持。令一切ノ時善増惡減。於諸佛ノ土

*歎||嘆(講録)
 *歎||恒(講録)
 *胝||那(講録)

間と、大智慧炬と、無染著如虚空との三摩地等なり。是の如く
 三昧の名字微妙の利益、知るべし。慧學とは、謂く般若波
 羅蜜なり。經に云く、諸の菩薩摩訶薩は無住を以て
 方便と爲して般若波羅蜜多に安住すべし。所住と能住と不
 可得なるが故に。若し菩薩、善く盡虛空界法界世界の
 一切の有情を安立して皆な布施と淨戒と乃至般若とに安住せしめんと欲せば
 般若を學ぶべし。一念の善心を發起して獲る所の功德
 乃至妙菩提座に安坐し無上正等菩提を證得し亦窮盡せざらんことを
 得んと欲せば般若を學すべし。世世に常に諸佛を見たとまつり
 恒に正法を聞き佛の覺悟を得て佛の憶念教誡教授を蒙ることを得んと欲し、
 種種の勝善根力を以て意に隨て能く上妙の供具を
 引きて一切の如來を供養恭敬せんと欲せば般若を學ぶべし。理趣分に
 云く、假使ひ三界所攝一切の有情を殺害すとも、此に由て
 地獄傍生鬼界に墮せず、能く一切煩惱と及び
 隨煩惱と惡業との等きを調伏するを以ての故に。又云く、諸の惡業障は皆
 消除を得、諸の勝喜樂は常に現在前す。大樂金剛不空神
 呪現身に必ず究竟成滿を得、要多佛の所に衆の善
 根を殖へ、久く大願を發して、乃ち能く此の甚深理趣最勝法門の、
 下一句一字を聽聞するに至ままでに於てす。況や能く具足して讀誦し受
 持せんをや。若し諸の有情八十恒伽沙等の俱胝那庾多の
 佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し、乃し能く具足して此の般若を聞き、
 此の經を置て身或は手に在ること有らば、諸の天人等皆禮
 敬すべし。若し有情の類此の經を受持せば、多俱胝劫に宿住
 智を得て、常に勤にして精進して諸の善法を修し、惡魔外道は稽
 留すること能ず。四大天王及び餘の天衆常隨擁衛せむ。諸佛菩薩
 常に共に護持して、一切の時に善を増し惡を減ぜしめ、諸佛の土に於て

隨願往生。乃至菩提不墮惡趣。又法華一乘諸佛智慧。修行菩薩無邊功德。具如經文。

第三解疑者。問。菩薩之戒。云何受持。云何犯失。答。太賢師立三門。先受得門者。六道衆生但解師語。要須先發大菩提心。謂誓下定取無上菩提。未來際利樂有情。發此心已。有二種受。一者一分受。隨其受者之意樂所堪。或受一戒或多。皆得名爲菩薩。不同聲聞必總受持。謂凡必無現身成佛。要經無數大劫修。故隨其位力漸漸修滿。如下成。山海塵滯爲初。既大菩提無德不攝。欲成。彼聚何善非因。唯受一戒猶勝二乘。一切功德。菩薩一戒爲度一切。無一衆生不荷恩故。二者全分受。謂三聚淨戒。攝律儀者斷一切惡。從初發心斷殺生等。三賢十聖各十斷行障。乃至佛捨生死法故。攝善戒者修一切善。三賢十聖各十勝行。乃至佛證。二轉依故。饒益有情戒者度一切衆生。從初發心隨分教化。窮未來際度一切。故非諸凡夫即能一切三聚頓誓。漸修滿。於諸行願最無上。故隨所生處必其中王。然無畢竟堪爲其果。唯除無上正等菩提。護持門者。略有十門。一隨心門。隨其宿習心樂住。故猶如世間隨其本色。雖一蘊水。綠碧等異。故先固一漸具餘行。如本業云。

願に隨ひて往生す。乃至菩提に至まで惡趣に墮せず。又法華の一乘は諸佛の智慧なり。修行する菩薩の無邊の功德、具には經文の如し。

第三に疑を解すとは、問、菩薩の戒を云何が受持し、云何が犯失する。答、太賢師三門を立つ。先づ受得門とは、六道の衆生但だ師の語を解せば、要須先づ大菩提心を發すべし。謂く定んで無上菩提を取りて未來際を窮めて有情を利樂せんと誓ふ、此の心を發し已て二種の受有り。一には一分受、其の受者の意樂の堪ふる所に隨ふ。或は一戒或は多を受け、皆名けて菩薩と爲すことを得。聲聞の必ず總じて受持するには同ぜず。謂く凡は必ず現身に成佛すること無し。要ず無數大劫を経て修するが故に。其の位力に隨ひて漸漸に修滿するに、山海を成ずるに塵滯を初と爲るが如し。既に大菩提は徳として攝せずと云こと無し。彼の聚を成ぜんと欲するに何の善か因に非ざらん。唯だ一戒を受くるすら猶し二乘の一切の功德に勝たり。菩薩の一戒は一切を度せんが爲なれば、一衆生として恩を荷はざること無きが故に。二には全分受、謂く三聚淨戒なり。攝律儀とは一切の惡を斷ず。初發心從り殺生等を斷ず。三賢十聖各の十の行障を斷ず。乃至佛に至りて生死の法を捨つるが故に。攝善戒は一切の善を修す。三賢十聖に各の十の勝行あり。乃至佛に至りて二轉依を證するが故に。饒益有情戒とは一切の衆生を度す。初發心從り分に隨て教化し、未來際を窮めて一切を度するが故に。諸の凡夫即ち能く一切の三聚を頓に誓ふものには非ず、漸に修し滿するが故に。諸の行願に於て最無上なるが故に。所生の處に隨て必ず其の中の王たり。然ども畢竟して其の果と爲るに堪ふこと無し。唯し無上正等菩提を除く。護持門とは、略して十門有り。一には隨心門、其の宿習に隨て心樂に住するが故に。猶し世間の其の本色に隨て一蘊の水なりと雖ども綠碧等異なるが如き故に、先づ一を固めて漸く餘の行を具すべし。本業に云が如し、

若^シ一^ノ戒^ヲ名^ケ一分^ノ菩薩^ト。乃至名^ケ具^分ノ菩薩^ト。故^ニ。然^モ佛^所制^應漸^ク遍^ス學^ス。由^レ此^ニ第二^ニ有^二遍^ス學^一門^一。隨^性・隱^密・順^勝・意^樂・怖^畏・成^勝・護^障・究^竟トアリ。具^ニ如^ニ彼^ノ疏^ノ。犯^失者^ハ。謂^ク菩薩^戒無^二無^餘ノ犯^一。如^レ有^一一分^ノ受^ハ。有^一一分^ノ持^ハ故^ニ。不^レ同^ノ聲^聞ノ犯^一。一^重時^ニ便^チ破^テ一切^ヲ失^ヒ比^丘ノ性^上。如^ニ本^業經^一一切^ノ菩薩^凡聖^ノ戒^ハ盡^ク心^ヲ爲^レ體^ト。是^ノ故^ニ心^盡レば戒^モ亦^ダ盡^ク。心^無レ盡^{コト}故^ニ戒^亦無^レ盡^{コト}。心^ハ謂^ク期^心ナリ。由^レ此^ニ轉^ス生^ヲ。戒^亦恒^ニ隨^テ運^ニ運^ニ增長^{シテ}。乃^チ至^レ成^佛ニ。猶^シ如^レ河^ノ水^ノ日^夜不^レ停^テ運^運遷^流自^ラ到^レ大^海。唯^除ク故^ニ捨^テ大^菩提^心。然^モ犯^ニ重^戒略^{シテ}有^二種^一。一^ハ破^{。二}は汚^{ナリ}。若^シ以上^ノ品^ノ煩^惱纏^ヲ犯^スレハ。隨^テ所^犯ノ支^ニ失^ス戒^律儀^一。若^シ中^下ノ纏^唯汚^ニ不^レ失^セ。如^ニ瑜^伽云^一。若^シ諸^ノ菩^薩毀^レ犯^四種^ノ他^勝處^法。數^數現^行シテ。都^テ無^レ慚^愧。深^ク生^ニ愛^樂。見^ニ是^ノ功^德。當^ニ知^レ說^名上品^纏犯^ト。非^ス諸^ノ菩^薩暫^ク一^ヒ現^行スル他^勝處^法便^チ捨^ルモ^ニハ^ハ苦^薩淨^戒律^儀上^ニ不^レ同^ノ聲^聞ノ一^タ犯^即捨^ニ。又^上ノ纏^ヲ以^テ犯^雖失^淨戒^一。經^ニ說^リ即^チ懺^亦得^レ重^受。問^ハ。若^シ受^レ一分^ノ者^ハ先^チ可^レ受^レ何^ノ戒^耶。答^ハ。既^ニ隨^ニ意^樂何^ノ總^定。爲^メ我^ノ最^要。而^モ可^レ受^持。亦^有三^ノ戒^{。謂}ク快^意殺^生ト。無^慈行^欲ト。毀^謗三^寶ト。三^業ノ犯^戒依^ニ貪^瞋癡^ニ隨^テ應^テ究^竟ス。此^ノ三^種ノ戒^三毒^中ニハ^ハ其^過尤^モ重^シ。若^シ此^ノ三^漸必^ス具^ス餘^ヲ。菩^薩慈^悲不^レ殺^セ。苦^海斷^ス愛^最要^ト。萬^德三^寶爲^本。設^レ末^世ノ機^具不^レ難^{。而}所^レ護^ル衆^多ナレハ。凡^心忘^失自^有違^犯。故^ニ前^ノ三^ノ戒^ノ制^意如^何答^{。第}

若^シ一^ノ戒^ヲ受^クれば一分^ノ菩薩^トと名^ケ、乃至具^分ノ菩薩^トと名^ケ。故^ニ。然^モ佛^所制^應漸^ク遍^ス學^ス。此^ニ由^テ第二^ニ有^二遍^ス學^一門^一有^リ。隨^性と隱^密と順^勝と意^樂と怖^畏と成^勝と護^障と究^竟とあり。具^ニは彼^ノ疏^ノ如^シ。犯^失とは、謂^ク菩薩^戒には無^餘ノ犯^無し。一分^ノ受^有るが如^ク、一分^ノ持^有るが故^ニ。聲^聞ノ一^重を犯^スする時^ニ便^チ一切^ヲ破^{シテ}比^丘ノ性^ヲ失^フに同^ゼズ。本^業經^ノ如^ク一切^ノ菩薩^凡聖^ノ戒^ハ盡^ク心^ヲ爲^レ體^トと爲^ス。是^ノ故^ニ心^盡れば戒^モ亦^ダ盡^ク。心^盡ること無^キが故^ニ戒^モ亦^ダ盡^クこと無^シ。心^ハ謂^ク期^心なり。此^ニ由^テ生^ヲ轉^ズれども、戒^モ亦^恒に隨^テ運^ニ運^ニ增長^{シテ}、乃^チ成^佛に至^ル。猶^シ如^レ河^ノ水^ノ日^夜に停^ラずして運^運に遷^流して自^ラ大^海に到^ルが如^シ。唯^だ故^らに大^菩提^心を捨^ルを除^ク。然^モ重^戒を犯^スに略^{シテ}二^種有^リ。一^ハ破^{。二}は汚^{ナリ}。若^シ上^品ノ煩^惱纏^ヲ以^テ犯^スれば、所^犯ノ支^ニ隨^テ戒^律儀^ヲ失^ス。若^シ中^下ノ纏^ハ唯^シ汚^ニして失^セズ。瑜^伽に云^フが如^シ。若^シ諸^ノ菩^薩ノ四^種ノ他^勝處^法を毀^レ犯^{シテ}、數^數現^行して、都^テ慚^愧無^ク、深^ク愛^樂を生^{ジテ}、是^ノ功^德なりと見^ルをば、當^ニ知^ルべし、說^テ上^品纏^犯と名^ク。諸^ノ菩^薩暫^ク一^ヒ現^行スル他^勝處^法を現^行するに便^チ苦^薩淨^戒律^儀を捨^ルものには非^ズ。聲^聞ノ一^タび犯^{シテ}即^チ捨^ルには同^ゼズ。又^上ノ纏^ヲ以^テ犯^スは淨^戒を失^スと雖^モ、經^ニに即^チ懺^亦得^レ重^受と說^{ケリ}。問^ハ。若^シ一分^ヲ受^クる者^ハ先^チ何^ノ戒^ヲ受^クべきや。答^ハ。既^ニ意^樂に隨^テ何^ノ總^定して定^ムことを得^ル。我^ガ爲^メノ最^要ならん。而^{シテ}受^持すべし。亦^三ノ戒^有リ。謂^ク快^意殺^生ト、無^慈行^欲ト、毀^謗三^寶ト。三^業ノ犯^戒は貪^瞋癡^ニ依^リ應^テ隨^テ究^竟ス。此^ノ三^種ノ戒^三毒^中ニハ^ハ其^過尤^モ重^シ。若^シ此^ノ三^守らば漸^ク必^ス餘^ヲも具^スべし。菩^薩は慈^悲をもつて殺^セず。苦^海には愛^ヲ斷^ズるを最^要とし、萬^德には三^寶をもつて本^ト爲^ス。設^レ末^世ノ機^具不^レ難^{。而}所^レ護^ル衆^多ナレハ。凡^心忘^失して自^ラ違^犯有^リ。故^ニ前^ノ三^ヲ擇^ブ。問^ハ。前^ノ三^種ノ戒^ノ制^意如^何答^{。第}

一快意殺生戒トイフハ。世間ニ畏ル、死苦爲窮ス。損ル他
 之中ニハ無シ過タルハ奪フ命ヲ。如ニ智度論ニ云フ。設ラ滿ニ世界ニ實ナリトモ
 無有直身命。是即チ菩薩ハ濟フ物爲心ト。而ル施セ極
 怖ラ便失其性ヲ。如ニ瑜伽ニ云カ。若シ問ハ菩薩以何爲體ト
 體ト。應ニ正答テ云ク。大悲爲體ト。由レ此最初制ニ斯
 戒一也。第二ニ無慈行欲戒トイフハ。生死ノ牢獄ニハ姪爲枷
 鎖ト。深縛ニ有情難出離ニ。故ト。如ニ智論ニ云カ。姪欲ハ
 雖不惱衆生。繫縛ニ心故立テ爲ニ大罪ト。瑜伽論ニ
 云ク。諸愛ノ之中ニハ欲愛爲最ト。若シ能ク治ス彼餘ハ自然ニ
 伏ス。如ニ下シ制ス強力ノ劣者ハ自ラ伏ス。然ル此欲法有ニ三種ノ
 過一。苦ニ而似樂ニ故ト。少味多災故。不淨ニ似淨ニ故ト。
 初者ハ頌曰。不忍煩惱ノ病ヲ。行ル姪似樂ニ生ス。猶ヲ
 如ニ下シ抓ク疥病ヲ。於ニ苦樂ノ想生ス。如ニ世尊ノ言カ。欲ハ如シ齒
 骨ノ。無ニ飽期ノ故ト。如ニ草炬ノ故ト。憂火恒燒ク。如ニナルカ火
 坑ノ故ト。增長ニ渴愛ヲ。如ニ蝮毒ノ故ト。賢聖遠避ル。如ニ夢
 見ノ故ト。速趣ニ壞滅ニ。少味多災ト。頌曰。猶如羅刹
 女ノ。如ニ怨詐ノ示カ親ヲ。誑シ心ヲ生ス惡業ヲ。招テ苦障ヲ。涅
 槃一。此句誠可ニ思惟ニ。菩薩藏經ニ云ク。習ニ近ニ欲ニ時ニ
 無ニ惡ト。不レ造レ受ル彼果時無シ苦ト。不レ受レ愛河欲海
 漂溺シテ無ニ岸ト。死生ノ波長流莫レ絶ト。一切ノ怨害皆
 從レ欲生ス。愚人ノ所貪ル如ニ蛾ノ投ル火ト。五百ノ登空ハ
 失レ通而落チ。一角仙人被女人ニ捉ラハ。是以律云。
 可レ畏之甚シ。無ニ過タルハ女人一。寧ロ以ニ男根ノ內ニ毒蛇ノ口ニ。
 蛇害一ノ肉身ヲ。女害一ノ法身ヲ。又ニ龍樹ノ說カク。巧察ハ
 人意ヲ。女人爲智ト。不レ觀レ餘ヲ得失ト。但以欲爲
 親ト。清風猶可レ捉ヘ。女心難得レ定ト。終ニ無シ厭期ト。

*鎖=鎖(講録)

*抓=才+瓜(講録)

蝮=うわばみ

一に快意殺生戒といふは、世間に畏るる所は死苦を窮めと爲す。他を損ずるの
 中には命を奪ふに過たるは無し。智度論に云ふが如し、設し世界に滿らむ實なりとも
 身命に直る有ること無し。是即ち菩薩は物を濟ふを心と爲す。而るに極
 怖を施せば便ち其の性を失すと。瑜伽に云が如し、若し菩薩何を以て體と爲すと
 問はば、正しく答て大悲をもつて體と爲すと云ふべし。此に由て最初に斯
 戒を制すとなり。第二に無慈行欲戒といふは、生死の牢獄には姪を枷
 鎖と爲す。深く有情を縛して出離すること難きが故に。智論に云ふが如し、姪欲は
 衆生を惱さずと雖ども、心を繫縛するが故に立てて大罪と爲すと。瑜伽論に
 云く、諸愛の中には欲愛を最と爲す。若し能く彼を治すれば餘は自然に
 伏す。強力を制すれば劣なる者は自ら伏するが如しと。然るに此の欲法に三種の
 過有り。苦にして樂に似る故に。味少して災多きが故に。不淨にして淨に似るが故に。
 初は頌に曰く、煩惱の病を忍ばずして、姪を行ずるは樂に似て生ず。猶を
 疥病を抓くに、苦に於て樂の想生ずるが如しと。世尊の言が如くんば、欲は齒
 骨の如し、飽期無きが故に。草炬の如くなるが故に、憂火恒に燒く。火
 坑の如くなるが故に渴愛を増長す。蝮毒の如くなるが故に賢聖遠く避る。夢
 見の如くなるが故に速かに壞滅に趣くと。味少して災多し。頌に曰く、猶を羅刹
 女の如し。怨詐して親みを示すが如し。心を誑して惡業を生ず。苦を招て涅
 槃を障ふと。此の句誠に思惟すべし。菩薩藏經に云く、欲に習近する時には惡として
 造らずということ無し。彼の果を受くる時、苦として受けずということ無しと。愛河欲海
 漂溺して岸無し。死生の波長流れて絶ること莫し。一切の怨害は皆
 欲從り生ず。愚人の貪る所、蛾の火に投ぐるが如し。五百の登空は
 通を失して而も落ち、一角仙人は女人に捉られたり。是を以て律に云く、
 畏るべきの甚しき女人に過たるはなし。寧ろ男根を以て毒蛇の口に内るべし。
 蛇は一の肉身を害す、女は法身を害するが故にと。又龍樹の説かく、巧に
 人の意を察するは、女人を智と爲す。餘の得失を觀ぜず、但だ欲を以て親みと爲す。
 清風をば猶を捉へつべし、女心をば定むることを得難しと。終に厭期無くして、

感^レ生^{スル}無^レ窮^リ。生死ノ長夜會離ノ悲^ミ。六趣無^レ已^ム。不^レ淨^ニ似^レ淨^ニ。頌^ニ曰^ク。肉身^ハ雖^レ不^レ淨^{ナリト}。似^レ淨^ニ誑^カ愚^夫。樂^テ穢^レ而無^レ厭^{コト}。似^三猪^ノ樂^ム泥^ニ。此^ノ身^ハ不^レ淨^{ナリ}。累^骨所^レ成^{スル}。血^肉便^穢。薄^皮所^レ持^ル。八^萬戸^ノ蟲^一一^戸九^億。種^種臭^穢九^孔流^漏。不^レ淨^ニ似^レ淨^ニ。謂^ク皮^ノ上^ニ分^白膏^{。熱}血^交所^ニ重^映。誑^心媚^眼種^種。害^ス。然^ニ諸^ノ愚^夫曾^テ無^レ厭^{コト}背^レ。似^三猪^ノ竟^日不^レ離^ニ泥^ニ。所以^ニ今^ニ制^ス。第^三毀^謗三^寶戒^{トハ}。佛^法僧^寶出^レ邪^ノ之^大津^{。入}ル^ノ正^ノ之^要門^{ナリ}。順^レ之^者必^ニ證^ス常^樂。背^レ之^者常^ニ沈^ム苦^海。邪^見違^逆ノ犯^罪莫^レ大^{ナル}焉^{。行}相^幽猛^{。斷}諸^善故^ニ。是^故亦^立テ爲^ニ根^本重^ト。戒^體畢^{。問}。定^學ノ中^ニ修^習何^定。答^{。可}修^唯識^三摩^地。大^乘究^竟故^{。慈}尊^ノ所^證故^{。自}宗^ノ本^旨故^{。大}乘^究竟^者。謂^ク解^深密^經分^別瑜^伽品^ノ中^ニ廣^ク說^ク其^ノ相^{。一}代^ノ諸^教互^ニ好^意ナリ。如^來ノ了^義不^レ如^ニ深^密。所以^者何^{ナラハ}。建^立五^乘顯^示法^華密^意。顯^示三^無性^ヲ。會^ス般^若畢^竟空^ヲ。一^乘之^處未^レ開^ニ五^姓。皆^空之^教未^レ遮^ニ中^道。諸^宗ノ決^判於^テ此^ニ爲^レ足^ト。慈^尊ノ所^證者^{。彌}勒^菩薩^{。佛}而^言。我^憶往^昔。經^テ微^塵劫^{。有}佛^出世^{。名}日^月燈^明。我^從彼^佛而^得出家^{。心}重^世名^一好^遊族^姓。爾^時世^尊我^を教^へて唯^心識^定ヲ入^ニ三^摩地^{。歷}劫^已來^以此^ノ三^昧事^恒沙^ノ佛^{。求}世^名心^歇滅^ノ無^レ有^{コト}。至^ニ燃^燈佛^出現^於世^{。我}乃^得淨^穢有^無皆^是我^心變^化所^レ現^{。世}尊^{。我}了^如。

*萬百講録

竟日終日

*沈沉講録

生を感ずること窮り無し。生死の長夜會離の悲しみ、六趣已むこと無し。不淨にして淨に似たり。頌に曰く、肉身は不淨なりと雖も、淨に似て愚夫を誑かす。樂を樂て厭ふこと無きこと、猪の淤泥を樂むに似たりと。此の身は不淨なり。累骨の穢を樂て厭ふこと無きこと、猪の淤泥を樂むに似たりと。八萬戸の蟲一戸に九億あり。種種の臭穢九孔より流漏し、不淨にして淨に似たり。謂く皮の上分白膏、熱血交り、重映する所なり。誑心眼を媚し種種に燒害す。然るに諸の愚夫曾て厭背無きこと、猪の竟日すら淤泥を離れざるに似たり。所以に今制す。第三に毀謗三寶戒とは、佛法僧寶は邪を出ずるの大津なり、正に入るの要門なり。之に順ずる者は必ず常樂を證す。之に背く者は常に苦海に沈む。邪見違逆の犯罪焉より大なるは莫し。行相幽猛にして諸善を斷するが故に。是の故に亦立てて根本重と爲す。戒體畢ぬ。問、定學の中には何定を修習すべきや。答、唯識三摩地を修すべし。大乘究竟なるが故に、慈尊の所證なるが故に、自宗の本旨なるが故に。大乘究竟とは、謂く解深密經分別瑜伽品の中に廣く其の相を説く。一代の諸教互に好意なり。如來の了義は深密には如かず。所以は何とならば、五乘を建立して法華の密意を顯し、三無性を顯示して、般若の畢竟空を會す。一乘の處には未だ五姓を開かず。皆空之教には未だ中道を遮せず。諸宗の決判此に於て足ぬと爲す。慈尊の所證とは、彌勒菩薩、佛に白して言く、我往昔を憶ふに、微塵劫を経て、佛の出世有り。日月燈明と名く。我れ彼の佛に從て出家を得しかども、心、世名を重くして好て族姓に遊びき。爾の時世尊我を教へて唯心識定を修習して、三摩地に入らしむ。劫を歴て已來た此の三昧を以て恒沙の佛に事ふ。世名を求むる心歇滅の有ること無し。燃燈佛世に出現するに至て、我乃ち無上妙圓識心三昧を成ずることを得たり。乃至盡空の如來の國土の淨穢の有無、皆是我心の變化の現ずる所なり。世尊、我是の如きの

*性姓(大正脚注)

p.556

是唯心識^ヲ故。識性^{ヨリ}流出^ス無量^ノ如來^ヲ。今得^テ授
記^ヲ次補^ス佛處^ニ。佛問^ニ圓通^ヲ。我以^テ諦^{カニ}觀^{スル}十方唯
識^ヲ。識心圓明^{ニシテ}妙^ニ入^ル圓成實^ニ。遠離^{ニシテ}依他^ト及^ヒ遍
計執^ト得^テ無生忍^ヲ。斯^ヲ爲^ス第一^ト。有處云。彌勒^ノ偈
云。我^レ隨^テ日月燈明佛^ニ證^ス得^ス唯識^ニ三昧^ヲ故^ニ。今
於^テ釋迦^ノ正法^ノ中^ニ。略^{シテ}說^フ五分十七地^ヲ。自宗^ノ所^レ明^ス
者。瑜伽師地論^ハ本^ト是燈明如來^ノ所說^{ナリ}也。三十
餘類^ノ菩薩傳說^至慈氏菩薩^ニ。爰^ニ如來^於二十八
圓滿^ノ淨土^ニ解深密會^ニ。正^ク爲^ス慈氏^ノ說^フ毘鉢舍那^ヲ
三^ハ摩地門^ノ修^行唯識^ノ之義^上。唯識^ノ體用^ノ心境^ノ轉
變^ハ補處獨^リ受^テ問答研尋^ス。遂^ニ至^テ如來滅後九百
年^ノ間^ニ。正法陵夷^{多ク}生^ク空見^ヲ。無著菩薩^{證シテ}發光
定^ヲ得^テ大神通^ヲ。數^バ往^ク觀率^ニ詰^ク問中道^ヲ。人多^ク不^レ
信^ズ。還^テ請^{シテ}慈尊^ヲ來^ニ下^ニ閻浮^ニ。于^レ時慈尊^{經テ}四月
夜分^ヲ說^フ五部^ノ論藏^ヲ。瑜伽^ハ是^レ其^ノ根本^ノ教^{ナリ}也。爲^ニ
五分十七地^ト說^フ境行果^ノ三種^ノ唯識^ヲ。至^テ決擇分^ニ
具^ニ載^ク深密^ノ一部^ノ七品^ヲ。最勝子等^ノ菩薩讚^{シテ}瑜伽^ヲ
云。此^ノ論^ハ殊勝^{ナル}コト。若^シ蓮華^ノ。猶^シ如^シ寶藏^ノ如^シ大海^ノ。具^ニ
顯^ス諸乘廣大^ノ義^ヲ。善^ク其^ノ文^ヲ無^ク有^ク遺^ト。無^ク著^ク結
集^{シテ}漸備^ニ十支^ヲ。天親^ノ三十唯識^ハ是^レ其^ノ一支^{ナリ}也。十
大論師^爲作^ル釋^ヲ。護法秀^テ施^ス芳馥^ヲ。即^シ我^ガ法
相應理圓實^ノ之宗源^也。菩提樹下禪禮^云。
依^ニ一切法相品^ニ豎^ニ說^ク百法理事^ノ之相^ヲ。依^ニ心
意識相品^ニ橫^ニ論^ク一心相性^ノ之義^ヲ。故^ニ名^ク唯識論^ト。
百法明門始^テ披^ク樞鍵^ヲ。三分^ノ體用妙^ニ絶^ス古今^ニ。
至^テ行唯識^ノ中^ノ加行^ノ位^ニ。現前^ニ立^ク少物^ヲ謂^フ是^レ唯

p.55c

*毘毘講録

陵夷||次第に衰え廢れる

樞||かなめ

唯心識を了するが故に、識性より無量の如來を流出す。今授
記を得て次で佛處に補す。佛、圓通を問ふ。我諦かに十方唯識を
觀するを以て、識心圓明にして妙に圓成實に入る。依他と及び遍計執とを
遠離して無生忍を得。斯を第一と爲す。有る處に云く、彌勒の偈に
云く、我れ日月燈明佛に隨て唯識三昧を證得するが故に、今
釋迦の正法の中に於て、略して五分十七地を説く。自宗の明す所とは、
瑜伽師地論は本是れ燈明如來の所說なり。三十
餘類の菩薩傳說して慈氏菩薩に至る。爰に如來、十八
圓滿の淨土に於て解深密會に、正しく慈氏の爲に毘鉢舍那
三摩地門の唯識を修行するの義を説く。唯識の體用、心境の轉
變は補處獨り受て問答研尋す。遂に如來滅後九百
年の間に至て、正法陵夷して多く空見を生ず。無著菩薩發光
定を證して大神通を得、數ば觀率に往き中道を詰問す。人多く
信ぜず。還て慈尊を請して閻浮に來下したまふ。時に慈尊四月
夜分を経て五部の論藏を説きたまふ。瑜伽は是れ其の根本の教なり。
五分十七地と爲し境行果の三種の唯識を説き、決擇分に至て
具に深密一部の七品を載す。最勝子等の菩薩、瑜伽を讚じて
云く、此の論は殊勝なること蓮華の若し。猶し寶藏の如し、大海の如し。具に
諸乘廣大の義を顯す。善く其の文を釋するに遺すこと有ること無し。無著結
集して漸く十支を備ふ。天親の三十唯識は是れ其の一支なり。十
大論師爲に釋を作る。護法秀でて芳馥を施す。即是れ我が法
相應理圓實の宗源なり。菩提樹下禪禮に云く、
一切法相品に依て豎に百法理事の相を説く。心
意識相品に依て横に一心相性の義を論ず。故に唯識論と名く。
百法明門始て樞鍵を披く。三分の體用妙に古今に絶す。
行唯識の中の加行の位に至て、現前に少物を立て是れ唯

識ノ性ナリト者。世親自ラ居シテ明得定ニ依テ尋思ノ觀ニ修行シテ

唯識ヲ。深密經所說唯識三摩地是レナリ也。護法菩薩

薩授ニ戒賢論師ニ。戒賢傳ニ玄奘三藏ニ。三藏歸東シテ

翻傳功成テ。奏シテ高宗皇帝ニ乞入テ深山ニ靜修セント禪

定ヲ。聖主哀惜シテ請シテ留ム玉華ニ。日本ノ道昭和尙於三

藏所ニ受テ無姓衆生ノ義ヲ。并ニ傳テ禪法ヲ歸朝シキ。修得ノ

之時放テ光明ヲ常ニ薰異香ヲ。所得ノ三昧雖レ不レ記

名。禪觀ノ道誠盛ニ。我宗ニ。問。三慧ノ中ニハ正

行ニ何レ慧觀ヲ。以何レ爲レ境ト。答。資糧ノ淺位ハ多ク住シテ

外門ニ。未入ニ僧祇ニ。豈是レ超ニ聞思ヲ即修慧ナラシヤ。方便

所觀ノ法者は是レ三性ナリ。其ノ義如上ノ。定慧俱ニ行シ。止觀

等ヲ轉ス。或名ニ唯識三摩地ト。或稱ニ唯識觀ト。章ニ云

攝論ハ但舉テ定ノ中所起之智ヲ以テ爲レ觀ノ體ト者即

此義也。大師ノ云。三慧雖通ニ福慧二利ノ一切ノ功

徳ニ。然モ行ノ根本ナリ。甚深ノ綱要ナリ。勝義易シ入リ。應シテ時ニ無レ

等シキコト。離諸ノ過失ヲ。遍觀ニ詳審スレハ。唯識爲レ最ト。漸悟頓

悟一乘大乘無不ト云コト。依テ説此ノ深理ニ故。問。修ト

者何ノ義ト。答。章ニ云。謂ク有漏無漏觀心ノ種子ト

現行ト展轉増勝ト生長シ圓滿ト。初テ修習スル位隨テ所聞ノ

法ニ託シテ境思惟シテ。令ニ此觀心ヲ純熟自在ナラシム。後ニハ伏ス所

取ト能取トノ二執ヲ。如是展轉下轉シテ中ト成ル。中轉シテ成

上ト。究竟圓滿ノ名之ヲ爲レ修。觀心轉明證ニシテ。境ノ相

像漸微ニナリ。忽ニ心境ト乃冥觀轉ニ成ニ無漏ト深旨可レ知之。

第四一心門

p.56a

*慧ニ惠(講録)

玉華ニ玉華宮

僧祇ニ僧伽

識の性なりと謂ふは、世親自ら明得定に居して尋思の觀に依て

唯識を修行したまふ。深密經所說の唯識三摩地是れなり。護法菩薩

薩戒賢論師に授け、戒賢玄奘三藏に傳ふ。三藏歸東して

翻傳の功成りて、高宗皇帝に奏して深山に入りて靜かに禪

定を修せんと乞ふ。聖主哀惜して請して玉華に留む。日本の道昭和尙三

藏の所に於て無姓衆生の義を受く。並びに禪法を傳へて歸朝しき。修得の

時光明を放ちて常に異香を薰ず。所得の三昧名を記せずと雖も、

禪觀の道誠我宗に盛んなり。問、三慧の中には正しく

何れの慧の觀を可行じ、何を以てか境と爲ん。答、資糧の淺位は多く

外門に住して、未だ僧祇に入らず。豈に是れ聞思を超て即ち修慧ならんや。方便

所觀の法は是れ三性なり。其の義上の如し。定慧俱に行じ、止觀

等しく轉ず。或は唯識三摩地と名け、或は唯識觀と稱す。章に云く

攝論は但だ定の中に起す所の智を擧て以て觀の體と爲すとは即ち

此の義なり。大師の云く、三慧は福慧二利の一切の功

徳に通ずと雖も、然も行の根本なり。甚深の綱要なり。勝義入り易し。時に應じて

等しきこと無し。諸の過失を離れ、遍く觀るに詳審すれば唯識を最と爲す。漸悟頓

悟一乘大乘も、説を此の深理に依らずと云ふこと無き故に。問、修と

は何の義ぞ。答、章に云く、謂く有漏無漏觀心の種子と現行と

展轉し増勝にして生長し圓滿ならしむ。初て修習する位は所聞の法に

隨て境に託して思惟して、此の觀心をして純熟自在ならしむ。後には所

取と能取との二執を伏す。是の如く展轉して下轉じて中と成る。中轉じて

上と成り、究竟圓滿す、之を名て修と爲す。觀心轉明證にして、境の相像

漸く微になんぬ。忽に心と境と乃ち冥して觀轉じて無漏と成る

第四一心門

先示_レ相者。心意識ノ三ハ名ノ之差別ニシテ。體實ニハ無異。且ク心者雜染ト清淨トノ諸法ノ種子ノ之所ニ集起_{スル}故ニ名_テ爲_レ心。或由_テ種種ノ法ニ熏習_{スル}種子ノ所ニ積集_{スル}故ニ。以前ノ七識一名ルノ心之義非_ス種種ノ積集ニ。然モ心ノ之義第八獨リ勝_リ。楞伽ニ云。藏識說名_レ心。思量_{スル}性名_レ意。能_ク了_ル諸_ノ境相。是說_テ名_爲識。攝_テ百法_爲五法。歸_テ五法_爲八識。總_{シテ}八識_爲一心。八識ノ自性ハ不可_レ言_定一_ト。行相_ト所依_ト緣_ト相應_ト異_{ナル}故_ニ。起滅異_{ナル}故。薰習_異故。亦非_ニ定_異。經說_下八識_如水波等_ノ無_ニ差別_故定_異。應_レ非_ニ因果_ノ性_故。如_ニ幻事等_ノ。無_ニ定_性故_ニ若_レ依_レ勝義_ニ八識_不異_ニ。設_レ依_ハ世俗_ニ以_テ末_ヲ從_テ本_ニ。總_{シテ}說_ニ一心_ト。或_ハ又_ハ本末雖_レ異_ト。心_ノ名等_カ故_ニ總_爲一心_ト。諸教施設隨_レ應_ニ可_レ知_ル。若_レ欲_レ了_レ知_ト有_爲ノ根本流轉_所依_テ可_レ觀_ニ賴_耶。若_レ欲_レ了_レ知_{妄執}ノ根本有漏_ノ過失_ヲ可_レ觀_ニ末_那。若_レ欲_レ了_レ知_{分別}ノ相狀_{三性}ノ差別_ニ方_ニ觀_ニ第一_六。第六意識_ハ行相無邊_{ナリ}。有_リ十五種_ノ不共業_ヲ。隨_レ應_ニ知_レ之_ヲ。

二引_レ教者。遺教云。是_ノ故_ニ汝等當_ニ好_ク制_ス心_ヲ。心_ノ之可_レ畏_甚於_ニ毒蛇_一。惡獸怨賊_ノ大火_越・未_レ足_レ喻_也。縱_ニ此心_一者喪_フ人_ノ善事_ヲ。制_ニ之_ヲ一處_ニ無_ニ事_ト不_レ辦_ニ*。是_ノ故_ニ比丘當_ニ勤_テ精進_{シテ}折_伏汝_心。文此_ノ經_ハ正_ク說_ク戒律_ノ之相_ヲ。密_{シク}守_テ根門_ヲ制_ス心_ヲ放_ス。一心_ノ折_伏三業_無犯_ニ。然實_ニ依_テ戒_引定_ヲ。依_レ定_滿慧_ヲ。制_ル心_ノ之相_ヲ。定慧_爲本_ト。心_ハ毒蛇_ノ壞_カ法_身一_故。心_ハ惡獸_ノ害_カ慧命_一故。心_ハ怨賊_ノ奪_カ

*辨_ニ辨_講錄

先づ相を示すとは、心意識の三は名の差別にして、體は實には異無し。且ク心とは雜染と清淨との諸法の種子の集起する所なるが故に名_テ心と爲す。或は種種の法に由て熏習する種子が積集する所なるが故に。前_ノ七識_を以_テ心_と名_クる_ノ義_、種_ノ積集_に非_ズ。然も心_ノ之義_は第八獨_リ勝_リたり。楞伽に云く、藏識を説きて心と名く。思量する性を意と名く。能_ク諸_ノ境相_を了_ル。是を説きて名_ケて識_と爲_スと。百法を攝して五法と爲し、五法を歸して八識と爲し、八識を總じて一心と爲す。八識の自性は定んで一とは言ふべからず。行相と所依と緣と相應と異なるが故に。起滅異なるが故に。薰習異なるが故に。亦定んで異にも非ず。經に八識は水波等の如く差別無しと説くが故に。定んで異ならば、應に因果の性に非ざるべきが故に。幻事等の如く、定性無きが故に。若し勝義に依らば八識異にあらず。設し世俗に依らば末を以て本に從て總じて一心と説く。或は又本末異と雖も心_ノ名等_キが故に總じて一心と爲す。諸教の施設應に隨て知るべし。若し有爲の根本流轉の所依を了知せんと欲はば賴耶を觀ずべし。若し妄執の根本有漏の過失を了知せんと欲はば末那を觀ずべし。若し分別の相狀三性_ノ差別_を了知せんと欲はば方に第一_六を觀ずべし。第六意識は行相無邊なり。十五種_ノ不共業_有り。應に隨て之を知れ。

二に教を引くとは、遺教に云く、是の故に汝等當に好く心を制すべし。心の畏るべきこと毒蛇より甚し。惡獸怨賊_ノ大火_越・するも未だ_レ喻_に足_らざるなり。此の心を縱するは人の善事を喪ふ。之を一處に制すれば事と辦へずと云こと無し。是の故に比丘當に勤て精進して汝が心を折伏すべし。文此の經は正しく戒律の相を説く。密しく根門を守て心の放_スを制す。一心を折伏すれば三業は犯無し。然れば實に戒に依て定を引き、定に依て慧を滿たす。心を制するの相は、定慧を本と爲す。心は毒蛇の如し法身を壞すが故に。心は惡獸の如し慧命を害すが故に。心は怨賊の如し

聖財^一故^二。心^ハ如^ニ大火^一燒^ニ善根^ヲ故^ニ。夫^レ人^ハ欲^レ別^レレント言^フ好^シ。鳥^ハ欲^レ去^レ音和^{ナリ}。大師最後の教。遣弟誰不^レ守。雙林之昔。若^シ我^レ親聞^{シカハ}。一言之下^ニ定^テ證^ム無^シ生^ヲ。悠悠^{タル}末法。嗚呼悲哉。纔^ニ見^テ遺教^ヲ不^レ能^ニ奉^フ行^ス。スルト。

p.566

三解^{スト}疑^フ者。問。身語放[・]心^モ亦不^レ調。水^ハ隨^テ器^ニ漏^リ。樹^ハ依^テ枝^ニ動^ク。直^ニ制^{セハ}一心^ヲ何^ノ時^カ住^{セン}靜^ニ。是^ヲ以^テ二乘^ノ戒行^ハ偏^ニ守^テ身語^ヲ早^ク證^ス苦際^一。八支^ノ禪定^ハ先^ツ調^テ威儀^ヲ漸^ク引^ク等持^一。初心^ノ行者寧^ク捨^テ易^ク立^ン難^ヤ耶。答。心境相助。内外不^レ離。通^{シテ}論^ハ之^ヲ者制^外爲^宜。而^ル毒樹截^レ根^ヲ枝葉早^ク枯^ル。獅子近^レ人^ニ礫石永^ク止^ム。本末之功何敢^テ爲^ム等^ト。況^ヤ菩薩^ノ三業^ハ修^マ心^ヲ爲^本。不^同聲聞^ノ狹劣自調^一。仙人意憤^ハ害^{コト}物^ヲ是^深。練若假名^招訛^ト尤^多。不^如下^下能制^{シテ}一心^ヲ漸^ク却^中。萬緣^上。

第五觀心門

初示^レ相者。觀^ト者觀照。以^レ智^ヲ爲^體。章云。能觀^ノ唯識^ハ以^レ別境^ノ慧^ヲ而爲^ニ自體^ト。心^ハ是^レ所觀。即一切^ノ法^{ナリ}。略^{シテ}有^ニ五重^一。從^レ麤^至細^ニ展轉相推^{シテ}遣^ス。虚^ト捨^濫粗顯^ル前門^ニ。今且有爲^ノ之識^ハ觀^ニ本末^ノ義^一。眞如^ノ之心^ニ用^ニ遣相門^ヲ。事理^ノ指歸^以之可^足。章云。三^ニ攝末歸本識^一。心内所取^ノ境界^ハ顯然^{ナリ}。内^ノ能取^ノ心^ノ作用^モ亦爾^{ナリ}。此^ノ見相分^ハ俱^ニ依^テ識^ニ有^リ。離^テ識^ニ自體^ノ本^ニ末^ハ必無^故。三十頌言^乃至^{解深密}說^フ。諸識所緣^ハ唯識^ノ所現^{云云}。又云。五^ニ遣相證性^一識^ノ識^ノ言^ノ所^レ表^具有^ニ理^ト事^ト。事^ヲ爲^ニ相用^ト。遣^テ而^モ不^レ

<p>聖財を奪ふが故に。心は大火の如し善根を焼くが故に。夫れ人は別れんと欲はば言好し。鳥は去んと欲はば音和なり。大師最後の教、遣弟誰か守らざらん。雙林の昔、若し我れ親く聞しかば、一言の下に定で無生を證らむ。悠悠たる末法、嗚呼悲しき哉。纔に遺教を見て奉行すること能はず。</p>	<p>聖財を奪ふが故に。心は大火の如し善根を焼くが故に。夫れ人は別れんと欲はば言好し。鳥は去んと欲はば音和なり。大師最後の教、遣弟誰か守らざらん。雙林の昔、若し我れ親く聞しかば、一言の下に定で無生を證らむ。悠悠たる末法、嗚呼悲しき哉。纔に遺教を見て奉行すること能はず。</p>
<p>三に疑を解すとは、問、身語放・すれば心も亦調はず。水は器に隨て漏り、樹は枝に依て動く。直に一心を制せば何の時の時か靜に住せん。是を以て二乗の戒行は偏へに身語を守て早く苦際を證す。八支の禪定は先づ威儀を調へて漸く等持を引く。初心の行者寧ろ易を捨てて難を立んや。答、心境相ひ助けて内外離れず。通して之を論せば外を制するを宜と爲す。而るに毒樹根を截れば枝葉早く枯る。獅子人に近くば礫石永く止む。本末の功何ぞ敢て等しと爲む。況や菩薩の三業は心を修すを本と爲す。聲聞の狹劣自調には同ぜず。仙人の意憤は物を害すこと是れ深し。練若假名、訛を招くこと尤も多し。能く一心を制して漸く萬縁を却けんには如かじ。</p>	<p>三に疑を解すとは、問、身語放・すれば心も亦調はず。水は器に隨て漏り、樹は枝に依て動く。直に一心を制せば何の時の時か靜に住せん。是を以て二乗の戒行は偏へに身語を守て早く苦際を證す。八支の禪定は先づ威儀を調へて漸く等持を引く。初心の行者寧ろ易を捨てて難を立んや。答、心境相ひ助けて内外離れず。通して之を論せば外を制するを宜と爲す。而るに毒樹根を截れば枝葉早く枯る。獅子人に近くば礫石永く止む。本末の功何ぞ敢て等しと爲む。況や菩薩の三業は心を修すを本と爲す。聲聞の狹劣自調には同ぜず。仙人の意憤は物を害すこと是れ深し。練若假名、訛を招くこと尤も多し。能く一心を制して漸く萬縁を却けんには如かじ。</p>
<p>練若 寺院・假名 通俗 *訛 言十(講録) *犯 言十(講録) *上中下に変更</p>	<p>練若 寺院・假名 通俗 *訛 言十(講録) *犯 言十(講録) *上中下に変更</p>
<p>別境の慧 事理を分別決定して疑念を断ずる心作用。 *麤 麤(講録)</p>	<p>別境の慧 事理を分別決定して疑念を断ずる心作用。 *麤 麤(講録)</p>
<p>章 大乘法苑義林章 一遣虚存実識 二捨濫留純識 三攝末歸本識</p>	<p>章 大乘法苑義林章 一遣虚存実識 二捨濫留純識 三攝末歸本識</p>

取。理爲^二性體^一。應^二求作證^ス。乃至證見^二彼分^一時。
知^下如^二蛇智^ノ亂^上。已上心法^ハ微細^{ナリ}。可用^二譬喻^ヲ。譬^ト
者譬況^{ナリ}。喻^{トイフ}ハ是^レ曉喻^{ナリ}。佛化^{スル}ニ依^カ譬喻^ニ故^一。深
密經^ニ云ク。如^イ依^ク善^ク瑩^ク清淨^ト鏡面^ニ以^テ質^ヲ爲^ス緣^ト還^テ
見^ニ本質^ヲ。而謂^ニ我今見^ニ於^ニ影像^ヲ。及謂^ニ離^ニ質^ニ別^ニ
有^ニ所行^ノ影像^{顯現^{スル}コト}。此中^ニ無^{コト}少法^ト能見^{コト}少^一
法^ヲ。然即此心^ハ是生^ル時^即有^ニ如^レ是^レ影像^顯
現^{スル}云^ク。無著教授^ノ頌^ニ云。菩薩^於定^位。觀^ニ影^ハ唯
是心^ノ。護法^云。非^レ如^ニ手^等ノ親^ク執^ニ外物^ヲ日^等ノ舒^テ
光^ヲ親^ク照^テ外境^ヲ。但^レ如^ニ鏡^等ノ似^テ外境^ニ現^ルカ。故^ニ契經^ニ
言^ハ已上^又如來^ノ圓鏡智^ハ能^ク現^シ能^ク生^ス身^ト土^ト智^トノ影^ヲ。
故知^ニ圓鏡^ノ譬^ハ心^ニ尤^ニ近^シ。一^ニ本末^相依^門。鏡^ノ體^ヲ爲^レ
本^ト。光影^ヲ爲^レ末^ト。依^レ鏡^ニ光影^生ス。心^心所法^モ自體^ヲ
爲^レ本^ト。相見^爲末^ト。本末^相依^{スル}コト亦復^如是。二^ニ體
用^轉變^門。鏡^ノ體^轉似^テ光^用。光^用轉^似影^像。光
影^ノ二用^ハ一鏡^ノ所現^{ナリ}。心^ノ體生^{スル}時^轉似^テ能取^ニ。能取
亦轉^似所取^ノ相^ニ。相見^ノ二用^ハ一體^ノ所變^{ナリ}。本頌^ニ云。
是^ノ諸識^轉變^{シテ}分別^{タリ}所分別^ト。釋^{シテ}云。是^レ諸識^ト者謂^ク
前^ニ所說^ニ三能變^ノ識^ト及^ニ彼^ノ心^所ト^ソ。見^相二分^ニ立^ニ轉
變^ト名^ヲ。所變^ノ見^分說^テ名^ニ分別^ト。能取^ノ相^カ故^一。所變^ノ相
分^ヲ名^ニ所分別^ト。見^所取^故。故^無性^ノ云^ク。即^一體^ノ上^ニ
有^ニ二^ノ影生^一。三^ニ不^一不^一異^門。一^ニ鏡^ノ之^體光^ト影^トノ二
用^ト三義^不即^{ナリ}。所依^ト能照^ト所照^ト異^カ故^三義^亦不^レ
異^{ナラ}。鏡^ノ能照^ノ邊^名爲^レ光^ト。光^映質^ニ假^シ說^テ影^ト故^ニ。三
相展^轉互^ニ無^ニ定^異。心中^ノ三分^モ亦爾^{ナリ}。所量^ト能量^ト
量果^ト各別^{ナリ}。相^ハ是非^縁不^定即^縁心^ニ。見^ハ是

p.56

講録の二三を交換した

四隱劣顯勝識
五遣相證性識
質^{ゼツ}形あるもの
本質^ニ事物^{それ}自體
取らず。理を性體と爲す。應に求て作證すべし。乃至彼分を證見しつる時、
蛇智の如き亂と知る。已上心法は微細なり。譬喻を用ふべし。譬とは
譬況なり。喻といふは是れ曉喻なり。佛、劣根を化するに譬喻に依るが故に。深
密經に云く、如し善く瑩る清淨なる鏡面に依り質を以て縁と爲し還て
本質を見る。而も我今影像を見ると謂ふ。及び質に離れて別に
所行の影像顯現すること有りと謂へり。此中には少法として能く少法を見ること
有ること無し。然れば即ち此の心是の如く生る時、即ち是の如きの影像顯
現すること有り云云。無著教授の頌に云く。菩薩は定位に於て、影は唯だ
是心のみなりと觀ず。護法の云く、手等の親しく外物を執り日等の光を舒べて
親しく外境を照すが如きには非ず。但だ鏡等の外境に似て現るが如くなるが故に契經に
言へり。已上。又如來の圓鏡智は身と土と智との影を能く現じ能く生ず。
故に知ぬ圓鏡をば心に譬ふるに尤も近し。一に本末相依門。鏡の體を
本と爲し、光影を末と爲す。鏡に依て光影生ず。心心所法も自體を
本と爲し、相見を末と爲す。本末相依すること亦復た是の如し。二に體
用轉變門。鏡の體轉じて光用に似る。光用轉じて影像に似る。光
影の二用は一鏡の所現なり。心の體生ずる時轉じて能取に似る。能取
亦轉じて所取の相に似る。相見の二用は一體の所變なり。本頌に云く、
是の諸識轉變して分別たり所分別たりと。釋して云く、是れ諸識とは謂く
前に説く所の三能變の識と及び彼の心所とぞ。見相二分に轉
變と云ふ名を立つ。所變の見分を説て分別と名く。能取の相が故に。所變の相
分を所分別と名く。見が所取の故に。故に無性の云く、即ち一體の上
に二の影生ずること有り。三に不^一不^一異^門。一^ニ鏡^ノ之^體光^ト影^トとの二
用と三義不^レ即^{ナリ}。所依と能照と所照と異なるが故に三義亦
異ならず。鏡の能照の邊を名て光と爲す。光、質に映るを假に影と説くが故に。三
相展轉して互に定んで異無きなり。心中の三分も亦爾なり。所量と能量と
量果とは各別なり。相は是非縁慮なれば定んで縁慮の心に即するにあらず。見は是

外縁^{ナレハ}不定^{スルニ}即^ニ内證^ノ體^ニ。而^モ見分^ハ即是^カ體^上ノ縁用^{ナリ}。
相分^モ亦是^カ見分^ノ行解^ノ相貌^{ナリ}。可^レ知^三用一體^ニ不^レ一^レ不^レ異^{。四}非有似有門。影^ハ非^ニ離^レ鏡^有一^{。如}上ノ義^{。而}於^ニ鏡^ノ上^ニ現有^ニ影像^一。相狀^宛然^{。不}說^テ爲^レ無^ト。嬰兒^見之^ヲ欲^レ取^ニ手^中。心^ノ影像^ノ非^シ有^ニ似^有亦爾^{ナリ}。非^有者^遮實^有。似^有者^談假^有。或^ハ妄情^ノ實^有之^ノ想^ニ。故^說似^有。五^ニ非外似外門。六^ニ非實似實門。准^ニ次前^ノ門^ニ。而^ニ嬰兒^見影^爲實^實人^一。與^ニ影^共戲^自作^ニ嬉戲^{。影}亦^嬉戲^{。鷄}鳥^見影^爲實^鳥互^相鬪^諍。自^爭之^時謂^ニ他^又爭^一。心用^モ亦爾^{ナリ}。於^ニ自所變^ノ境^執爲^實。或^爲外^故。或^愛或^憎。有^智之^人見^鏡中^ノ影^{。知}似^ニ外^質而非^ニ實^質還^在鏡^中無^別外^質。了^於鏡^影總^ニ不^愛憎^一。悟^證唯^識一切^ノ境界^總非^實相^{。豈}生^ニ愛^怖耶^{。七}妄業^生起^門。如^上可^レ知^{。前}取^ニ境^邊。今^ハ說^ニ心^想。嬰兒^生戲^{。鷄}鳥^起忿^{。皆}是^迷亂^ノ之^想。生死^ノ妄業^亦爾^{ナリ}。八^ニ非内非外門。影像^ハ於^レ鏡^不住^外不^住内^{。亦}非^ニ兩^間以^何知^ト者^{。以}鏡^近質^時其^影浮^上。若^去質遠^鏡時。影^在鏡^底。方^知内外^俱不^可得^{。心}中^ノ境^亦爾^須彌^巨海^不住^心外^{。又}心^竊所^思境^不住^心中^{。若}住^外者^成下^以他^ノ實^物爲^中心^ノ所^取上^{。如}手^等執^レ物^{。豈}是^心法^ノ影^像耶^{。既}不^在外^不在^内。亦^可知^體變^所現^假說^名境^{。境}即^是心^體。豈^離心^別居^内外^耶。九^ニ非近非遠門。遠^近形^相一^時現^鏡。鏡^中無

p.57a

外縁なれば定んで内證の體に即するにあらず。而も見分は即ち是れ體が上の縁用なり。相分も亦是れ見分が行解の相貌なり。知るべし三用一體にして一にあらず異にあらざることを。四に非有似有門。影は鏡に離れて有に非ず。上の義の如し。而も鏡の上に於て現に影像有り。相狀宛然たり。説て無と爲さず。嬰兒之を見て手中に取らむと欲す。心の影像の有に非ずして有に似る亦爾なり。非有とは實有を遮す。似有とは假有を談ず。或は妄情の實有の想に似るが故に似有と説く。五に非外似外門。六に非實似實門。次前の門に准せよ。而るに嬰兒は影を見て實人と爲す。影と與に共に戯れ自ら嬉戲を作す。影も亦嬉戲す。鷄鳥は影を見て實の鳥と爲し互に相ひ鬪諍す。自ら争ふの時は他も又争ふと謂ふ。心用も亦爾なり。自ら所變の境に於て執して實と爲す。或は外と爲すが故に、或は愛し或は憎む。有智の人は鏡中の影を見て、外質に似て而も實質に非ず還て鏡中に在り別に外質無しと知りて、了に鏡影に於て總じて愛憎せず。唯識を悟證すれば一切の境界總じて實の相に非ず。豈に愛怖を生ぜんや。七に妄業生起門。上の如く知るべし。前には境の邊を取る。今は心想を説く。嬰兒は戲を生じ、鷄鳥は忿を起す。皆是れ迷亂の想なり。生死の妄業も亦爾なり。八に非内非外門。影像は鏡に於て外にも住せず内にも住せず。亦兩間にも非ず。何を以て知るとならば、鏡を以て質に近づく時、其の影、上に浮ぶ。若し質を去て鏡を遠ざくる時、影、鏡の底に在り。方に知ぬ内外に俱に不可得なり。心中の境も亦爾なり須彌も巨海も心外に住せず。又心竊かに思ふ所の境も心中にも住せず。若し外に住さば他の實物を以て心が所取と爲るに成んぬ。手等の物を執るが如し。豈に是れ心法の影像ならんや。既に外に在らず内に在らず。亦知るべし體變じて現ずる所を假説して境と名く。境は即ち是れ心體なり。豈に心に離て別に内外に居むや。九に非近非遠門。遠近の形相一時に鏡に現ず。鏡中に

有^二遠近^一。阿頼耶識^ノ一時^ニ緣變^{スル}無邊^ノ境^ラ亦爾。

依^二妄薰習^一境雖^レ似^レ住^ニ彼此^ノ方所^ニ。實是虛假^ニ。

不可^レ定^ニ遠近^一。心^ハ是無形無實^ノ之法^{ナリ}也。豈無形作用實^ニ方所^一耶。若依^レ假論^{スレハ}非無^ニ此相^一。鏡中^ノ影亦^ニ左右等^ノ假相^一故。方知皆是令^三人^{ヲシテ}有此想。鏡影^ハ不可^レ說^ニ遠近^一。十大小相容門。小鏡^ノ中^ニ有^二大面等^ノ相^一。鏡^ハ如^レ實小^シ。影^ハ如^レ實大^{ナリ}。大小不^レ變。小^イ能容^ル大^ヲ。心法亦爾^リ。雖無^ニ形質^一。不^レ託^ニ內身^一之時^ニ不^レ說^テ爲^レ大^ト。此心一時^ニ變^ス無^ニ邊^ノ器界^一。是小^イ容^ル大^ヲ也。亦於^ニ影像^一彼此^ノ衆相實^ニ非異所^一。雖分^ニ布^ス中邊^一影實^ニ在^レ中^ニ。以^レ何知^{ナラハ}者。一人向^ニ鏡^一面^ニ見^レ衆像^ハ在^レ別所^一。一人在^レ傍^ニ見^レ之時^ニ其影微小^ニ縮^テ在^ニ中央^ニ。可知^レ鏡^ノ中邊^ノ諸光相共^ニ映^{シテ}外^ニ寫^ス諸影^一故。不可^レ言^テ彼影^ハ在^レ彼所^一此影^ハ在^レ此所^一。實是不^レ定^テ住^ル中^ニ。映^ス邊光^ニ故不定^テ住^ル邊^ニ。又映^ニ中光^一故^ニ既^ニ共^{シテ}所^ニ生^セ。豈有^ニ所^一心中^ノ諸境^{タル}九山^モ八海^モ微塵^モ大器^モ互更^ニ不^レ即不^レ離^モ亦爾也。十一^ニ非青非黃門。鏡面向^ニ衆像^一有^二種種^一色^一。白色^ノ鏡體^ニ實^ニ青黃^ヲ。可知^レ與^ニ外緣^一合^{シテ}假^リ似^リ青黃^ニ。心中^ノ色相^{非^ニ實^ニ色^一亦爾}。心^ハ是緣慮^ノ法^{ナリ}。無色界之香等^ノ變^ル異相^一。衆緣和合^{シテ}心上^ノ似色^{非^ニ眞實^ノ相^一可知亦同}。十二^ニ無來無去門。鏡面^ニ人質來^{レハ}影亦來^{。而無^ニ所^一從來^一}。鏡^ノ外^ニ本^{ヨリ}無^レ影。豈自^レ東來^{ラム}耶。人去^{レハ}影亦去^{。而無^ニ所^一至往^一}。鏡^ノ外^ニ本^{ヨリ}無^レ影。豈往^レ西^ニ哉。未來^モ無^レ所^一從過去^{無^レ所^一往亦爾}。只對^レ境^ニ時^ニ有^レ影。現在^ノ

p.57b

*依^レ由^レ講錄

*實^ニ質^ノ講錄・日大

*又^ニ講錄

遠近有ること無し。阿頼耶識の一時に無邊の境を緣變するも亦爾なり。

妄薰習に依て境は彼此の方所に住するに似たりと雖も、實に是れ虚假にして遠近を定むべからず。心は是れ無形無實の法なり。豈に無形的作用實に方所有らむや。若し假に依て論ずれば此相無に非ず。鏡中の影も亦左右等の假相有るが故に。方に知るべし皆是れ人をして此想有らしむ。鏡の影をば遠近と説くべからず。十に大小相容門。小鏡の中に大面等の相有り。鏡は實の如く小さし。影は實の如く大なり。大小變らず。小能く大を容る。心法も亦爾り。形質無しと雖も内身に託さざるの時は説きて大と爲さず。此の心一時に無邊の器界を變ず。是れ小、大を容るるなり。亦影像に於ても彼此の衆相實に異所に非ず。中邊に分布すと雖も影は實に中に在り。何を以て知るとならば、一人、鏡の面に向て見れば衆像は別所に在り。一人、傍に在て之を見る時其の影微小にして縮みて中央に在り。知るべし鏡の中邊の諸光相ひ共に外に映じて諸影を寫すが故に、彼が影は彼所に在り此が影は此所に在りと言ふべからず。實に是れ定んで中に住るにあらず。邊光に映ずるが故に定んで住るにあらず。又中光に映ずるが故に既に共して生ぜられたり。豈に定所有らんや。心中の諸境たる九山も八海も微塵も大器も互に更に即せず離れざることも亦爾なり。十一に非青非黃門。鏡面は衆像に向へば種種の色有り。白色の鏡體に實の青黃を生ず。知るべし、外緣と合して假りに青黃に似たり。心中の色相の實の色に非ざることも亦爾り。心は是れ緣慮の法なり。無色界之香等の異相を變へる。衆緣和合して心上の似色眞實の相に非ざることを知るべきも亦同じ。十二に無來無去門。鏡面に人質來れば影も亦來る。而も從來する所無し。鏡の外に本より影無し。豈に東より來らむや。人去れば影も亦去る。而も至り往く所無し。鏡の外には本影無し。豈に西に往むや。未來も從ふ所無く過去も往く所無きことも亦爾なり。只境に對ふ時に影有り。現在の

寶^ト。三祇^ニ千修^{シテ}轉^{シテ}向^フ朝^ノ日^ニ。

二^ニ引^{トイハ}教者[。]心地觀經云。汝等凡夫^ハ不^レ觀^ニ自

心^ヲ。是故漂^ニ流^{セリ}生死海^ノ中^ニ。諸佛菩薩^ハ能^ク觀^{スル}心

故[。]度^テ生死^ノ海^ニ到^リ於^リ彼岸^ニ。論云。或^ハ諸^ノ愚夫迷^ニ

執^{シテ}於^リ境^ニ起^シ煩惱業[。]生死沈淪^{シテ}不^レ解^{シテ}觀^心一^ヲ欣^中

求出離^ヲ。哀愍^ニ彼^ニ故^ニ說^ニ唯識^ノ言^ヲ。

三^ニ解^{スト}疑者[。]鏡^ニ無^レ質時^ハ不^レ能^ク現^{スル}影^ヲ。心^モ亦^レ

爾[。]何^ニ無^ニ本質^一獨^リ託^{シテ}相^ニ生^{セム}。答。色法^ニ有^ニ形礙[。]

鏡^ハ是^レ色^故唯^ニ有^レ質現^ス。心法^ニ無^ニ相狀^一。作用無礙^{ナリ}

無^{シテ}質亦^レ起^{ヘシ}。問。内境^ハ不^レ離^レ心^故名^ニ唯識[。]内

心^ハ不^レ離^レ相^故亦^レ名^ニ唯境[。]答。許^ス亦^レ無^レ過[。]

故論云。既無^レ實境^{離タル}能取^ノ識[。]寧有^ニ實識^{離タル}所取^ノ境[。]

所取^ノ境[。]所取^ト能取^ト相待^{シテ}立^カ故^ニ。鏡^ノ中^ニ影^ノ外^ニ無^ニ

別^ノ光明[。]說^テ爲^レ影^時只^ニ有^ニ影^ノ名[。]可^レ知^レ緣慮^ノ外^ニ

無^ニ別^ノ行相[。]以^テ相^ヲ名^ニ心^ノ行解^ノ相貌^ト此^ノ義^{ナリ}也[。]故^ニ

唯境^ノ義^モ亦^レ無^レ所背[。]清辨^ハ爲^レ違^ニ護法^ニ立^ニ唯

境^ト此^ノ義^{ナリ}也[。]而^モ教中^ニ故^ラ於^リ境^不レ^レ說^ニ唯^ノ言^ヲ。哀愍^ニ

愚夫^ハ迷^ニ境^ニ受^テ苦^ヲ。佛^爲止^ニ彼^ノ迷^ヲ故^ニ說^ニ唯識^ト也[。]

第六念佛門

先示^レ相者[。]念^ト者^謂別境^ノ中^ノ念^{ナリ}。於^ニ會習^ノ境^ニ令^レ

心^ヲ明記^{シテ}不^レ忘^レ爲^レ性^ト。定依^テ爲^レ業^ト。謂^ク數憶^{シテ}持^{シテ}會^テ

所^ノ受境^ヲ令^レ不^レ忘^レ失^レ能^ク引^カ定^ヲ故^ニ。佛^者如來^{ナリ}。若^ハ

相好若^ハ名號[。]若^ハ福智若^ハ本願[。]至^ニ法身^{一切}

功德[。]身心無^レ亂[。]思念^{シテ}不^レ忘^レ。數數明淨^ニ遂^ニ發^ス

三昧^一。是^レ念佛^ノ相^{ナリ}。

秋水||明鏡・潭||深い淵

寶と爲るが如し。三祇に千修して轉じて朝の日に向ふ。

二に教を引くとは、心地觀經に云く、汝等凡夫は自

心を觀ぜず。是の故に生死海の中に漂流せり。諸佛菩薩は能く心を觀するが

故に、生死の海を度りて彼岸に到りたまふ。論に云く、或は諸の愚夫

境に迷執して煩惱業を起し、生死に沈淪して觀心を解して

出離を欣求せず。彼を哀愍するが故に唯識の言を説く。

三に疑を解すとは、鏡に質無き時は影を現すること能はず。心も亦

爾るべし。何ぞ本質無くして獨り相に託して生ぜむや。答。色法には形礙^{*}有り。

鏡は是れ色が故に唯だ質有りて現ず。心法には相狀無し。作用無礙^{*}なり

質無くして亦起すべし。問。内境は心に離れず故に唯識と名く。内

心は相に離れず故に亦唯境と名くや。答。許すも亦過無し。

故に論に云く、既に實境として能取の識を離れたる無ければ、寧ろ實識として

所取の境に離れたる有らんや。所取と能取と相待して立つが故にと。鏡の中には影の外^ニ

別の光明無し。説きて影と爲る時は只だ影の名のみ有り。知るべし緣慮の外に

別の行相無し。相を以て心の行解の相貌と名くるは此の義なり。故に

唯境の義も亦背く所無し。清辨^ハ爲^レ違^ニ護法^ニ立^ニ唯

境と立つ、此の義なり。而も教中に故^ラ於^リ境^不レ^レ說^ニ唯^ノ言^ヲを説かざるは、

愚夫の境に迷ひ苦を受くるを哀愍して、佛、彼の迷を止めんが爲の故に唯識と説くなり。

第六念佛門

先づ相を示すとは、念とは謂く別境の中の念なり。會習の境に於て心をして

明記して忘れざらしむるを性と爲す。定が依たるを業と爲す。謂く數^ハば會^テ

受くる所の境を憶持して、忘失せざらしめて能く定を引が故に。佛とは如來なり。若しは

相好若しは名號、若しは福智若しは本願。至^ニ法身^{一切}

功德。身心亂無く、思念して忘れず。數數明淨^ニ遂^ニ發^ス

三昧を發す。是れ念佛の相なり。

*辨||辯(講録)

*礙||碍(講録)

別境||特殊な対象に決定して
いる心所(欲・勝解・念・定・慧)

二引トハ教者。大般若經ニ云。若シ善男子善女人等。

心ニ無ニ疑惑。於七日ノ中一澡浴清淨ニシテ。著ニ新淨衣一。

葉香供養。一心正念下如前所說如來ノ功德ト及

大威神ト。爾時如來慈悲護念シテ現身ヲ令見。使ニ

願ヲシテ満足。若有闕少スルコト華香等事。但一心念ニ功

德ト威神ト。將ニ命終セント時必得見佛。前ノ功德ト。大慈

觀無量壽經ニ云ク。或有衆生作テ不善業五逆ト十

惡ヲ具ニ諸ノ不善。此人苦逼不遑念佛ニ。善友告テ

言ク。汝若シ不能念者應稱無量壽佛。如是至

心令聲不絶。具足十念稱南無無量壽佛。

稱佛名故。於念念中除八十億劫ノ生死ノ之

罪。乃至如一念ノ頃。即得往生極樂世界。不

能念者觀念爲本故。稱名亦念ナリ。故得三昧

得見佛也。善導和尚現成三昧。專勸口稱

念佛。

三解トハ疑者問。諸行不レ一。何唯念佛ノミナランヤ。答。

十住論說ニ難易ノ行ヲ。念佛爲易行ト。如往ニ海路ヲ。

問。上機易シ行シ。無カ散亂一故。末代衆生不得ニ

專注スルコト。何ぞ成就スルコト。答。唐土法照禪師ハ粥鉢

中ニ。再見五臺ノ相。至大歷年中。往詣彼山。至

大聖竹林寺。寺ノ周圍二十餘里。黃金爲地ト。

講堂ノ中有普賢文殊二大菩薩。普賢ハ東。無

數ノ菩薩圍繞。文殊ハ西。一萬菩薩ト俱ナリ。身量百

尺ナリ。說法ノ聲歴歴ト可聽。法照進禮ニ菩薩

已テ白言。末代衆生去レ聖遙カ久。智識轉劣ニシテ。福薄ク

二に教を引とは、大般若經に云く、若し善男子善女人等。

心に疑惑無く、七日の中に於て澡浴清淨にして、新淨衣を著し、

葉香供養し、一心に正しく前に説く所の如く如來の功德と及び

大威神とを念ぜば、爾の時如來の慈悲護念して身を現じて見せしめ、願をして

満足せしめん。若し華香等の事を闕少すること有らば、但し一心に功德と威神とを

念ずべし。將に命終せんとする時に必ず佛を見ることを得ん。「前の功德とは、

大慈大悲說法無畏等なり。」觀無量壽經に云く。或有衆生有りて不善業五逆と十

惡を作りて諸の不善を具せん、此の人苦逼して念佛に遑あらず。善友告げて

言く、汝若し念ずること能はずは應に無量壽佛を稱すべし。是の如く至

心に聲をして絶へざらしむ。十念を具足して南無無量壽佛と稱す。

佛名を稱するが故に、念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。

乃至一念の頃の如くに、即ち極樂世界に往生することを得と。不

能念とは觀念を本と爲るが故に。稱名も亦念なり。故に三昧を得て

佛を見ることを得るなり。善導和尚は現に三昧を成じて、専ら口稱の

念佛を勸む。

三に疑を解すとは、問。諸行一ならず。何ぞ唯だ念佛のみならんや。答。

十住論に難易の行を説くに、念佛を易行と爲す。海路を往くが如し。

問。上機は行じ易し。散亂無きが故に。末代の衆生は

專注することを得ず。何ぞ成就することを得ん。答。唐土の法照禪師は粥鉢の

中に、再び五臺の相を見る。大歷年中に至りて、彼の山に往詣して、

大聖竹林寺に至る。寺の周圍二十餘里なり黄金を地と爲す。

講堂の中に普賢文殊二大菩薩有ます。普賢は東に在り。無

數の菩薩圍繞す。文殊は西に在り。一萬菩薩と俱なり。身量百

尺なり。說法の聲歴歴として聽くべし。法照進て二菩薩を禮し

已て白して言く、末代の衆生、聖を去ること遙かに久し。智識轉た劣にして、福薄く

垢重シ。眞如實相無レ由ニ顯現スルニ。不知方ニ修シテ何ナル

門疾得ニ成佛ヲ。文殊答テ言ク。修行ノ門莫過ニ念佛

佛供養福慧竝修スルニ。念佛是諸法ノ之王ナリ。甚深ノ之

禪定ナリ。乃至般若波羅蜜皆從リ念佛生ス。我昔念佛

佛故今得一切種智ヲ。汝已念佛ス。今正是時ナリ。重テ

白シテ而言ク。何方得修スルコトヲ。答云。自レ此西方ニ有佛名ニ

無量壽ト。彼ノ佛本願力不可思議ナリ。一心ニ稱念セハ得レ

生スルヲ。彼土ニ。禪師恐有レ疑謗。祕不語人。後有化人

告訖テ摩レ頂ヲ。爲メ與フ授記ヲ云云念佛三昧專爲ニ末

世ノ。心意散亂。根機轉劣ナリ。若非ニ念佛ニ不得見コトヲ

佛。末法萬年餘經悉滅スレトモ。彌陀一教利物偏ニ増ス。

況ヤ像法ノ季ヘ聖教悉存ス。豈不レ得成スルコトヲ耶。大聖文殊

方ニ鑒ニ此時ヲ。問。今念ニ何佛ヲ。答。念ニ彌勒

佛ヲ。命終得生ニ兜率ノ内院ニ。是レ正我願ナリ。問。諸

教ニ所讚多ク在彌陀ニ。彌陀ノ大願誓度ニ娑婆ニ。念佛

三昧專本トス彼佛ヲ。何不レ念耶。答。三世ノ諸佛ハ功

德平等ニシテ。隨機ニ授記不レ可是非ス。慈尊是レ大師ノ

補處當來導師ナリ。若聞ニ所說ノ一句ノ法偈ヲ。必遇ニ下

生ニ可得ニ不退ニ。佛附ニ屬ニ末法ノ之中ノ持戒破戒

有戒無戒ニ。皆於ニ彌勒ノ龍華會ニ可得ニ解脱ニ。慈

尊自言ク。我得ニ釋迦大師要契付屬ヲ。不レ念レ我

者。尚不レ捨。況有ニ念願ノ耶。又無著世親戒賢

玄奘師資相承シテ。皆在ニ兜率ニ。慈恩法師造ニ瑞應

疏ニ所誠懇懃ナリ。門人末學何得レ不レ從レ彼。昔釋ノ

福慧ニ六波羅蜜

垢重シ。眞如實相顯現するに由し無し。知らず、方に何なる法門を修して

疾く成佛を得ん。文殊答て言く、修行の門、念佛供養

福慧竝修するに過ぎたるは莫し。念佛は是諸法の王なり。甚深の

禪定なり。乃至般若波羅蜜皆念佛從り生ず。我昔念佛す

故に今一切種智を得たり。汝已に念佛す。今正に是れ時なり。重ねて

白して言く。何の方か修することを得む。答て云く。此れ自り西方に佛有ます、

無量壽と名く。彼の佛の本願力不可思議なり。一心に稱念せば

彼土に生ずることを得ん。「禪師疑謗有らんことを恐れて。祕して人に語らず。後に化人

有りて再び勸めて云く。汝何ぞ臺山の事を語らざる。因を記して流布す」

告げ訖りて頂を摩でて、爲めに授記を與ふ云云念佛三昧は専ら末

世の爲なり。心意散亂し、根機轉た劣なり。若し念佛に非ざれば佛を見ることを得ず。

末法萬年餘經悉く滅すれども、彌陀の一教は利物偏へに増す。

況や像法の季すま聖教悉く存す。豈に成ずることを得ざらんや。大聖文殊

方に此の時を鑒たまへり。問。今何佛をか念ぜん。答。彌勒

佛を念じたてまつるべし。命終に兜率の内院に生を得。是れ正しく我が願なり。問。諸

教に讚する所多く彌陀に在り。彌陀の大願誓ひて娑婆を度す。念佛

三昧専ら彼の佛を本とす。何ぞ念ぜざるや。答。三世の諸佛は功

德平等にして、機に隨て記を授く、是非すべからず。慈尊は是れ大師の

補處、當來の導師なり。若し所說の一句の法偈を聞けば、必ず下

生に遇て不退を得べし。佛、末法の中の持戒破戒

有戒無戒に附屬す。皆彌勒の龍華會に於て解脱を得べし。慈

尊自ら言く、我、釋迦大師の要契付屬を得たり。我を念ぜざる

者すら尚捨てず。況や念願有るをや。又無著世親戒賢

玄奘師資相承して、皆兜率に在す。慈恩法師瑞應疏を造りて誠する所懇懃なり。門人末學何ぞ彼に從はざることを得ん。昔釋の

*大ニ本講録

季ニ末

*奘ニ葬講録

曇戒常稱彌勒名。弟子智生侍病問師。何不願生安養。戒曰。我師道安等願生兜率。我獨留故願言訖有光照身。命終之後葬安公墓右。當知不守師跡爲誤。我今如此。聖凡賢愚共同緣。大聖慈氏必不捨矣。無著以來一千年。三國傳風。爰至當代。何去父母膝下。忽望主君之恩惠。況上生經云。繫念思惟念兜率陀天。若他觀者名爲邪觀。具教知足依正二觀。豈非念佛三昧耶。若一念頃稱彌勒名。此人除却千二百劫生死之罪。若善男子善女人犯諸禁戒。造衆惡業。聞是菩薩大悲名字。五體投地誠心懺悔。是諸惡業速得清淨。此人命欲終時。彌勒菩薩放眉間白毫大人相光。與諸天子雨曼陀羅華來迎此人。此人須臾即得往生。未舉頭頃便得聞法。於無上道得不退轉。已上生經問。先勸唯識三昧觀。今又修三念佛三昧。二行移轉一世難熟。答。念佛三昧即是唯識觀也。先觀彼天依報。四十九重摩尼寶殿。五百億行頗利樹王。一一莊嚴歷然。在心。無邊器界皆是同地。一切衆生阿頼耶識之所變也。知足天宮同在此界。可知本來在我心中。心若往彼可得持身。是同出過三界淨土。凡應變淨爲大過。願始往生又不遮。凡愚迷亂雖變不見。今依教修

曇戒常に彌勒の名を稱す。弟子智生病に侍して師に問ふ。何ぞ安養に生ぜんと願ぜざる。戒の曰く、我師道安等は願ひて兜率に生ず。我獨り留るが故に願ず。言訖りて光有りて身を照す。命終の後安公が墓の右に葬す。當に知るべし師跡を守らざるを誤りと爲す。我今此の如し。聖凡賢愚共に同じく縁有り。大聖慈氏必ず捨てず。無著より以來一千年。三國に風を傳ふ。爰に當代に至て、何ぞ父母の膝下を去りて、忽ちに主君の恩惠を望まん。況や上生經に云く、繫念し思惟し兜率陀天を念ずべし。若し他觀の者は名けて邪觀と爲す。具に知足の依正二觀を教ゆ。豈に念佛三昧に非ずや。若し一念の頃も彌勒の名を稱すれば、此の人千二百劫の生死の罪を除却す。若し善男子善女人諸の禁戒を犯し、衆の惡業を造んに、是の菩薩大悲の名字を聞きて、五體を地に投げ誠心に懺悔せば、是の諸惡業速かに清淨なることを得。此の人命終んと欲する時、彌勒菩薩眉間白毫の大人の相の光を放ちて、諸の天子と與に曼陀羅華を雨し此の人を來迎す。此の人須臾に即ち往生を得。未だ頭を擧げざる頃に便ち法を聞くことを得、無上道に於て不退轉を得。「已上生經」問。先には唯識三昧觀を勸む。今又念佛三昧を修せしむ。二行移轉して一世に熟し難し。答。念佛三昧は即ち是れ唯識觀なり。先に彼の天の依報を觀るに、四十九重の摩尼寶殿、五百億行の頗利樹王、一一の莊嚴歷然として心に在り。無邊の器界は皆是れ同地の、一切衆生の阿頼耶識の所變なり。知足天宮は同じく此の界に在り。知るべし本來我が心中に在り。心若し彼に往きて身を持つることを得べくんば、是れ同じく三界を出過する淨土なり。凡そ應に淨に變ずべきを大過と爲す。願始往生は又遮る所にあらず。凡愚は迷亂して變ずと雖も見ず。今教に依て修すれば、

第六意識ノ觀念ノ中ニ漸ク顯現スルヲ。熏シテ種在レ心。後ニ生ニ現行ヲ。般若論ニ云。智習シテ唯識通ス。如是取ニ淨土ヲ。淨名云ク。若欲勤修嚴淨佛土。先應シト方便嚴淨。淨土云ク。今淨兜率天宮ノ行モ復如是。佛地論云。隨心淨處即淨土處。何得定テ方別ニ是極處ナルヲ。次念佛ニ有五重。一ニ念名號。名號雖不相應ノ假法。緣所依ノ聲亦熏種子。靖邁師云ク。稱念佛名一時熏習種子。百千萬念念念熏増。勢力増長。心得明廣。臨終の時縁熟シテ必憶。二ニ念佛身。經云。兜率陀天ノ七寶臺ノ内摩尼殿ノ上ニ獅子床座アリ。於蓮華ノ上ニ結跏趺坐。身如閻浮壇金色。長十六由旬。三十二相八十種好皆悉具足。頂上ノ肉髻紺瑠璃色。釋迦毘楞伽摩尼寶。百千萬億ノ甄叔・寶以嚴天冠。其天冠ノ寶有百千億色。一一の色中ニ無量百千ノ化佛。諸ノ化菩薩以爲侍者。隨意自在住天宮ノ中。彌勒ノ眉間ニ有白毫相ノ光。流出衆光。作百寶ノ色。三十二相。一一ノ相中ニ五百億ノ寶色。一一ノ相好ニモ亦五百億ノ寶色。一一ノ相好ニ出八萬四千光雲。與諸天子各坐華座。晝夜六時常不退轉地ノ法輪ノ行。已上龍樹云。十六由旬ノ相好ノ身。如玉如金超日月。三藏云。身如壇金ノ更無比。相好ノ寶色耀光輝。神通ノ菩薩皆無量。助佛揚化救含靈。如斯觀時。慈尊所變ノ兜率ノ實身以爲本質。弟子閻浮ノ觀念ノ中ニ漸ク相分タル可生ノ實法。設在過未ニ縁皆熏

p59a

淨名ニ『維摩詰所說經』異訳

不相應ニ

靖邁ニ宋高僧伝四

*心ニ必講録

*毘毘・伽・迦・迦講録

釋迦毘楞伽寶ニ天上ノ宝珠

甄叔迦寶ニ赤宝

第六意識ノ觀念ノ中ニ漸ク顯現することを得。種を熏じて心に在り、後に現行を生ず。般若論に云く、智習して唯識通ず。是の如く淨土を取る。淨名に云く。若し勤修して佛土を嚴淨せんと欲はば、先づ方便を以て自心を嚴淨すべしと。今兜率天宮を淨める行も亦復た是の如し。佛地論に云く。心の淨處に隨ふは即ち淨土の處なり。何ぞ方を定めて別には極處なることを得んや。次に念佛に五重有り。一に名號を念ず。名號は不相應の假法なりと雖も、所依の聲を緣じて亦種子を熏ず。靖邁師の云く。佛名を稱念する時、種子を熏習す。百千萬の念、念念に熏増し、勢力増長す。心得明廣を得て、臨終の時縁熟して必憶す。二に佛身を念ず。經に云く、兜率陀天の七寶臺の内摩尼殿の上に獅子床座あり。蓮華の上に於て結跏趺坐す。身は閻浮壇金色の如し。長は十六由旬、三十二相八十種好皆悉く具足したまへり。頂上の肉髻は紺瑠璃色なり。釋・毘楞伽摩尼寶。百千萬億の甄叔迦寶以て天冠を嚴り、其の天冠の寶に百千億色有り。一一の色中に無量百千の化佛有り。諸の化菩薩を以て侍者と爲し、隨意自在にして天宮の中に住せり。彌勒の眉間に白毫相の光有り。衆光を流出して、百寶の色と作れり。三十二相の、一一の相中に五百億の寶色あり。一一の相好にも亦五百億の寶色有り。一一の相好に八萬四千の光雲を出だす。諸の天子と各の華座に坐して、晝夜六時常に不退轉地の法輪の行を説く。已上龍樹の云く。十六由旬の相好の身、玉の如し金の如し日月に超へたり。三藏の云く、身は壇金の如し更に比無し。相好の寶色、光輝として耀く。神通の菩薩皆無量にして、佛を助け化を揚げ含靈を救ふと。斯の如く觀する時、慈尊所變の兜率の實身を以て本質と爲す。弟子が閻浮の觀念の中に漸く相分たる可生の實法を變ず。設ひ過未に在るも縁すれば皆

種。設雖無漏。悉以菩薩之自在力引自所變身令衆生緣。有漏散心變作實境一名定通果。威德定所引相必有實用。不同不託。他所變意解思惟。我心中既有實如來相。設不明。境體是實。過未五蘊雖相不明。熏成種子。此亦可爾。況復慈尊於彼威神。若不見親質。故無勝利者。設生兜率親得瞻仰。心親所緣。是自所變。體猶有漏。相似無漏。一切凡夫見佛聞法。皆亦如是。豈以之爲賤耶。託境思惟。令此觀心純熟自在。若夜夢中若心想前相好光明漸見。譬如朝日明相漸增。遂照國界。三念功德。四智三明。五眼六通。大悲三念。十力無畏。普門塵數無邊德海。皆悉成就。實身既成道矣。其功德刹那威神無量無邊不可思議。只須憶想。不可具說。如是如來俱生威力暫歸。纔念。必滅生死衆多罪垢。況念念思惟觀緣。時時渴仰稱揚。四念本願。昔一切智仙人發大慈心。爲諸衆生懃求菩提。行積三祇。誓滿四弘。豈於我一人不提倡。善財童子讚彌勒云。菩薩爲化衆生。普盡未來無量劫。如爲一人一切衆生。此救世者之住所。故龍樹云。我等久劫修願行。得聞彌勒大悲名。親承採道在

p.50b

實境||實際に存在する対象
定通果||
威德定||百八三昧の一

種を熏ず。設ひ無漏と雖も、悉く菩薩の自在力を以て自ら所變の身を引きて、衆生をして縁ぜしむ。有漏の散心の實境を變作するを定通果と名く。威德定所引の相には必ず實の用有り。他所變に託せざる意解思惟には同ぜず。我心中に既に實の如來の相有り。設ひ明ならずとも境の體は是れ實なり。過未の五蘊は相明了ならずと雖も種子を熏成す。此れ亦爾るべし。況や復た慈尊彼の威神に於てをや。若し親しく質を見ざるが故に勝利無しと云はば、設ひ兜率に生じて親り瞻仰を得るも、心が親しき所縁は是れ自らが所變なり。體は猶有漏にして、相の無漏に似る。一切の凡夫の見佛聞法も皆亦是の如し。豈に之を以て賤しと爲んや。境に託して思惟して此の觀心をして純熟自在らしむ。若しは夜夢中、若しは心想の前に相好光明漸く見ることを得べし。譬へば朝日の明相漸増して遂に國界を照すが如し。三に功德を念ず。四智三明、五眼六通、大悲三念、十力無畏、普門塵數無邊の德海、皆悉く成就したまへり。「經に説くに、等覺は佛の所得の如くに之を得。況や彌勒の實身は既に成道したまへり」其一の功德、刹那の威神無量無邊なり不可思議なり。只だ憶想すべし。具に説くべからず。是の如く如來俱生の威力暫く歸し纔に念ずるに。必ず生死衆多の罪垢を滅す。況や念念に思惟し觀緣し、時時に渴仰し稱揚するをや。四に本願を念ず。昔一切智仙人爲りしとき、大慈心を發して、諸の衆生の爲に懃るに菩提を求む。行は三祇に積み、誓四弘を満てたまふ。豈に我一人に於て調伏することを得ず。善財童子彌勒を讚じて云く、菩薩一の衆生を化す爲に、普く未來無量劫を盡す。一人の爲にする如く一切も爾なり。此れ救世者の住所なり。「住所とは海岸國大樓閣なり」故に龍樹の云く。我等久しき劫に願行を修して、彌勒大悲の名を聞くことを得。親り承り道を採るは

明旦^ニ。乃至怯弱^ニ。絶^ニ望意^ヲ。慈尊昔^シ住^シ凡^シ夫^シ地^ニ。時。必與^ニ我等^一互^ニ有^ニ因緣^一。或爲^ニ父母^一。或爲^ニ妻^一。子師主伴兄弟知識^ト。曠劫輪迴^ノ之間^ノ。值遇^ス。幾許^ノ。流轉苦海莫^レ不^ニ恩愛^一。慈尊智眼^ヲ以^テ明了^ニ。照^レ之^ヲ。往昔^ノ劫海如^ニ今日^ノ事^一。如來昔^シ求^シ佛^道。只爲^ニ我等^一剛強^ニ難^キ化^レ。三祇空過^ス。佛力猶勝^タ。既^ニ近^キ得道^一。今身若默^シ。再去^ニ源底^ヲ苦海^ニ流轉^セ。佛得^ニ云何^一。若不^レ念可^レ捨^テ。若不^レ歎可^レ惡^テ。勵^シ愚^ヲ責^レ。隨分^ニ精勤^セ能所^ノ機感^ヲ。非^ニ此時^一者亦何^ノ日^ソ耶。仰願慈尊以^ニ天耳^ヲ聞^ニ此語^一。以^ニ他心^ヲ照^ニ此志^一。慈悲護念^シ如影^ノ不^レ離。舒^ニ金色^ノ手^ヲ遙^ニ摩^ニ我頂^一。放^ニ白毫^ノ光^ヲ常照^ニ我胸^一。捨^ニ離^シ惡緣^ヲ增^ニ長^シ善願^ヲ。臨終^ノ時決定^シ來迎^シ。親^リ拜^ニ尊德^ヲ後日幾程^ソ。我不^レ惜^レ壽^ヲ。願早迎^レ我^ヲ。五^ニ念^ス法身^ヲ。觀經^ニ云。諸佛如來^ハ是法界身^{ナリ}。入^ニ一切衆生^ノ心想^ノ中^ニ。是故汝等心^ニ想^レ佛時。是心即是三十二相八十隨好。是心是佛^{ナリ}。是心作^ル佛。此意^ハ先^ツ觀^ス諸佛^ノ法身^ヲ。體^レ是我^ノ心^{ナリ}。相性不^レ異常^ニ住^ニ法界^一。夜夜憶念^シ眠^リ。朝朝還^テ共^ニ起^ク。妄念猶^ハ法性^{ナリ}。況^ヤ念佛^ノ心^ヲ乎。三十二相八十隨好^ハ我心^ノ中^ノ之莊嚴^{ナリ}也。稱名繫念禮拜讚歎^ハ法身^ノ上^ノ之起滅^{ナリ}也。相好^ハ是^ニ自心^ノ見分^ノ上^ノ之影像^{ナリ}也。見分^ハ即^チ自心^ノ體^ノ功能^{ナリ}也。心體又還^テ因緣^ノ造作^{ナリ}。離^レ緣^無性^ニ。體用^ハ虛假^ニ。歸^レ性^ニ凝然^{ナリ}。生^モ不生^ノ之生^{ナリ}。不生^{ナレ}即^チ不滅^{ナリ}。有^モ非有^ノ之有^{ナリ}。非有^{ナレ}即^チ非無^{ナリ}。須臾^モ攝^レ心衆相寂滅^{ナリ}。身土微妙^ニ境智冥合^ス。是即遣相證性^ノ唯心^ノ念

p.596

明旦 夜明け

明旦に在り。乃至怯弱にして望意を絶たんや。慈尊昔凡夫地に住したまひし時、必ず我等と互に因縁有らん。或は父母と爲り、或は妻子師主伴兄弟知識と爲る。曠劫輪迴の間の値遇幾許ぞ。流轉の苦海は恩愛ならざる莫し。慈尊智眼を以て明了に之を照したまふ。往昔の劫海今日の事の如し。如來昔佛道を求むるに、只だ我等が剛強にして化し難きが爲に、三祇空過すれども、佛力猶を勝たまふ。既に得道に近き。今身の若し黙して再び源底を去り苦海に流轉せば佛云何することを得ん。若し念ぜずば捨てたまふべし。若し歎ぜずば惡みたまふべし。愚を勵して之を責む。分に隨ひて精勤せば能所の機感ず。此の時に非ずんば亦何の日ぞや。仰ぎ願くは慈尊天耳を以て此の語を聞きたまへ。他心を以て此の志を照し、慈悲護念して影の如くに離れざれ。金色の手を舒て遙に我頂を摩し、白毫の光を放ちて常に我胸を照さん。惡縁を捨離し善願を増長して、臨終の時決定して來迎し、親り尊德を拜む後日幾程ぞ。我壽を惜しまず。願くは早く我を迎へたまへ。五に法身を念ず。觀經に云く、諸佛如來は法界身なり。一切衆生の心想の中に入りたまへり。是の故に汝等心に佛を想ふ時、是の心即ち是れ三十二相八十隨好なり。是の心是れ佛なり。是の心佛と作ると。此意は先づ諸佛の法身を觀するに、體は我が心なり。相性異ならず常に法界に住す。夜夜憶念して眠り、朝朝還た共に起く。妄念猶を法性なり。況や念佛の心をや。三十二相八十隨好は我心の中の莊嚴なり。稱名・繫念・禮拜・讚歎は法身の上の起滅なり。相好は是自心の見分が上の影像なり。見分は即ち自心の體が功能なり。心體又還りて因縁の造作なり。縁を離れて性無し。體用虚假にして、性に歸れば凝然なり。生も是れ不生の生なり。不生なれば即ち不滅なり。有も是れ非有の有なり。非有なれば即ち非無なり。須臾も心を攝すれば衆相寂滅なり。身土微妙にして境智冥合す。是れ即ち遣相證性の唯心の念

佛也。念佛ノ之相ハ以鏡可レ知。道場^{*}之中ニ懸テ一ノ明鏡ヲ。以繪木ノ佛像可レ對鏡ノ前ニ。鏡ヲ爲行者ノ自心ト。佛ノ影像ヲ爲兜率ノ佛身ト。心鏡若淨佛ノ影像必浮。雖淨若動見影不正。設雖善心ト雖も、屬ハ散亂觀心不正。明了寂靜ニ念佛方ニ成。若欲ハ觀ニ佛土ヲ。以畫圖ノ障子等或ハ莊嚴可愛ノ小塔形等ヲ可レ向鏡前ニ。衆相普淨歷然可レ觀。若欲ハ觀ニ三身ヲ以鏡ヲ爲佛ノ法身ト。以其中ノ光ヲ爲報身ノ智慧ト。以其上ノ影ヲ爲化身ノ相ト。或鏡ノ體ハ報身ナリ。影像化身ナリ。二中空義ハ法身佛ナリ。天智天皇發シテ願欲造ニ佛像ヲ。化人即以助觀念^{*}。所謂大安寺ノ釋迦ノ像也。後文武天皇又發シテ願欲得ニ巧匠ヲ。夢想ニ中ニ有人告云。先王ノ尊像ハ化人所造。與靈山ノ生身ト毫釐不違。化人不可再來。須以大鏡對シテ彼尊像可レ觀ニ其相。三身一體ナリ。能了佛身ト。所謂鏡ハ是報身。影如化身ノ。空如法身^{正文}。已上可レ勸ニ或又以鏡ノ三義可レ喻ニ法身般若解脫ノ三事圓滿。鏡ノ體ハ法身。鏡ノ光ハ般若。影像ハ即空。無有障礙。是解脫ノ義。或時以鏡爲如來ノ心ト。影像可レ爲行者ノ身ト。如來憶念^シ我身即在佛心之中^ニ。眞言ノ入我我入之可レ知。

三ニ解疑者。問。凡心難レ易不得寂靜^{念佛}。豈能成就^{然佛境界不可思議}。觸レ之近レ之必除妄染。譬^如秋月ノ纔向^ニ其光^ニ身心清涼^{寂靜安樂}。況^於如來ノ淨妙法身甚深ノ

p.60a

*場＝場(講録)

*觀＝睿(講録)

佛なり。念佛の相は鏡を以て知るべし。道場^{*}の中に一の明鏡を懸けて、繪木の佛像を以て鏡の前に對すべし。鏡をば行者の自心と爲す。佛の影像をば兜率の佛身と爲す。心鏡若し淨ければ佛の影像必ず浮く。淨しと雖も若し動ずれば影を見ること正しからず。設ひ善心と雖も、屬は散亂有れば觀心正しからず。明了寂靜にして念佛方に成るべし。若し佛土を觀んと欲はば、畫圖の障子等或は莊嚴可愛の小塔形等を以て鏡前に向ふべし。衆相普く淨くを歷然と觀ずべし。若し三身を觀んと欲はば、鏡を以て佛の法身と爲し、其の中の光を以て報身の智慧と爲し、其の上の影を以て化身の相と爲すべし。或は鏡の體は報身なり。影像は化身なり。二中空義は法身佛なり。天智天皇願を發して佛像を造らんと欲ふ。化人即ち以て觀念^{*}を助く。所謂大安寺の釋迦の像なり。後文武天皇又願を發して巧匠を得んと欲ふ。夢想の中に人有りて告て云く、先王の尊像は化人の造る所、靈山の生身と毫釐も違はず。化人再來すべし。須く大鏡を以て彼の尊像に對して其の相を觀ずべし。三身は一體なり。能く佛身を了るべし。所謂鏡は是報身なり、影は化身の如し、空は法身の如し。「已上正文を勸ふべし」或は又鏡の三義を以て法身・般若・解脫の三事圓滿に喩ふべし。鏡の體は法身なり、鏡の光は般若なり、影像は即ち空にして障礙有ること無し。是れ解脫の義なり。或時は鏡を以て如來の心と爲し、影像を行者の身と爲すべし。如來憶念したまへば我身即ち佛心の中に在り。眞言の入我我入之を以て知るべし。

三に疑を解すとすは、問。凡心は易を難じてはかり寂靜なることを得ず。念佛に能く成就することを得んや。答。然るに佛の境界は不可思議にして、之に觸れ之に近くば必ず妄染を除く。譬へば秋月の纔に其の光に向はば身心清涼^{*}にして寂靜安樂なるが如し。況や如來の淨妙法身甚深の

境界慈悲福智難思ノ威力ニ。現ニ見ルニ末代ヲ。智行ノ之輩ハ増レ執増ス慢ヲ觸レ縁ニ而退。念佛ノ人ハ自然ニ亡レ想ヲ後必昇進ス。一ニ一心自清力。二ニ已餘縁力。三ニ佛ノ加被力。依ニ此等ノ德ニ貪瞋癡本ヨリ興盛ナル人多ク除ク妄想ヲ。而モ以ニ智慧多聞改メ本性者久遠ニ得道ヲ。慧學ハ雖勝。親近佛界ニ不如稱念ニハ。往生ノ人至臨終ニ現ニ種種ノ奇瑞ヲ。或ハ佛記ノ言ヲ。或ハ語ニ聖衆ノ威儀ヲ。古今ノ之間其類寔ニ繁シ。具ニ載ニ傳記ニ。不可不レ信。佛子若實ニ列ニ兜率ノ内衆ニ列セバ。見佛聞法シ發心得道シ萬善成就ス。文殊普賢觀音地藏等ノ大智大悲ノ諸菩薩モ親ニ禮拜ス。又無著世親正法藏等ノ弘經ノ大論師モ現ニ可ニ親近ス。又晨旦傳燈ノ遍學三藏。慈恩淄洲。天台章安。智常智越。彌天道安。廬山慧遠。終南道宣等。纔ニ聞ニ其名ニ適見ニ其德ヲ人一一ニ奉ニ謁近シ。又我朝ノ弘法大師。明詮僧都。相應正實觀賢林扶等。宮殿ノ砌邊。寶樹ノ影下一會ニ開眼。同席ニ列ヘシ體ヲ。豈非ニ奇異ニ耶。又過去ノ慈父悲母。若ハ兄弟知識黃泉幽冥一ヒ去テ再ヒ不見之人。三千界ノ中始テ見ニ其生所ヲ。二十五有ノ之間親リ其苦樂ヲ。若ハ悦ビ若シハ悲シ。或ハ助ケ或ハ導キ。歡喜踊躍未曾有ノ思。亦復如シ是。憶ニ念シ生ノ宿縁ヲ。歴ニ觀。彼彼ノ境界ヲ。只上生内院一事ノ力ナリ。日日ニ割テ肉ヲ可代ニ此類ニ。生生ニ挑レ眼難謝シ此事ヲ。何ニ況床ニ安然トシテ纔ニ繫コト心於佛ニ有ニ何ノ苦行ニ耶。小因大果不可不レ驚。此事既ニ決定セリ彼報不ニ敢テ疑。只抛テ萬縁ヲ須レ守ル一念ヲ

p.60b

*涼||涼講録
智行||六波羅蜜

*常||帝講録
*慧||惠講録

相應||本朝高僧伝四七
觀賢||本朝高僧伝八

*床||牀講録

境界、慈悲福智難思の威力に於てをや。現に末代を見るに、智行の輩は執を増し慢を増す縁に觸れて退す。念佛の人は自然に想を亡じ後ち必ず昇進す。一に一心自清力。二に已餘縁力。三に佛の加被力。此等の德に依て貪瞋癡本より興盛なる人も、多く妄想を除く。而も智慧多聞を以て本性を改めば久遠にして道を得。慧學は勝と雖も、佛界に親近すること稱念には如かず。往生の人臨終に至りて種種の奇瑞を現す。或は佛記の言を傳へ、或は聖衆の威儀を語る。古今の間、其の類寔に繁し。具に傳記に載る。信ぜずんばあらず。佛子若し實に兜率の内衆に列せば、見佛聞法し發心得道し萬善成就すべし。文殊普賢觀音地藏等の大智大悲の諸菩薩も親たり禮拜すべし。又無著世親正法藏等の弘經の大論師も現に親近すべし。又晨旦傳燈の遍學三藏、慈恩、淄洲、天台、章安、智常、智越、彌天道安、廬山の慧遠、終南の道宣等、纔に其名を聞き適ま其の德を見ん人、一一に謁近し奉らん。又我朝の弘法大師、明詮僧都、相應、正實、觀賢、林扶等、宮殿の砌邊、寶樹の影下に一會に眼を開き、同席に體を列べし。豈に奇異に非ずや。又過去の慈父悲母、若しは兄弟知識黃泉幽冥一たび去りて再び見ざるの人、三千界の中、始めて其の生所を見る。二十五有の間、親り其の苦樂を知らん。若しは悦び若しは悲しみ、或は助け或は導き、歡喜踊躍未曾有の思ひも亦復た是の如し。生の宿縁を憶念し、彼彼の境界を歴觀するも、只上生内院一事の力なり。日日に肉を割ても此の類に代るべし。生生に眼を挑ても此事を謝し難し。何に況や床上に安然として纔に心を佛に繫んこと何の苦行か有んや。小因大果驚かざるべからず。此の事既に決定せり彼の報敢て疑はざれ。只だ萬縁を抛てて一念を守るべし。

先^レ示^ト相^ヲ者。心^ト者道心。發^ト謂^ハ發起^{ナリ}。我無始^{ヨリ}具^レ苦提心^ノ種子^ヲ。無^レ緣^未發。今以^ニ心願^ヲ資^テ薰^{シテ}種子^ヲ。且^ク可^ク令^レ生^ニ起^有漏^苦提心^ノ現行^ヲ。瑜伽云。苦提心者決定^ノ希求^ヲ以^テ爲^ニ行相^ト。無上^ノ苦提一切^ノ有情^ノ義利^ヲ爲^レ境。上求^ニ苦提。下化^ニ有情。於^ニ可^レ愍^{廣大}ノ境界^ニ發^ニ起^ス。彼^ノ樂欲相應^ノ決定^ノ思願^ヲ。幽贊云。願^ハ我^レ決定^當證^{シテ}無上^{正等}苦提^ヲ。能^ク作^中有情^ノ一切^ノ利樂^ヲ。譬^ハ如^ク空界^ノ無^レ不^レ含容^セ。大苦提心^モ亦復^如是。遍空^ノ有爲^ヲ皆厭離^ス。故。如空^ノ苦提皆求證^ス。故。盡空^ノ衆生皆深念^ス。故。此^ノ初發心^ハ雖^レ爲^ニ下劣^ノ一念^ニ。福聚尚^シ難^シ說^盡。已上^ノ又苦提心^ニ以^ニ信^ト精進^ト念^ト定^ト慧^ト爲^レ體^ト者謂^ニ後時^ノ行^ヲ。發願^ハ是^レ初發心^{ナリ}也。

二^ニ引^ト教^ヲ者。經^ニ云。一念^モ發^ニ起^ス。苦提心^一勝^ニ於^ニ造立^ス。百千^ノ塔^ヲ。寶塔^ハ破壞^{シテ}成^ニ微塵^ト。苦提心^ノ種^ハ成^ニ佛道^ト。有^ニ種種^ノ喻^ヲ。略^{シテ}而^レ不^レ述。

三^ニ解^ス疑^者問。斷善^ノ人^ハ已^ニ滅^ニ善根^ト。彼時^{無^キヤ}體耶。答。永^ク斷^ニ法^ノ種^ヲ。唯^ハ聖道^ノ能^ク增上^ノ邪見^ヲ。斷^ニ善根^者暫^ク伏^ヲ。名^爲斷^ト。種^ハ遂^ニ不^レ滅^セ。有^漏善^ノ種^ハ至^テ解^脱道^ニ始^ニ棄^テ捨^ス之^ヲ。一念^ノ發^ニ心^ハ實^ニ長遠^ト因^{ナリ}。設^ヒ使^ヒ三^千塵點^ノ劫數^ニ久^ク退^ス。苦提^ヲ還^テ發^サ。如^シ舊^ノ衣裏^ノ明珠^ノ醉中^ニ不^レ捨。今世^ノ人^ハ恐^レ退^ラ不^レ舊^ノ。發^ニ實^爲不^レ可^ナリ。問。小根^ノ大心^ハ如^ク漏器^ノ水^ノ。豈^レ不^レ顧^リ自^レ輒^ク趣^ク苦提^ニ。若^シ背^ニ本願^ニ欺^{シテ}三寶^ヲ。墮^ニ在地獄^ニ還^テ妨^ニ見佛^ヲ。不^レ如^ク漸進^ス。答。自^リ。

先づ相を示すとは、心とは道心なり。發とは謂く發起なり。我無始より苦提心の種子を具ふれども、縁無くして未だ發さず。今、心願を以て資けて種子を薰じて、且く有漏苦提心の現行を生起せしむべし。瑜伽に云く、苦提心とは決定の希求を以て行相と爲す。無上苦提は一切の有情の義利を境と爲す。上に苦提を求め、下に有情を化す。愍むべき廣大の境界に於て、彼の樂欲相應の決定の思願を發起すべし。幽贊に云く、願くは我れ決定し當に無上正等苦提を證して、能く有情の一切の利樂を作すべし。譬へば空界の含容せざる無きが如く、大苦提心も亦復た是の如し。遍空の有爲を皆厭離するが故に。如空の苦提皆求證するが故に。盡空の衆生皆深念するが故に。此の初發心は下劣の一念爲りと雖も、福聚尚し説き盡し難し。已上 又苦提心には信と精進と念と定と慧とを以て體と爲すとは、後の時の行を謂ふなり。發願は是れ初發心なり。

二に教を引くとは、經に云く、一念も苦提心を發起すれば百千の塔を造立するに勝れり。寶塔は破壞して微塵と成る。苦提心の種は佛道を成ずと。種種の喩有り。略して述べず。

三に疑を解すとは、問。斷善の人は已に善根を滅す。彼の時體無きや。答。永く法の種を斷ずるは、唯だ聖道のみ能くす。増上の邪見の善根を斷ずることは暫く伏するを名けて斷と爲す。種は遂に滅せず。有漏善の種は解脫道に至て始めて之を棄捨す。一念の發心は實に長遠の因なり。設使三千塵點の劫數に久しく苦提を退すとも、還りて發さば舊の如し。衣裏の明珠は醉中に捨てず。今世の人、退を恐れて發せざるは實に不可なりと爲す。問。小根の人心は漏器の水の如し。豈に自らを顧ずして輒く苦提に趣かんや。若し本願に背かば三寶を欺誑して地獄に墮在し、還りて見佛を妨げむ。漸進せんに如かず。答。

*棄=弃(講録)

*下劣(一念)(講録)

義利=義(現在を益す)
利(未來を益す)

恐而不_レ趣。須_ク趣_テ而可_レ恐。何_ソ寄_テ過_ラ於_レ發心_ニ求_ニ德_ヲ於_レ懈怠_ニ。然_ル受_テ菩薩戒_ヲ犯_{シテ}墮_ル惡趣_ニ。似_ト得_レ戒_ノ過_ニ此亦不_レ爾。經云。受_テ有_テ犯者_ハ勝_リ不_レ受無_ニハ犯_ト。有_テ犯名_ニ菩薩_ト。無_ニハ犯名_ニ外道_ト。智論云。破_レ戒_ヲ墮_レ罪_ニ。罪畢_テ得_テ解脱_ヲ。況_ヤ菩薩破戒_ハ生_ニ龍鬼等_ノ中_ニ多_ク爲_リ其王_ト。有_テ大威力_ニ護_レ法助_レ人_ト。彼翳羅葉大龍王等即其類也。恐_テ犯不_レ受者何_レノ日_ニ出離_{セム}。若_ク發心_ノ退_ハ爲_ニ生_ノ無_レ益_ト。大通智勝是_レ令_ニ身_子等_ヲ早發趣_レ耶。世間_ノ思願_ノ一切惡_{ナル}故_ト。捨_テ大難_レ得_レ求_ニ小_ノ易_キ成_シ。無_上菩提_ハ未來無窮_{ナリ}。一進_一退_一遂_ニ必成就_ス。道種_ノ朽_レ豈_キ發心_修行_ノ之期_一。此時難_ハ成_ハ後世_モ亦爾_{ナラン}。太賢云。初趣_ハ常_ニ難_シ永_ク無_レ易_キ。恐_レ難_キ不_レ進_何劫_成。雖_レ捨_テ名利_ヲ。何必_モ世間_ニ輕_シ衣食_ヲ。報_ニ父母_ニ仕_ニ師君_ニ之誠_ト。隨_ニ法王_ニ任_ニ世禮_ニ之勤_メ。發心_ノ所求_ニ菩提_ノ正_ニ因_{ナリ}也。況_ヤ顯密_ノ修學_{。佛法ノ}順緣_ヲ。常_ニ念_ニ世俗_ノ事_一假_ニ名_ヲ阿練若_ニ。欺誑_ノ之罪_過在家_ニ也。

第八覺母門

先_ツ示_ス相者。般若波羅蜜文殊菩薩_ハ是_レ三世_ノ諸佛_ノ發心_ノ覺母_{ナリ}也。體_ハ是_レ智慧_{ナリ}。在_レ法_ニ稱_シ般若經_ト。在_レ人_ニ號_ニ妙吉祥_ト。般若_ニ有_ニ五種_一。一_ニ實相_ト。謂_ク眞如_{ナリ}。二_ニ觀照_ト。謂_ク眞智_{ナリ}。三_ニ文字_ト。謂_ク能詮_ノ言教_{ナリ}。四_ニ境界_ト。謂_ク有無_ノ諸法_{ナリ}。五_ニ眷屬_ト。謂_ク智_ノ餘_ノ萬行_{ナリ}。觀照_ハ智慧_{ナリ}。爲_ニ正_キ自體_ト。餘_ハ是_レ智_ノ性_{ナリ}。或_ハ智_ノ資助_{ナリ}也。漏無漏五蘊_ヲ總_{シテ}名_ニ菩薩_ト。文殊_ハ以_テ智慧_ヲ爲_ニ本體_ト。以_ニ眞如_ヲ爲_ニ實身_ト。大慈大悲無邊福聚皆悉圓滿_{スルカ}。

*可_レ不_レ講錄

翳羅葉_ハ埋羅那_・愛羅筏拏_ト大通智勝_ハ如來_・法華經_ト・化城喻品

太賢_ハ『梵網經古述記』(大正四十)新羅の僧。法相宗。華嚴教義の影響を受け、一乘思想に応同して、大いに調和的態度を示す。『成唯識論學記』を著す。(深浦正文『唯識學研究』上巻 pp.263-264)

恐れて趣かざらん自りは、須く趣きて恐るべし。何ぞ過を發心に寄せて德を懈怠に求めん。然るに菩薩戒を受けて犯して惡趣に墮するに、得戒の過に似るとも此れ亦爾らず。經に云く。受けて犯有る者は受けずして犯無きには勝れり。犯有るをば菩薩と名く。犯無きには外道と名く。智論に云く、戒を破して罪に墮すれば、罪畢りて解脱を得と。況んや菩薩の破戒は龍鬼等の中に生ずれども、多く其の王爲り。大威力有りて法を護り人を助く。彼の翳羅葉大龍王等即ち其の類なり。犯を恐れて受けずんば何れの日にか出離せむ。若し發心の退は生の爲に益無くば、大通智勝は是れ身子等を早く發趣しむるをや。世間の思願の一切惡なるが故に、大の得難きを捨て小の成じ易きを求む。無上菩提は未來無窮なり。一進一退遂に必ず成就す。道種朽ちず豈に發心修行の期無きや。此の時難は成ず。後世も亦爾ならん。太賢の云く、初趣は常に難し、永く易きこと無し。難きを恐れて進まずは何劫にか成ぜむ。名利を捨つると雖も、何ぞ必ずしも世間に背き衣食を軽くせんや。父母に報じ師君に仕ふの誠、法王に隨ひ世禮に任すの勤めは、發心の所求、菩提の正因なり。況や顯密の修學、佛法の順緣をや。常に世俗の事を念じて名を阿練若に假るは、欺誑の罪在家に過んや。

第八覺母門

先づ相を示すとは、般若波羅蜜文殊菩薩は是れ三世の諸佛の發心の覺母なり。體は是れ智慧なり。法に在りては般若經と稱し、人に在りては妙吉祥と號す。般若に五種有り。一に實相。謂く眞如なり。二に觀照。謂く眞智なり。三に文字。謂く能詮の言教なり。四に境界。謂く有無の諸法なり。五に眷屬。謂く智の餘の萬行なり。觀照は智慧なり。正しきを自體と爲す。餘は是の智が性なり。或は智の資助なり。漏無漏五蘊を總じて菩薩と名く。文殊は智慧を以て本體と爲す。眞如を以て實身と爲す。大慈大悲無邊福聚皆悉く圓滿するが

故^ニ。般若波羅蜜^ハ文殊^ノ實體^{ナリ}。說^ニ此^ノ般若^ヲ文字章句^モ亦名^ニ般若^ト。能詮所詮^一不異^{ナリ}。佛以^ニ善巧方便^ヲ離言^ノ法^ノ中^ニ施設^{シテ}文字^ヲ。從^ニ清淨法界^一平等流出^ス。源流^ト同^ク水^{ナリ}。教理^俱法^也。攝^{シテ}相歸^レ性^ニ體實^ニ一物^{ナリ}。文字^ニ有^レ二^一。一^ハ能說者^ノ聲^ノ上^ノ屈曲^ニ。二^ハ色塵^ノ屈曲^{ナリ}。謂^ク黃紙^ノ上^ノ墨書^ノ形相^{ナリ}。色聲^雖異^{ナリト}俱^ニ顯^ニ法性^ヲ。以^レ假隨^レ實^ニ色聲^ヲ爲^レ體^ト。八萬^ノ聖教^皆雖^レ般若^一。四處^{十六會}一千二百九十七^ノ法門^{ナリト}。正^ク說^ニ般若^ヲ。以^レ之^ヲ爲^レ宗^ト。廣^ク說^ニ六度^ヲ。五度^ヲ爲^レ眷屬^ト。親^ク詮^ル實相^ノ一如^爲自性^ト。若^ハ口^ニ誦^シ心^ニ思^ス法性^漸顯^ル。譬^如穿^ニ竹穴^口吹^キ手搖^セ其聲^ニ有^レ曲能發^ニ雜音^ヲ。天地陰陽與^レ此通氣^ヲ。能調^ニ五行^一自^ラ取^テ四季^ヲ。人倫鬼神^モ其性亦通^ス。依^テ聲^ノ哀樂^ニ有^レ中國^ノ理亂^上管絃^ノ之功^ト。音樂^ノ之能^ト。移^シ風易^レ俗實^ニ以^レ難^レ測^リ。是則上古^ノ達者^能悟^リ物理^ヲ。或^ハ做^ニ耽吟^一。或^ハ傳^ニ風音^一。聖教^ノ顯^ル理^亦復^如是^ト。要^ス內^ニ證^{シテ}眞理^ヲ。於^レ外^ニ能說^ス。故^ニ一字一句^モ法性^ト相應^ス。唱^ヘ之^ヲ誦^スレハ佛德^即備^ハ。甚深^ノ境界^{不可思議}ノ事^只須^ニ信敬^ス。凡^レ心難^レ量^リ。是^ヲ以^テ若^シ於^ニ此經^ニ受持^シ讀誦^シ解說^シ書寫^シ供養^シ恭敬^シ思惟^シ修習^{スレハ}。滅^ニ無量^ノ罪^ヲ生^ニ無量^ノ善^ヲ。自身^ノ中^ノ佛性^ノ種子^依法流^ノ水^ニ漸^ク被^ニ滋潤^セ。於^ニ大菩提^ニ忽^ニ生^ス欣樂^ヲ。其心決定^{シテ}遂^ニ起^ニ勝行^ヲ。最初^ノ發心^ハ雖^ニ是^レ有漏^{ナリト}。必^ニ引^テ菩提^ヲ資^助無漏^ヲ增^ニ長^ス萬善^ヲ。是^レ即^地前^ニ所^レ修^般若波羅蜜^{ナリ}。又是^レ文殊師利^ノ內證^ノ智慧^{ナリ}。譬^如下^父母^ノ生^ズ子^之時^分二^親身^ヲ始^テ爲^中子^體上^ト。菩薩^ノ發

*源||現(講録)

屈曲||物事の詳しい事情

故に、般若波羅蜜は文殊の實體なり。此の般若を説ける文字章句をも亦般若と名く。能詮所詮一不異なり。佛善巧方便を以て離言の法の中に文字を施設して、清淨法界従り平等に流出す。源流同く水なり。教理俱に法なり。相を攝して性に歸すれば體實に一物なり。文字に二有り。一は能說者の聲上の屈曲。二は色塵の屈曲なり。謂く黃紙の上の墨書の形相なり。色聲異なりと雖も俱に法性を顯す。假を以て實に隨へば色聲を體と爲す。八萬の聖教は皆般若なりと雖も、四處十六會一千二百九十七の法門正しく般若を説く。之を以て宗と爲す。廣く六度を説き、五度を眷屬と爲す。親しく實相の一如を詮るを自性と爲す。若しは口に誦し心に思すれば法性漸く顯る。譬へば竹に穴口を穿ちて、吹き手搖せば、其の聲に曲有りて能く雜音を發す。天地陰陽此れと氣を通ずれば、能く五行を調へ自ら四季を取りて、人倫鬼神も其の性亦通ず。聲の哀樂に依て國の理亂有るが如し。管絃の功、音樂の能、風を移し俗を易へ實に以て測り難し。是れ則ち上古の達者能く物理を悟り、或は耽吟に倣ひ、或は風音を傳ふ。聖教の理を顯すことも亦復た是の如し。要す内に眞理を證して、外に於て能く説く。故に一字一句も法性と相應す。之を唱へ之を誦すれば佛德即ち備はる。甚深の境界不可思議の事只だ須く信敬すべし。凡心量り難し。是を以て若し此の經に於て受持し讀誦し解說し書寫し供養し恭敬し思惟し修習すれば、無量の罪を滅し無量の善を生ず。自身の中の佛性の種子、法流の水に依て漸く滋潤せらる。大菩提に於て忽に欣樂を生ず。其の心決定して遂に勝行を起す。最初の發心は是れ有漏なりと雖も、必ず菩提を引て無漏を資助して萬善を増長す。是れ即ち地前に修する所の般若波羅蜜なり。又是れ文殊師利の內證の智慧なり。譬へば父母の子を生ずるの時、二親の身を分ちて始めて子の體と爲すが如し。菩薩の發

心モ可レ知覺母ノ實體一分ナリ地前ノ三十心ヲ名ニ聖胎ト。
法身未レ顯故ニ。若シ發心ノ人ハ已ニ住ス般若文殊ノ胎内ニ。
慈悲覆護シテ不レ異ニ世間ノ母ノ懷孕ノ想ニ。

二ニ引テ教ヲ者。大般若ノ第八云ク。甚深般若波羅蜜

多ハ是レ諸ノ善法ノ生母養母ナリ。能ニ生シ能ニ養フ布施淨戒

乃至五眼等ノ無量無邊ノ功德一故。又云。能與ニ一

切ノ善法一爲母ト。一切ノ聲聞獨覺菩薩如來ノ善法

從レ此生スルカガ故。龍樹云。諸佛及ヒ菩薩。聲聞辟支佛。

解脫涅槃ノ道。皆從レ般若一生ス。佛ハ爲ニ衆生ノ父一。般

若ハ能ク生ス佛ヲ。經云。由ニ此一般若一。一切ノ菩薩從ニ初

發心一。乃至ニ金剛喻定一。所有ノ功德而モ出現スルカガ故

已上般若佛母ノ文。心地觀經云。文殊師利大聖尊ハ三世ノ

諸佛以テ爲レ母ト。十方ノ如來ノ初發心モ。皆是文殊ノ教

化ノ力ナリ。放鉢經云。我今得テ佛ヲ度ニ脫スルハ衆生一。皆

是文殊ノ恩ナリ。過現當ノ諸佛モ莫レ不レ依ニ文殊ニ。譬ハ如三

世間ノ小兒ノ有ニ父母一。文殊ニ有ニ光明一名曰覺

了ト。照ニ觸シテ衆生一發ニ覺了ノ心一。速ニ出シム生死一。又經ニ云。

依ニ夢覺三昧ノ力一。令三人ヲ夢中ニ發ニ菩提心一。文

殊ニ五字ノ儀軌ニ云。纒ニ誦スレハ此ノ眞言一。一切ノ如來ノ所說ノ

諸法ニ攝ニ入ス五字ノ眞言ノ中一。能ク令ニ衆生一般若波羅

蜜多ヲ成就シ。又云。右手ニ執ニ金剛ノ劔一。左ノ手ニ當テ心ニ

作ニ金剛拳一。持ニ青蓮華一。華ノ上ニ有ニ般若波羅蜜一

篋一。又云。阿字ハ樂欲ノ義。羅字ハ染著シテ不レ捨ニ

衆生ノ義。波字ハ第一義諦ノ義ナリ。左字ハ妙行ノ義。

曩字ハ者無自性ノ義ナリ。滿ニ一切ノ願一。又云。念ニ誦スレハ五

p61b

金剛喻定ニ等覺の心

心も知るべし覺母の實體一分なり地前の三十心を聖胎と名く。
法身未だ顯れざる故に。若し發心の人は已に般若文殊の胎内に住す。
慈悲覆護して世間の母の懷孕の想に異ならず。

二に教を引くとは、大般若の第八に云く、甚深般若波羅蜜

多は是れ諸の善法の生母養母なり。布施淨戒乃至五眼等の

無量無邊の功德を能く生じ能く養ふが故に。又云く、能く一

切の善法の與めに母と爲る。一切の聲聞獨覺菩薩如來の善法

此れ從り生ずるが故に。龍樹の云く、諸佛及び菩薩、聲聞辟支佛、

解脫涅槃の道、皆な般若從り生ず。佛は衆生の父爲り。般

若は能く佛を生ず。經に云く、此の般若に由て、一切の菩薩初

發心從り乃ち金剛喻定に至る。所有の功德而も出現するが故に。

「已上般若佛母の文」心地觀經に云く、文殊師利大聖尊は三世の

諸佛以て母と爲す。十方の如來の初發心も、皆是れ文殊の教

化の力なり。放鉢經に云く、我今佛を得て衆生を度脫するは、皆

是れ文殊の恩なり。過現當の諸の佛も文殊に依らざること莫し。譬へば

世間の小兒の父母有るが如し。文殊に光明有り、名けて覺

了と曰ふ。衆生を照觸して覺了の心を發し、速かに生死を出しむ。又經に云く、

夢覺三昧の力に依て、人をして夢中に菩提心を發さしむ。文

殊ニ五字の儀軌ニ云く、纒ニ此の眞言一を誦すれば、一切の如來の所說の

諸法は五字の眞言の中に攝入す。能く衆生をして般若波羅

蜜多を成就せしむ。又云く、右手に金剛の劔を執り、左の手で心に當て

金剛拳を作り、青蓮華を持せり。華の上に般若波羅蜜の

篋有り。又云く、阿字は樂欲の義、羅字は染著して

衆生を捨てざるの義、波字は第一義諦の義なり。左字は妙行の義、

曩字は無自性の義なり。一切の願を滿す。又云く。五

十萬反一定獲無盡辯才。

三解疑者。問。佛力法力難知廣大。受命

於天不改性之不信少智豈覺道心。答。

諸法の功力不可思議。世間の事相。妄業の因果。猶

以奇特。況於三寶法性の妙徳福智の威神。且取

淺き事相以て曉其心。世間の醉酒は穀米の精なり。人若

飲之周遍五體。身絶眼濁。剩改心想。眼目

眩轉。山川如迴。喜怒改性。忽成狂亂。鬪諍

忿怒暴聲猛心。違背恩義。多成逆害。盃酒の

毒力其甚。如此。況於大乘の法薬秘密の辭句。妄

想の實性本是れ妙法。法の中に妄無く明の中の闇本來

空寂なり。豈有障礙。種種の功力不可具述。又鬼

神亡靈來託人身。惡報の力必ず苦惱。病人の

之心多異本心。知外記後。語密示幽。如ハ

鬼波羅門者。依鬼著身無礙の辯説多時に相

續。鬼靈の力改性如此。況於三世の諸佛十

地の菩薩の威神加被に耶。何ぞ奇と成すに足らむ。問。總相の

道理は今論。般若經の中に此の事有り耶。答。

善現尊者居聲聞位。爲諸の大菩薩演説般

若。自曰。如來の加被に非自辯才。問。暫時設

有加被の力。發菩提心。後本心有何利

益。猶如醉覺鬼去。心性復本。答。若發殊

勝不思議心。不遮復本無。然れども其一念の所作

眞實不失。若依佛法の力。漸次に性を改むれば後

移動せず。如上藥の力永愈重病。問。諸聖諸教

皆有此力。何ぞ獨り般若文殊に歸依するや。答。三

p61c

十萬反を念誦すれば定んで無盡の辯才を獲る。

三に疑を解すと、問。佛力法力は知り難く廣大なりとも、命を天に

受けて性を改めざるの不信少智豈に道心を覺せんや。答。

諸法の功力不可思議なり。世間の事相、妄業の因果、猶を

以て奇特なり。況や三寶法性の妙徳福智の威神に於をや。且く

淺き事相を取りて以て其心を曉さん。世間の醉酒は穀米の精なり。人若し

之を飲めば五體に周遍して、身絶く眼濁る。剩さへ心想を改めて、眼目

眩轉して山川迴るが如し。喜怒性を改めて忽ち狂亂を成す。鬪諍

忿怒暴聲猛心にして、恩義に違背して、多く逆害を成す。盃酒の

毒力其の甚しきこと此の如し。況や大乘の法薬秘密の辭句に於をや。妄

想の實性本是れ妙法なり。法の中に妄無く明の中の闇の如し本來より

空寂なり。豈に障礙有らんや。種種の功力具に述べべからず。又鬼

神亡靈來りて人身に託す。惡報の力必ず苦惱を成す。病人の

心多く本心に異なり。外を知り後を記し、密を語り幽を示す。

鬼波羅門者の如きは、鬼、身に著くに依て無礙の辯説多時に相

續す。鬼靈の力、性を改むること此の如し。況や三世の諸佛十

地の菩薩の威神加被に於をや。何ぞ奇と成すに足らむ。問。總相の

道理は今論ずる所にあらず。般若經の中に此の事有り耶。答。

善現尊者聲聞の位に居して、諸の大菩薩の爲に般

若を演説す。自ら曰く、如來の加被にして自らの辯才に非ず。問。暫時設

加被の力有りて菩提心を發すとも、後に本心に復せば何の利

益か有らん。猶し醉覺し鬼去て心性本に復するが如し。答。若し殊

勝不思議心を發するは、本に復して無きことを遮へず。然れども其一念の所作は

眞實にして失はず。若し佛法の力に依て、漸次に性を改むれば後

移動せず。上藥の力永く重病を愈すが如し。問。諸聖諸教に

皆此の力有り。何ぞ獨り般若文殊に歸依するや。答。三寶の

實ノ功德ハ實雖ニ平等ナリト。教ハ依リ所説ニ。聖ハ住ニ本願ニ。功
能利益モ各有所望ムル。既超テ餘類ニ獨リ稱ニ佛母ト。名
豈空符テ。は無レ由シ耶。問。佛法聖僧威力ハ可
爾。若於ニ諸天龍神等ニ亦有ニ此德。答。諸天
善神皆有ニ戒定慧解トノ薰修ノ力。何無ニ其德。實
類猶爾ナリ。況大權ヲ耶。大般若云。三千世界及十
方ノ諸天具ニ大威徳。龍夜又等觀ニ禮讀ニ誦。所
書寫般若。合掌右ニ繞テ。歡喜ニ護念上ル。所在ノ所ニ有
妙光明。或ハ聞ニ其所ノ異香芳馥シ若天ノ音樂。當ニ知
爾時諸天等來ニ。邪神惡鬼驚怖退散ニ無ニ敢テ住
者。由ニ此因縁ニ。是ノ善男子善女人等心便チ廣大ニシテ。
起ニ淨勝解。所修ニ善業倍復增長ス。諸有ニ所爲皆
無ニ障礙。決定ニ常ニ得身心無レ倦。身樂ニ心樂。
繫ニ想般若ニ唯得ニ善夢。謂見如來身眞金色ニシテ
具ニ三十二ノ大丈夫相。放ニ大光明ヲ普照シ一切ヲ。
聲聞菩薩前後ニ圍遶。身處ニ衆中ニ聞佛爲ニ説
布施乃至般若。又於ニ夢中ニ見ニ菩提樹。乃至
若ハ睡若ハ覺身心安樂ニシテ。諸天神等益シ其ノ精氣。令
彼ニ自覺ニ身體安樂。由ニ是ニ因縁ニ不多ク貪染ニ飲
食醫藥。其心輕微ニ如三瑜伽師ノ入ニ勝妙定。又
云。一切如來應正等覺。聲聞菩薩。天龍夜叉
人非人等。具ニ大神力勝威徳者。慈悲護念ニ以
妙精氣冥入ニ身心。令ニ其志勇ニ體充盛。故云云
既云冥入身心令其志勇。豈非ニ加被ニ。又説ク
心便チ廣大ニ起ニ淨勝解。是レ大菩提心ナリ。問。加被トハ
何ノ義。答。大聖ノ日光住ニ心水上ニ。名レ之爲レ加

p.62a

功德は實に平等なりと雖も、教は所説に依り、聖は本願に住す。功
能も利益も各の望むる所有り。既に餘類に超へて獨り佛母と稱す。名
豈に空しく符て、是れ由し無けんや。問。佛法聖僧威力は
爾るべし。若し諸天龍神等に於て亦此の徳有りや。答。諸天
善神皆戒と定と慧解との薰修の力有り。何ぞ其の徳無けん。實
類猶を爾なり。況や大權をや。大般若に云く。三千世界及び十
方の諸天大威徳を具する龍夜叉等書寫する所の般若を觀禮し
讀誦したてまつる。掌を合せ右に繞りて、歡喜し護念したてまつる。所在の所には
妙光明有り、或は其所の異香芳馥し若しは天の音樂を聞くは、當に知るべし
爾の時諸天等來るなりと。邪神惡鬼驚怖退散して敢て住
者の無し。此の因縁に由て、是の善男子善女人等心便ち廣大にして。
淨勝解を起し、修する所の善業倍、復た增長す。諸有る所爲皆
障礙無く決定して常に得、身心倦むこと無く身樂み心樂み、
想を般若に繫して、唯だ善夢を得。謂く如來身眞金色にして
三十二の大丈夫相を具し、大光明を放ちて普く一切を照し、
聲聞菩薩前後に圍遶し、身、衆中に處して佛爲めに布施乃至般若を
説きたまふを見る。又夢中に於て菩提樹を見る。乃至
若しは睡、若しは覺、身心安樂にして、諸天神等其の精氣を益し、
彼をして自ら身體安樂を覺らしむ。是の因縁に由て多く飲
食醫藥に貪染せず。其心輕微にして瑜伽師の勝妙定に入るが如し。又
云く、一切如來應正等覺、聲聞菩薩、天龍夜叉
人非人等、大神力勝威徳を具する者、慈悲護念して
妙精氣を以て冥に身心に入り、其をして志勇にして體充盛ならしむるが故に云云
既に云く、冥入身心令其志勇と。豈に加被に非ずや。又説く
心便ち廣大にして淨勝解を起す。是れ大菩提心なり。問。加被とは
何の義ぞや。答。大聖の日光心水の上に住す。之を名て加と爲す。

問。行業ノ功力在リ迴向等ニ。何必シモ求ニ道心一ヲ耶。
 答。現ニ見ニ當時一ヲ。行スル法者多シ。或ハ無シテ功速ニ成シ。或ハ有テ
 勞不レ感。乃至臨終其相不同。可レ知後生亦
 復如レ是。世人於レ此往往ニ云フ。或ハ不レ依レ行ニハ
 心ノ善惡一。或ハ不レ依レ心ニ依レ罪ノ有無一。或云ニ魔障ノ有
 無一。或云ニ實行ノ多少一。或云ニ時節ノ久近一。或云ニ内
 外ノ差別一。或云ニ宿善ノ有無一。或云ニ本尊ノ勝劣一。或
 云ニ修學ノ不同一。或云ニ念佛ノ行相一。或云ニ名聞ノ淺
 深一。或云ニ執心ノ有無一。如是於レ事ニ判スルニ相無量ナリ。此
 皆不レレトモ背此皆無用ナリ。出離ノ綱紀ハ先ツ依レ道心一。低頭
 擧手童子ノ之戲。發心ノ所作ハ必歸レ佛道一。三藏ノ文
 義無遮ノ大會モ未ダ發趣セザる所作ハ菩提ノ正因一。只
 可ニ遠因一ナル。功小ニシテ徳大ナルハ不レ如レ發心一ニハ。發心ト者謂如
 實發ニ起^{*}。無上大菩提一。發趣不同ナリ。或先世ニ既
 趣。或今世ニ始趣。或一念實趣。或長時中容。如レ
 此相貌凡心不レ辨。以何カ爲レ已發心一。以何カ爲
 未發趣一。以言不レ論。只佛界ノ知^玉。諸天尚難レ量。
 所以菩薩ノ所行ヲ天帝釋等亦有ニ試ミ量一。實類ノ天
 神ハ不能ニ祥ニ知一。故凡夫類ハ不レ知ニ我發心ノ成
 否一。問。自不レ知以何カ爲レ限。欣求モ亦無用ナリ。欣
 而所レ得不レ必^レ眞實一故。答。若求ニ實ノ道心一者。
 願既^レ是實^{ナリ}。願力實^{ナル}カ故。依^テ其熏習力^ニ所レ得多ク
 可^ニ實心^{ナル}。若任^ニ己性^ニ自然^ニ發心^{スレハ}。其心似^{トモ}善^ニ。虚
 實難^レ知。責心ヲ祈願セバ心何不起。彼ノ欲^レ入^ニ睡眠^ニ。
 宵^{*}有^レ要期^{スル}。曉更^ヲ。其時我心必覺^ニ睡眠^ニ。依^ルカ願
 力^ニ故^ニ自無^レ心^ニ睡眠^ニ。況恒時^ニ勵^レ心願^ニ發趣^ノ心^ヲ

p.626

*宵＝霄(講録)

*起＝趣(講録)

無遮會＝國王が施主となり、国内の僧尼貴賤一切の人びとを制限(遮)することなく供養し、布施する大会。

問。行業の功力は迴向等に在り。何ぞ必ずしも道心を求めんや。
 答。現に當時を見るに、法を行ずる者多し。或は功無くして速かに成じ、或は
 勞有りて感ぜず、乃至臨終其の相不同なり。知るべし後生も亦
 復た是の如し。世人此れに於て往往に云ふ。或は行には依らず
 心の善惡に依る。或は心には依らず罪の有無に依る。或は魔障の有
 無、或は實行の多少と云ふ。或は時節の久近と云ふ。或は内
 外の差別と云ふ。或は宿善の有無と云ふ。或は本尊の勝劣と云ふ。或は
 修學の不同と云ふ。或は念佛の行相と云ふ。或は名聞の淺
 深と云ふ。或は執心の有無と云ふ。是の如く事に於て相を判ずること無量なり。此れ
 皆背くに非ざれども此れ皆無用なり。出離の綱紀は先づ道心に依る。低頭
 擧手、童子の戲も、發心の所作は必ず佛道に歸す。三藏の文
 義無遮の大會も未だ發趣せざる所作は菩提の正因にあらず。只だ
 遠因なるべし。功小にして徳大なるは發心には如かず。發心とは謂はく
 實の如く無上大菩提を發起するなり。發趣不同なり。或は先世に既に
 趣むく。或は今世に始めて趣むく。或は一念實に趣むく。或は長時中容、
 此くの如きの相貌凡心辨へず。何を以てか已發心と爲る。何を以てか
 未發趣と爲る。言を以て論ぜず。只だ佛界のみ知りたまふ。諸天尚量り難し。
 所以は菩薩の所行をば天帝釋等亦試み量ること有るも、實類の天
 神は祥に知ること能はず。故に凡夫の類は自ら我が發心の成
 否を知らず。問。自ら知らずは何を以て限りと爲ん。欣求も亦無用なり。欣んで
 得る所も必ずしも眞實にあらざるが故に。答。若し實の道心を求めば、
 願既に是れ實なり。願力實なるが故に、其の熏習力に依て得る所多ク
 實心なるべし。若し己性に任せて自然に發心すれば、其の心善に似るとも、虚
 實知り難し。心を責めて祈願せば心何ぞ起きざらむ。彼の睡眠に入らんと欲して、
 宵に曉更を要す期すること有れば、其の時我が心は必ず睡眠を覺す。願
 力に依るが故にして自ら睡眠に心無し。況や恒時に心を勵まして發趣の心を願はんをや。

耶。何況^{ナリ}祈^セ請^フ三寶^ニ與^ニ我^ニ眞實^ノ道心^ヲ。先世^ニ若^シ已^ハ發^ハ者^ハ今生^ニ還^テ增長^セん。設^シ今^シ發^シ已^ハ畢^テ自^ラ不^レ了^レ之^ヲ者^ハ。佛^レ可^レ告^下我^ニ以^ニ此^ノ分^ノ心^ヲ決定^シテ可^ト得^上二生^{スル}ヲ知^足。凡^心ニ多^重有^リ。於^ニ三十六恒沙^ノ諸佛^ノ所^ニ皆^新ニ發^心ス。一^世中^ニ所^レ發^{スル}不^レ可^レ云^足。又^不レ^可レ^云不^レ足^トモ。今^且於^ニ順次^ノ生^ニ見^佛聞^法ノ之^ノ分量^ヲ得^レハ之^ヲ暫^爲足^トス。若^ハ不^定若^全不^レ能^{。至}誠^ニ可^レ欣^ニ求^ス其^心ヲ。與^ニ此^ノ願^者不^レ如^ニ佛^{菩薩}大^乘ノ諸^經神呪^等ノ力^ニハ。故^慳慳^ニ可^レ致^ニ祈^請ヲ。若^ハ感^ニ夢^想ヲ。若^ハ有^ニ現^證「我^心與^レ昔^異。則^レ隨^喜シテ彌^可欣^{。問}。佛界^深遠^{ナリ}。設^ヒ求^ニ發^心ヲ。願^力不^レ勝^{。心}念^不眞^{ナラ}。敢不^レ可^レ發^得。若^於ニ此^ノ事^ニ佛^力可^ト通^{ス。直}祈^ニ往^生等^亦可^レ足^{ス。佛}ノ本^願故^{。應}ニ末^代ニ故^{。長}時^ニ望^ム故^{。所}行^積故^{。何}不^ニ成^熟若^欣ニ發^心ヲ。先^求ニ自心^後重^テ可^レ欣^レ果^{。展}轉^有煩^{。直}求^ニ往^生ノ所^願可^レ足^{ス。答}。因^ハ近^果ハ遠^超テ近^至遠^ニ多^ク難^ニ成^就シ。自^近至^遠自^淺及^深其^事易^シ成^{。亦}欣^ニ發^心ヲ成^否今^生ニ知^レ。往^生ハ最^後始^テ知^レ成^否ヲ。以^前ハ不^レ得^{。重}彌^可祈^願ス。若^信ニ佛^語ヲ不^レ量^ニ自^力ノ決^定順^次往^生ス。若^後ニ馳^走シテ其^事不^レ成^{。空}移^ニ他^生ニ。豈^不レ痛^耶。佛^界ノ感^應ハ何^願雖^同ト。凡^心發^趣何^無ニ難^易。因^若難^レ得^果豈^超進^{。又}多^進テ無^煩。所以^者何^ん。已^發心^ノ人^ハ暫^時ノ願^須與^之行^ヲ必^可レ往^生ス。十^念心^力超^レ餘^ニ廣^大ノ故^{。發}心^{成就}ハ設^ヒ得^難可^レ難^レ得^{。發}起^後ノ願^臨終^ニ易^シ成^{。何}況^爲ニ上^生ノ因^一求^ニ眞^實ノ心^ヲ。皆^是上^生ノ因^緣ナリ。何^唐

PGC

*敢 || (講録)

何に況や三寶に我に眞實の道心を與へたまへと祈請せんをや。先世に若し已に發さば今生に還りて增長せん。設し今發し已畢て自ら之を了せずんば、佛、我に此分の心を以て決定して知足に上生することを得べしと告ぐべし。凡心に多重有り。三十六恒沙の諸佛の所に於て、皆新たに發心す。一世の中に發する所、足るとも云ふべからず。又足らざるとも云ふべからず。今且く順次の生に於て見佛聞法の分量は、之を得ば暫く足ぬと爲す。若しは不定、若しは全きに能はずば、至誠に其の心を欣求すべし。此の願を與ふるは、佛菩薩大乘の諸經神呪等の力には如かず。故に慳慳に祈請を致すべし。若しは夢想を感じ、若しは現證有りて、我が心昔と異ならば、則ち隨喜して彌可欣ぶべし。問。佛界深遠なり。設ひ發心を求むとも、願力勝れず、心念眞ならずば、敢て發得すべからず。若し此の事に於て佛力通すべくは、直ちに往生等を祈らんに亦足ぬべし。佛の本願なるが故に。末代に應ずるが故に。長時に望むが故に。所行積むが故に。何ぞ成熟せざらん。若し發心を欣んには、先づ自心を求めて後、重ねて果を欣ふべくは、展轉して煩ひ有り。直ちに往生を求るに所願足ぬべし。答。因は近果は遠、近を超へて遠に至るは多くは成就し難し。近自り遠に至り、淺自り深に及ぶ、其の事成じ易し。亦發心を欣ふは成否今生に知るべし。往生は最後に始めて成否を知る。以前は得ず。重ねて彌よ祈願すべし。若し佛語を信じて自力の決定して順次に往生するを量らずば、若し後に馳走して其の事成ぜずして、空しく他生に移らふは、豈に痛ならずや。佛界の感應は何願も同じと雖も、凡心の發趣、何ぞ難易無からむ。因若し得ること難ければ果豈に超進せんや。又多く進みて煩無し。所以は何ん。已發心の人は暫時の願、須臾の行を以て必ず往生すべし。十念心力餘に超へて廣大の故に。發心成就は設ひ得難かるべけれども、發起後の願、臨終に成じ易し。何に況や上生の因の爲に、眞實の心を求む。皆是れ上生の因緣なり。何ぞ唐

捐^{ナラシ}耶。況^レ若有^レ人思^テ我深^ク歸^ニ彌陀彌勒^ニ佛力

不^レ空^ニ必^シ得^レ來^ラ迎^ラ。住^ニ此^ノ決^シ定^ノ意^ニ樂^ニ能^ク行^フ念^フ佛

等^ノ之^ハ人^ハ。多^ク是^レ已^ニ發^ニ苦^ニ提^心也。於^ニ佛^ノ不^レ可^レ思

議^ノ功^ニ德^ニ已^ニ深^ニ信^ス。故^ニ若^シ猶^預之^輩不^レ改^ニ疑^心。

不^レ起^ニ實^願。徒^ニ守^テ佛^力空^ク送^ニ一^期。恐^ク多^ク不^レ成。

如是^レ緩^慢人^若暫^時祈^念。先^ニ求^ニ道^心。多^ク皆^レ發^得。

始^テ起^{シテ}勇^猛生^ニ決^定信^一。豈^ニ不^ニ最^ニ要^{ナラ}耶。

何^レ況^ニ往^生業^因隨^機不^同探^得其^甘露^一多^是

冥^ノ加^被力^{ナリ}。而^レ末^代多^佛云^ニ彌陀彌勒^ト。經^ハ云^ニ法

華^般若^ト。行^ニ云^ニ念^佛轉^經。生^ニ云^ニ安^養知^足。十^ノ

之^八九^ハ雖^レ可^レ相^應。餘^ハ不^レ必^シ知^ス。或^ハ又^ハ大^分修^{シテ}

念^佛等^一而^レ可^レ加^ニ餘^事。彼^ノ道^珍禪^師設^テ溫^室。

浴^僧之^比書^{スル}般^若等^也。如^レ是^レ衆^多。且^レ仰^ニ冥^ノ

告^一。凡^ソ發^心之^德猶^シ如^シ大^地ノ。萬^善萬^行皆^依此^ニ

生^ス。未^レ發^ニ實^心先^ニ起^ニ大^行。如^シ無^{シテ}足^向大^山。

似^ニ穢^器盛^ル清^水。總^{シテ}不^レ可^レ得^ス。先^ニ求^ニ眞^金畢^テ。

後^ニ爲^レ環^爲簪^隨心^ニ自^在。以^テ發^心善^成就^ス諸

願^一亦^復如^是。已^ニ發^心人^ハ設^ヒ習^ニ犯^{シテ}世^事。徒^ラ快^ニ

樂^ニ欲^塵。大^善在^レ身^多感^ス勝^果。未^ニ實^ニ發^趣。於^ニ

三^乘中^一既^ニ非^ニ現^機。纔^ニ感^ニ世^福不^レ及^ニ出^離。佛

設^ヒ欲^ニ救^フ。因^縁微^薄。念^佛等^善滅^罪雖^ハ大^{ナリ}ト。正

願^正因^猶不^レ具^足。未^レ鑿^ニ一^渠豈^通願^海。未^レ

殖^ニ勝^種何^期花^菓。問^フ彌^陀ノ十^念來^迎之^願。

未^レ論^ニ發^心有^無。若^シ不^レ發^ニ苦^提心^不得^レ

生^ス者^一。先^ニ須^ク勸^ム發^心。何^ゾ直^ニ誓^シ來^迎。十^念因^外

雖^レ無^ニ別^事。以^テ佛^願力^一必^垂引^接。設^ヒ以^テ十

p.63a

唐捐||空虛・虛妄

道珍||続本朝高僧伝十六

捐ならん。況や若し人有りて我深く彌陀彌勒に歸す、佛力

不空にして必ず來迎を得んと思ひて、此の決定の意樂に住して能く念佛

等を行ずるの人は、多くは是れ已に苦提心を發すなり。佛の不可思

議の功德に於て已に深信するが故なり。若し猶預の輩、疑心を改めず

實願を起さずして、徒らに佛力を守て空しく一期を送るは、恐らく多く

成らざらん。是の如き緩慢の人若し暫時に祈念して、先づ道心を求むれば、多くは

皆發得す。始めて勇猛を起して、決定の信を生ずる。豈に最要ならずや。

何に況や往生の業因は機に隨て不同なり、其の甘露を探り得るは多く是れ

冥の加被力なり。而るに末代多く佛には彌陀彌勒と云ひ、經は法

華般若と云ふ。行には念佛轉經と云ふ。生には安養知足と云ふ。十の

八九は相應すべきと雖も、餘は必ずしも知らず。或は又大分

念佛等を修して餘事を加ふべし。彼の道珍禪師は温室を設けて

僧を浴すの比般若を書する等なり。是の如く衆多なり。且く冥の

告を仰ぐ。凡そ發心の徳は猶し大地の如し。萬善萬行皆此に依て

生ず。未だ實心を發さずして先づ大行を起すは、足無くして大山に向ふが如し。

穢器に清水を盛るに似たり。總じて得るべからず。先づ眞金を求め畢りて。

後に環と爲し簪と爲し心に隨て自在なり。發心の善を以て諸

願を成就すること亦復た是の如し。已發心の人は設ひ世事を習犯して、徒らに

欲塵に快樂すとも、大善身に在れば多く勝果を感ず。未だ實に發趣せずは、

三乗中に於て既に現機に非ず。纔に世福を感じ出離に及ばず。佛

設ひ救はんと欲すとも因縁微薄なり。念佛等の善、罪を滅すること大なりと雖も、正

願正因猶を具足せず。未だ一渠をも鑿ずして豈に願海に通ぜん。未だ

勝種を殖えずして何ぞ花菓を期せむ。問。彌陀の十念來迎の

願に、未だ發心の有無を論ぜず。若し苦提心を發せずして生ずることを

得ざれば、先づ須く發心を勸むべし。何ぞ直ちに來迎を誓はん。十念の因の外に

別事無しと雖も、佛の願力を以て必ず引接を垂れたまふ。設ひ十

念^ヲ可^レ爲^ニ發^シ心^ト。發^シ心^ハ已^ニ假^シ設^{ナリ}。不^レ用^ニ發^シ心^ヲ。發^シ心^ハ何^ニ爲^ス。豈^ニ於^テ弘^ニ誓^ニ輒^ク加^フ餘^ニ緣^ヲ耶。答。佛^ノ界^ハ甚^ニ深^{ナリ}。輒^ク難^シ推^シ知^シ。今^於自^行纒^ニ致^ス思^慮。造^ス惡^ノ凡^夫。本^{ヨリ}暗^ニ因^果。最^ニ後^ニ臨^ニ終^ニ始^メ聞^ク善^ニ知^識ノ語^ヲ者^ハ。於^テ彌^陀如^來ノ不^レ可^レ思^議威^神ノ功^徳忽^ニ生^シ決^ス。定^ノ信^ヲ。若^ク具^シ十^ノ念^ヲ必^ニ生^シ淨^ニ土^ニ。必^ニ成^ス佛^道。於^テ如^レ此^ノ一^ノ所^レ說^ニ總^{シテ}無^{シテ}疑^惑。隨^テ語^ニ信^テ故^ト。即^チ發^シ苦^ヲ提^心已^ル須^臾ノ願^力眞^實最^ニ重^{ナリ}。佛^力早^ク通^ス。都^鄙ノ士^女當^代ノ道^俗有^ニ宿^善故^ニ值^ニ遇^{シテ}此^ノ法^ニ。自^リ少^ク年^ニ來^タ任^運隨^順。不^レ利^根故^ニ及^ニ疑^惑。無^實智^ノ故^ニ不^レ能^ク印^可。只^以土^ノ風^ノ整^信行^ス耳。何^日ヲ爲^ニ發^シ趣^ノ之^日ト。何^レ心^ヲ爲^ニ苦^提之^心ト。設^ヒ雖^モ晦^ニ迹^ヲ於^テ山^林。遁^ル名^ヲ於^テ朝^市上^ニ。只^於世^ノ事^ニ評^定是^ニ非^ト。先^ツ去^テ纏^繞。纒^企初^門所^修之^行。事^多又^從舊^ニ。本^{ヨリ}無^ニ邪^見。今^無正^念。如^レ此^ノ人^ノ臨^終自^唱佛^號數^過十^返。定^テ過^テ三^界可^レ生^シ淨^土耶。否^ヤ。不^レ知^ニ他^人。於^ハ己^ニ難^レ信^シ。如^ク愚^カ度^ラ者^多ク生^ハ人^天。宿^習力^ノ故^ニ重^テ值^ニ善^緣。漸^ク發^{シテ}勝^心。二^三生^等に宿^願を果^シ遂^ケ宿^願。是^レ猶^勝事^{ナリ}。人^不可^レ不^ハハル^悦。而^ニ看^テ平^生願^ヲ兼^テ知^{コト}如^レ此^ノ。昔^ハ是^レ猶^預。然^ル是^レ長^時所^行雖^モ不^レ改^易。已^ニ其^外必^須祈^テ請^道心^ヲ。或^ハ又^專先^求發^心。親^ニ近^シ善^友。問^ク其^相。歸^ニ依^テ三^寶。乞^ヒ求^フ其^願。若^ク靈^驗ノ寺^若權^化ノ神^祇至^レ誠^ヲ啓^シ志^ヲ。責^メ理^ヲ勵^メ力^ヲ。一^切願^中此^ノ願^無謬^リ。已^ニ今^ノ心^中此^ノ心^可勝^ル。暫^時無^ク驗^勿敢^テ退^屈。一^旦感^不以^レ爲^レ足^ト。忽^ニ有^ニ夢^想等^一。是^レ勵^後心^{ナリ}。

p.63b

*輒||輒講録

*整||整(講録)

纏繞||煩惱

念を以て發心と爲すべくとも、發心已に假設なり。發心を用ひざれば、發心何にか爲ん。豈に弘誓に於て輒く餘縁を加へんや。答。佛界は甚深なり。輒く推知し難し。今自行に於て纒に思慮を致すに、造惡ノ凡夫は本より因果に暗し。最後臨終に始めて善知識の語を聞く者は、彌陀如來の不可思議威神の功徳に於て忽ちに決定の信を生ず。若し十念を具ふれば必ず淨土に生じ、必ず佛道を成ず。此の如き一ノ所說に於て總じて疑惑無くして、語に隨て信ずるが故に、即ち菩提心を發し已る。須臾の願力眞實にして最重なれば、佛力早や通ず。都鄙の士女當代の道俗宿善有るが故に此の法に値遇して、少年自り來た任運に隨順す。利根にあらざるが故に疑惑に及ばず。實智無き故に印可すること能はず。只だ土風を以て整へ信行するのみ。何れの日をか發趣の日と爲す。何れ心をか菩提の心と爲す。設ひ迹を山林に晦くして名を朝市に通ると雖も、只だ世事に於て是非を評定して、先づ纏繞を去りて、纒に初門所修の行を企る。事多は又舊に従ふ。本より邪見も無く、今正念も無からん。此の如き人臨終に自ら佛號を唱へて數十返を過ぎん。定んで三界を過ぎて淨土に生るべきや否や。他人をば知らず。己に於ては信じ難し。愚か度らひの如き者は多くは人天に生ずべし。宿習力の故に重ねて善縁に値ひて、漸く勝心を發して、二三生等に宿願を果し遂げむ。是れ猶を勝事なり。人悦ばざるはあるべからず。而るに平生の願に看て、兼ねて知ること此の如し。昔は是れ猶預す。然るに是れ長時なり。所行は改易せずと雖も、已に其の外に必ず須く道心を祈請すべし。或は又専ら先づ發心を求めて、善友に親近し、其の相を問ひ知りて、三寶に歸依し、其の願を乞ひ求めよ。若しは靈驗の寺、若しは權化の神祇に誠を至し志を啓し、理を責め力を勵まさば、一切の願中に此の願は謬り無し。已に今的心中に此の心勝るべし。暫時に驗無くとも敢て退屈すること勿れ。一旦に感有らむに以て足ぬと爲さざれ。忽ちに夢想等有れば、是れ後心を勵ますなり。

不^ニ已^ニ成就^{セリ}。或^ハ又^ハ魔界方便^{シテ}起^レ慢^ヲ。知^レ已^テ可^ニ彌勇猛^{ナル}。已^ニ知^レ我^カ心中^ヲ故^ニ。設^ヒ爲^リ魔界方便^ニ以^レ之^ヲ。可知^ニ我願^ヲ。又有^ニ實魔^一多^ク見^レ勝事^ヲ欲^ス障礙^セ故^ニ。設^ヒ若^シ冥朦^ニ無^ク勝利^一者^ヲ。彌勵^{シテ}其心^ヲ可^レ致^ス祈請^ヲ。我心^猶不^レ起^ル。佛界何^レ不^レ助^ル。又此事^猶無^ク果^ス。何況^ニ以^レ已^前所作^ヲ可^レ生^ス淨土^ニ耶。以^テ不^レ得^ル可^ニ默止^ス者^ヲ。自^レ本^可不^レ祈^ル。不^レ同^ニ世間^ノ官福^ノ所求^ニ。彼業力^{決定}多^ク難^ク轉^ス故^ニ。世俗^ノ所求^ヲ佛未^ニ必^シ助^ム故^ニ。有^レ罪^ノ福果^ハ龍天惡^レ之^故。於^テ無^上菩提心^一者^ヲ最上^ノ功德無邊^ノ福利^{ナリ}。一念^ノ之中^必爲^ル一切衆生共^ニ歸依^{スル}處^ト。我若^シ發心^{セバ}。屬^ス我^ニ無量無邊^ノ衆生得脫^ヲ將近^ク。善種漸^ク動^{セン}。國土^ノ中若^シ有^ク菩薩^一者^ヲ。一切^ノ龍天悉^ク蒙^ル其益^ヲ。國土^ノ人民資益無量^{ナリ}。設^ヒ我^レ一人雖^{トモ}可^ニ得脫^{シテ}永離^ニ生死^ヲ。佛天^ハ必^ス助^ム。況^ヤ展轉^ノ巨益無窮無量^{ナル}耶。若^シ不^レ與^ハ此^ノ事^一可疑^ニ三寶^ヲ。一生^ノ所作空^{シテ}無^ク果利^一。後日^ノ所作疑惑^{シテ}懈^ル。設^ヒ有^ニ宿惡^ノ餘殘^一不堪^ニ發心^ニ者^ヲ。三寶^早示^レ之^ヲ。今世^ニ不^レ懺悔^一。後生^ニ又^ハ可^レ障^ル。或^ハ有^ニ殊勝功勳^ノ之^可爲^レ我要^ト者^ヲ必^ス教^ヘ之^ヲ。此^ノ時^ニ不^レ聞^又期^二何^ノ時^一。衣服資具^ハ隨^テ堪淨潔^ニ。惡緣^ノ障礙^ハ力遠離^{セヨ}。於^レ日^於月^ニ窺^ヒ閑寂^ノ時^ヲ。向^テ尊像^或舍利^或大乘經典祕密神呪等^ニ。手^ニ執^リ香爐^不飾^ラ事^ヲ。不^レ調^ヘ詞^ヲ。慇懃^ニ啓^セ三寶^諸天^ニ。其^ノ思^若若^シ染^ミ肝^ニ徹^シ身^ニ。或^ハ流^シ泪^シ或^ハ毛豎^セ。必^ス定^メ有^ニ勝利^一。設^ヒ本性容預^ノ之^{人心}無^ク猛利^ノ願^一。於^テ前^時時^ノ姪^欲欲^ノ境界若^シ瞋^恚等^ノ事^一。校^量其^ノ分^ヲ。心中^ノ祈念

p63c

官福||官の福利?

堪||天のこと

豎毛||恐れの爲毛髪が逆立つ

已に成就せるにあらず。或は又魔界方便して慢を起す。知り已りて彌勇猛なるべし。已に我が心中を知るが故に、設ひ魔界方便爲りとも、之を以て我が願を知るべし。又實魔有り。多くは勝事を見て障礙せんと欲するが故に、設ひ若し冥朦にして勝利無くば、彌よ其の心を勵まして祈請を致すべし。我が心猶を起きずんば、佛界何ぞ助けざらん。又此事猶を果すこと無くば、何に況や已前の所作を以て淨土に生ずべけんや。得ざるを以て默止すべくは、本自ら祈らざるべし。世間の官福の所求に同ぜず。彼は業力決定して多く轉じ難きが故に。世俗の所求をば佛未だ必ずしも助たまはざるが故に。有罪の福果は龍天之を惡むが故に。無上菩提心に於ては最上の功德無邊の福利なり。一念の中必ず一切衆生共に歸依する處と爲る。我若し發心せば、我に屬する無量無邊の衆生の得脫將近く、善種漸く動ぜん。國土の中若し菩薩有らば、一切の龍天悉く其の益を蒙る。國土の人民資益無量なり。設ひ我れ一人得脫して永く生死を離るべしと雖も、佛天は必ず助けん。況や展轉の巨益無窮無量なるをや。若し此の事與へたまはずは、三寶を疑ひたてまつるべし。一生の所作空くして果利無くば、後日の所作疑惑して懈るべし。設ひ宿惡の餘殘有りて、發心に堪へずば、三寶早く之を示したまへ。今世に懺悔せずば、後生にも又障るべし。或は殊勝功勳の我が要と爲すべき有れば、必ず之を教へたまへ。此の時に聞かずば又何の時をか期せん。衣服資具は堪に隨て淨潔にし、惡緣の障礙は力を勵まして遠離せよ。日に於て月に於て閑寂の時を窺ひ、尊像或は舍利或は大乘經典祕密神呪等に向ひて、手に香爐を執り事を飾らず、詞を調へず、慇懃に三寶諸天に啓せよ。其の思ひ若し肝に染み身に徹し、或は流涙し或は毛豎せば、必ず定んで勝利有るべし。設ひ本性容預の人心に猛利の願無くも、前の時の姪欲の境界若しは瞋恚等の事に於て、其の分を校量するに、心中の祈念

不劣世事。於己爲足。若又勝妄境。可知。宿習淳熟之身也。設一日二日其行微劣。漸

欠必昇進。後後定猛利。若官學無假。公私怠

墮難企別行。或寢臥床上或男女會中。設不

備威儀。不淨手口。只以實心常祈佛神。

漸離妄緣。必發道心。多聞其人。未代未空。

何況求名利。望欲境。未必嫌時。未必顧

障。發心祈願何。顧障礙。問。般若經是第

二時偏空教。不了非究竟說。諸佛菩薩何故

必依此教。生答。莊嚴論云。大乘無異。體

是一故。淨影云。諸大乘經。淺深無異。唯識

章列。唯識異名。般若經中。名簡擇性。一名爲

般若波羅蜜多。龍樹云。般若是一法。佛說種種

種名。隨諸衆生力。爲之立異字。方知諸大

乘經。體是一法。義無淺深。而於三性門。隱

有說空。對不定姓。隨詞墮邊。故爲不了。

是一門也。若於六度。般若爲究竟。萬行皆

是六度所攝。般若萬善導首。經中具說法

喻二門。廣百論云。眞理非空。空爲門者。眞

理非有。有應有爲門。隨機說門。有亦無過。然

非門義。須在於空。有有等皆順執心。空

空等皆違妄執。故有智者。聞說空言。應

離一切有無等執。章云。說要觀空。方證眞

者。謂要觀彼遍計所執。空爲門。故入於眞

性。所謂遣虛存實。唯識觀也。故世親建立唯

識廣說三性。非唯會違。唯識必依三性道

*姪媯(講録)

*欠次・假暇(講録)

世事に劣らざれば、己に於て足ぬと爲す。若し又妄境に勝れば、

宿習淳熟の身なりと知るべきなり。設ひ一日二日其の行微劣なりとも、漸

次に必ず昇進す。後後には定んで猛利ならむ。若し官學に暇無くして、公私に怠

墮して別行を企て難きは、或は寢臥床の上或は男女の會の中にして設ひ

威儀を備へず、手口を淨しをせずとも、只だ實心を以て常に佛神に祈らば、

漸く妄縁を離れて必ず道心を發すべし。多く其の人を聞きて未代未空しからず。

何に況や名利を求め欲境を望むには。未だ必ずしも時を嫌はず、未だ必ずしも

障を顧みず。發心の祈願何ぞ障礙を顧ん。問。般若經は是第

二時の偏空の教、不了にして究竟の説に非ず。諸佛菩薩何故ぞ

必ずしも此の教に依て生るるや。答。莊嚴論に云く、大乘は異なること無し。體

是れ一なるが故に。淨影の云く。諸大乘經は淺深異なること無し。唯識

章に唯識の異名を列するに、般若經の中に簡擇性の名を名けて

般若波羅蜜多と爲す。龍樹の云く、般若は是れ一法なり。佛種

種の名を説きたまふ。諸の衆生の力に隨て之が爲に異の字を立つ。方に知ぬ諸大

乘經は體是れ一法なりと。義の淺深無し。而るに三性門に於ては

有を隱して空と説く。不定姓に對しては詞に隨て墮するが故に、不了と爲すと。

是れ一門なり。若し六度に於ては般若を究竟と爲し、萬行は皆

是れ六度の所攝なるが故に、般若は萬善の導首なり。經中に具に法

喻二門を説く。廣百論に云く、眞理は空に非ざれども空を門と爲せば、眞

理は有に非れども有を門と爲すべし。機に隨て門を説くは有も亦過無し。然れども

非門の義は須く空に在るべし。有は有等を有して皆執心に順ず。空は

空等を空じて皆妄執に違す。故に有智者は空と説く言を聞きて

一切の有無等の執を離るべし。章に云く、要ず空を觀じて方に眞を證すと説くことは、

謂く要ず彼の遍計所執を觀じて、空を門と爲るが故に眞

性に入る。所謂、遣虛存實の唯識觀なり。故に世親唯

識を建立して廣く三性を説く。唯だ違を會するのみに非ず。唯識は必ず三性の道

理^ニ。三性^ハ必依^ニ無性^ニ悟入^{スル}カ。故^ニ問^フ。大部^ハ廣博^{ナリ}何^ヲカ爲^ム最要^ト。答^ス。第九第十^ノ之^ノ兩會^ノ中^ニ略^{シテ}取^リ肝^ヲ心^ヲ。第九^ノ能斷^ニ金剛^分遣^ハレ^{コト}執^ヲ究竟^{セリ}。第十^ノ般若^理趣^分顯^{コト}理^ヲ最勝^{ナリ}也。名^ニ總會^{諸門}顯理^{趣集}修^行諸門^ト。故行^ニ此法^ハ必具^ス六度^ヲ。後^ノ六會^ハ則爲^ニ理趣^{法門}說^ト故。又般若^{心經}。文縮^{メテ}一紙^ニ。旨^ヲ包^ニ大部^ヲ。觀自在^{度度}授^ニ與^シ玄奘^{三藏}。自告^テ云^ク。我^レ持^ツ三世^{諸佛}心要^{法門}。汝若^シ受持^{セバ}。依^テ其^ノ威力^ニ方^ニ傳^ニ大法^ヲ。心要^ノ名^ニ在^リ彼^ノ經^ニ。三藏^誦持^{シテ}去^リ西途^ノ難^ヲ。鬼神^ハ發^{スル}聲^ヲ恐^レレ^テ經^ヲ不^レ近^カ。中宗^ノ流轉^只此^ノ經^ノ力^{ナリ}。故^ニ三藏^{臨終}唱^テ云^ク。色蘊^{不可得}。受蘊^{不可得}。想蘊^{不可得}。行蘊^{不可得}。識蘊^{不可得}。復^無餘^言。慈恩^{大師}手^書金字^ノ般若^{心經}。自^ラ登^ニ五臺^山。詣^ニ文殊^{之所}。文殊^{現身}示^ニ宿世^ノ因^ヲ。方^ニ知^ヌ高祖^{深歸}。般若^{心經}及^ビ文殊^{師利}。末學^可從^フ矣。何以^カ諸^ノ大聖^ノ中^ニ以^テ彌勒^{文殊}爲^ニ我^ノ本尊^ト者。文殊^ハ是^レ釋尊^{九代}高祖^{ナリ}。彌勒^ハ亦^ハ一^ニ生^ニ補處^{ナリ}。受^ニ菩薩^戒此^ノ二聖^ヲ爲^ニ阿闍梨^及教授^師。結^ニ集^給大乘^ヲ二聖^ノ恩德^{ナリ}。諸教^ノ中^ニ般若^{唯識}爲^ニ我^ノ持誦^ト。般若^ハ是^レ修多羅^藏。一切^ノ諸經^自此^ノ經^ニ出^テ。含^ニ藏^{無量}功德^ヲ。誦^ニ持^{スル}一句^ヲ福滿^ニ虛空^ト。智斷^ノ源^是爲^ニ究竟^ト。唯識^ハ是^レ阿毘達磨^{ナリ}。決^ニ擇^{シテ}性相^ヲ教^ニ誠^ス學徒^ヲ。即是^レ般若^{波羅蜜}。唯識^ノ諸教^ノ所^レ不^レ如^也。天親^ノ三十頌^ハ。千部^論中^ニ最後^ニ造^レ之^ヲ。論主^自命^ニ門人^ニ常^令誦^ニ開^之。三十頌^ノ中^ニ有^漏唯識^ハ是^レ諸識^{轉變}ノ句^ヲ以^テ爲^ニ指歸^ト。

中宗 || 中道唯識宗
轉 || 傳の意？

理に依る。三性は必ず無性に依て悟入するが故に。問。大部は廣博なり何をか最要と爲む。答。第九第十の兩會の中に略して肝心を取る。第九の能斷金剛分は執を遣ること究竟せり。第十の般若理趣分は理を顯すこと最勝なり。總會諸門顯理趣集修行諸門と名く故に、此の法を行すれば必ず六度を具す。後の六會は則ち理趣法門の説と爲るが故に。又般若心經は、文一紙に縮めて、旨大部を包みたり。觀自在度度玄奘三藏に授與したまへり。自ら告げて云く、我れ三世諸佛の心要法門を持つ。汝若し受持せば、其の威力に依て方に大法を傳へんと。心要の名彼の經に在り。三藏誦持して西途の難を去りたまふ。鬼神は聲を發するに經を恐れて近かず。中宗の流轉只だ此の經の力なり。故に三藏臨終に唱へて云く、色蘊不可得、受蘊不可得、想蘊不可得、行蘊不可得、識蘊不可得なり。復た餘言無かりき。慈恩大師は手ら金字の般若心經を書して、自ら五臺山に登りて、文殊の所に詣す。文殊現身して宿世の因を示したまふ。方に知ぬ高祖深く般若心經及び文殊師利に歸したまへり。末學從ふべくのみ。何を以てか諸の大聖の中に彌勒文殊を以て我が本尊と爲すならば、文殊は是釋尊九代の高祖なり。彌勒は亦一^ニ生^ニ補處^{ナリ}。菩薩戒を受くるには此の二聖を阿闍梨及び教授師と爲す。大乘を結集し給ふは二聖の恩德なり。諸教の中には般若唯識を我が持誦と爲す。般若は是れ修多羅藏なり。一切の諸經は此の經自り出でて、無量の功德を含藏せり。一句を誦持する福虛空に滿つ。智斷の源、是を究竟と爲す。唯識は是れ阿毘達磨なり。性相を決擇して學徒を教誡す。即ち是れ般若波羅蜜なり。唯識の諸教の如かざる所なり。天親の三十頌は、千部論の中最後に之を造る。論主自ら門人に命じて常に之を誦開させたまふ。三十頌の中には有漏の唯識は是の諸識轉變の句を以て指歸と爲す。

證入ノ最極ハ此即無漏界ノ一偈ナリ。此偈ノ中ニハ亦取ニ法ノ一字ヲ。大覺世尊無量無邊劫ニ修習マヘリ阿耨多

羅三藐三菩提法ヲ。蓋シ此ノ三點圓滿最極ノ法也。

初發心ノ時求レ住ニ唯識一豈非ニ此法一耶。大經ハ在リ

色即是空空即是色受想行識等亦復如是ノ四

句一。四句ノ中ニハ空ノ一字ナリ也。菩薩ノ覺母如來ノ正體ナリ也。

蓋シ在ニ空ノ一理ニ。結セ要者。依テ覺母ノ力ニ發シ菩提心ヲ。

依テ菩提心ニ成シ就シ念佛ヲ。依テ念佛ノ力ニ成シ唯識觀ヲ。

依テ唯識觀ニ制シ伏シ一心ヲ。依テ制シ伏スル一心ヲ成シ就シ三

學ヲ。依テ成就スル三學ヲ具シ足シ二利ヲ。具シ足シ二利ヲ證シ

得シ菩提ヲ。證シ得シ菩提ヲ演シ說ス聖教ヲ。因テ圓果滿蓋シ

在レ此ニ矣

心要鈔 終

p64b

『心要鈔』(大正七十一 p.50c-64b)

三點ニ法身・般若・解脫の三事

證入の最極は此れ即ち無漏界の一偈なり。此偈の中には亦法の

一字を取る。大覺世尊無量無邊劫に阿耨多

羅三藐三菩提法を修習したまへり。蓋し此れ三點圓滿最極の法なり。

初發心の時、唯識に住することを求むる、豈に此の法に非ずや。大經ハ在リ

色即是空空即是色受想行識等亦復た如是の四

句に在り。四句の中には空の一字なり。菩薩の覺母如來の正體なり。

蓋し空の一理に在り。要を結せば、覺母の力に依て菩提心を發し、

菩提心に依て念佛を成就し、念佛の力に依て唯識觀を成し、

唯識觀に依て一心を制伏し、一心を制伏するに依て三

學を成就し、三學を成就するに依て二利を具足し、二利を具足して

菩提を證得し、菩提を證得して聖教を演說す。因圓果滿蓋し

此に在り

心要鈔 終

『心要鈔』(増補改訂『日本大藏經』第六十三卷・法相宗章疏(一)所収)